Blue Bird,

Blue Rain,

And Blue Sky.

…And Heavenly Blue.

Pixiv 小説再録集 NO.4

目次

Blue Bird..... 3

Blue Rain..... 81

Blue Sky..... 115

Heavenly Blue 225

あとがき..... 258

Attention!

※モブスレ描写があります

※スレインの、モブとの性行為を匂わす表現があります。

※死ネタ中心です。

※アセイラム中心に、各方面の地雷を踏み抜いています。

Blue Bird

～青い鳥のすみか～

【2017-07-28】

扉の前に立つと、それは意思があるように開いた。瞬間、隙間から不思議な空気が溢れ出す。少女は眩しさに目を閉じた。おそるおそる瞼を開けると、様々な色が視界に飛び込む。赤、黄色、ピンク、白、紫、青…鮮やかな花々と、幾層もの色調を成す木々の緑。見上げると、生い茂った葉の間から帯状の光が差し込んでいた。空は青い。ふわりと肌を包む空気は、瑞々しい草花の香りを含む。湿った、生命の匂いだ。

きっと、これは地球の匂いだ。

「綺麗な場所だわ…」

高い所に三つ、小さく動く影が見えた。目で追いかけると、背景の空に凹凸があることに気付く。よく見ると、点のような小さな嵌め殺しの窓が等間隔で並んでいる。

晴れやかな青空は、ドーム型の天井に描かれていた。

白い石畳の小道を歩いた。噴水から、透明な水が吹き上がる。手を浸すと冷たい。水面は飛沫で波紋が広がり、常に波立っていた。先を見ると、道々に白いガーデンチェアが設えてある。その幾つかに時折腰かけ、天を仰ぎ、光を浴び、美しい花々に顔を近づけた。どれも、初めての経験だった。花は、とても良い香りがした。

「花の匂い。地球の匂いなのね」

だんだんと細くなる、曲がりくねった小道の先。庭園の片隅に、白いガゼボが現れた。数段の階段の上、六つの柱が円周上に等間隔で立ち並ぶ。丸い屋根は細い金属で、緑の蔦が複雑に巻き付いていた。

柱と一体化したベンチに、人が座っている。楽な姿勢で腰掛けて、本を読んでいた。少女の場所からは、その姿は遠く小さくしか見えないが、葉を翳め届く淡い光に金色の髪が輝いて見えた。少女は呟いた。

「なんて綺麗なひとなのかしら…」

導かれるように近づく。階段に足を乗せると、彼が気付き顔を向けた。二人の視線が重なる。その人は驚いたように目を丸く見開き静止した。

白い顔だった。火星人は肌が白いけれど、もっとずっと白い。青くて質素な服を着ている。短い裾から覗く手足は細く直線的で、裸足の足元は白い床と一体化するかのように白かった。足の甲に青白い血管が浮き出て、踝が硬く出っ張っている。美しい造形は精巧な彫刻のように思えた。

少女は階段の上で立ち尽くし、二人の間に時が止まるような沈黙が訪れた。

「…ねえ、ここのひと？」

少女が話しかけると、困ったような表情を浮かべた。切れ長の目が細められ、眉尻が下がる。口元が微かに綻んだのを見て取り、少女はたたた、と階段を駆け上がりその人の隣に座った。首を伸ばして、じいっと瞳を覗き込む。瞼縁の中心で、薄いグリーンの瞳が冬の湖面のように揺れた。さらに顔を近づけると、彼はおずおずと身を引いた。背中が柱にぶつかり、痛そうに眉を顰める。淡い金の髪が細い束になって、肩からふわふわとこぼれ落ちた。

「ここはどこ？　あなたのおうちは？」

碧の瞳のその人は、何も言わずに少女を見返す。大人の人だけれど、不思議な人だ。少女の身近に、こんな大人はいない。子どもに見つめられて、まっすぐ見つめ返すことができる大人なんて一人も。

「おうちがわからないの？」

聞くと、彼は首を傾げ、ゆるゆると首を振った。

「じゃあ、どうして捕まっているの？」

少女はガゼボの柱に施された意匠をなぞる。ひやりと冷たい。見上げると、華奢で典雅な屋根

の隙間から、ドームの天井に塗られた青色が見えた。
「わたし、知っているわ。この場所の形。絵本で見たのと、そっくり」
チルチルはミチルと、青い鳥を探しにいくの。その手に持っていた道具に似ているわ。
「どうして捕まっちゃったの？　あなたがあんまり綺麗だから、だれかが独り占めしているの？」
思いついたままそう言うと、その人は目を泳がせて考え込み、そうして、また首を振った。
「いいえ」
喋った。低くて、柔らかい声だった。不思議と、懐かしい感じがする。瞼は固く閉じられたまま、睫毛が震えた。泣いてしまうのではないか、と緊張したが、睫毛は細く放射状に広がって乾いていた。
「自分の意志で、ここにいます。私は、とても悪いことをしたのです」
「うそ！」
あんまり悲しそうに笑うものだから、少女は彼に抱きついた。電流が流れたようにびくりと体

が震えたが、ぎゅうっと腰に回した手に力を入れる。その人の両手が空を彷徨い、花びらのように静かに少女の肩に下ろされた。あたたかい手だった。

「ほら、やさしい。悪い人は、子どもがきらいなのよ」

ぱっと離した大きな手を、少女は捕まえてぎゅっと握る。力を失い小さく震える手を見る。

大人なのに、何をそんなに怖がっているのだろうか。

「優しさが、罪となることもあるのです」

「…よくわからないけど、それって、悪いことなのかしら?」

少女の言葉に、彼は小さく頷いた。

チイ、と鳴き声がして見回す。彼の足元に鳥がいた。初めて見る小さな生き物に、少女は喜びぴょん、と立ち上がる。しゃがんで手を伸ばそうとすると、小鳥はバタバタと翼をはためかせ外に飛び上がってしまった。名残惜しそうに、少女が追いかけて空を仰ぐ。小鳥は、青い天井を目がけ羽ばたきを繰り返す。

行ってしまった。少女は振り向き、ベンチに座ったままのその人に駆け寄る。

「ねえ、このお庭で遊びましょう!」

彼の手を握り、こっちこっち、と引っ張る。振り解くこともせず、されるがままに歩みを進めるその人は、温かな眼差しを少女に注いだ。少女はこんな風に優しく、綺麗な大人に会ったのは初めてだった。

「お花の名前を教えて」

手近にあった黄色い花を指さすと、マリーゴールド、と教えてくれた。かわいい名前、というと、ええ、と目を細めてくすぐったそうに笑う。素敵な笑顔で、もっと見たくなった。

「この赤いのは？」

「アスター」

「これは？」

「アネモネ」

「ねえ、これは？」

「シクラメン」

踊るように小道を駆けて、花を次々と指し示す。彼は、穏やかな声で全ての花の名前を教えてくれた。

「鳥が飛んでいるみたい！　これは？」
白い、ギザギザした形の花びらだった。
「サギソウ。鷺というのは鳥の名前です」
白い花びらを摘まむ。繊細な形。羽のような部分を指で撫でる。
「鳥？　さっきの鳥といっしょ？」
少女は、先ほど足元から飛び立った小さな鳥を思い出す。
「違います。色も違うでしょう。さっきのは、瑠璃鶺という鳥です。鷺はずっと大きくて、首が長い」
大きな鳥、と聞いて少女はどきどきした。どのくらい大きいのだろう。あんまり大きいと、少し怖いかもしれない。
「そうなのですか。鳥と言っても、いろんな種類があるのですね」
他にも、赤とか、黄色とか、ピンクとか。綺麗な色の鳥がいるのだろうか。青空を舞う、鮮やかな鳥の群れを想像する。
「はい。中には、空を飛ばない種類の鳥もいます」

「あら、どうして？」
翼があるのに飛ばないなんて不思議で、少女は聞いた。
「生きるために、選択したのでしょう」
大きな翼をたたんで、地面を歩く鳥の姿を想像する。
「翼があるのに？　かわいそうね」
少女の言葉に彼は優しく微笑んで、何も言わなかった。
だって、飛べないのならどうして翼があるのかしら？　きっとすぐに、死んでしまうんじゃないかしら。
言葉少なに歩いていくと、ぶわりという感触。濃厚で、馨しい空気に包まれた。湿った艶やかな花びらが、数え切れないほど咲き誇っている。
「まあ、きれい！」
少女は興奮しぴょんぴょん飛び跳ね、花の咲き乱れる垣根に指を伸ばした。花に触れる前に、白い手にそっと指を包まれる。
「棘に、気を付けて」

手を包まれたまま、その人の顔と花を交互に見る。青い豪奢な花から伸びる緑の茎は、つるりとしていた。
「棘なんてないわ」
少女は腕を伸ばし指先でぱき、と一輪の青い薔薇を摘み取った。手の中でさらに強くなる香りを胸いっぱいに吸い込んで空を見上げる。緑の木々の間を、小さな影が横切った。
「あれは？」
「さっきの瑠璃鶫です」
青い小さな生き物は、一羽だけで追いかけっこをしているようだ。空中を旋回する。少女が声を上げた。
「あんなに高い！　素敵だわ！　…あ、天井にぶつかっちゃった。もっと、広い場所ならいいのに」
ふらふらと高度を下げる鳥を目で追いながら少女が呟くと、隣の人は首を振った。
「そうとも限りません。行く先がなければ、高くて広い空は孤独です」
「悲しいことを言うのね」

だって、飛べないなんてかわいそうよ。
彼は眉を下げて寂しそうに笑った。憂いを帯びた瞳が少女の握りしめた花を見つめる。
「これは、薔薇」
少女も視線を追って花を見る。近くで見ても、何枚か分からないくらい、沢山の花びらだ。深い青色は水気を帯びてきらきらと光っている。
「薔薇…。きれいだわ」
「不可能」
「え？」
聞き取れなくて、少女は聞き返した。彼は膝をつき、上目遣いに視線を合わせてくれた。
「花言葉といって、その花に与えられたシンボルです。青い薔薇は、自然界には存在しません。人工的に作ることも不可能とされるほど難しい花なのです」
もう一度手元の花をじっくりと見て、垣根で咲き誇る青い薔薇たちを眺める。どの花も、光を浴びて美しく輝いていた。
「だから、こんなにきれいなのね」

頷き、青年は立ち上がった。少女の手を引き、歩き出す。少女は花の美しさにうっとりとしたまま、手を引かれて歩いた。しばらく行くと、垣根の向こうに茶色い大きな扉が現れた。少女は青年を見上げる。いつのまにか繋いでいた手は離されていて、高いところにある瞳が少女の視線を眩しそうに受け止めた。彼は眉を下げて困ったように笑った。

「さよならです。もう、ここに来てはいけませんよ」

「どうして!?」

いや、と首を振る少女の頭を撫でて、彼の手が扉に触れた。

「これは夢です」

笑う顔が痛々しくて、少女はこの大好きな大人を傷つけてしまったようだ、と悟った。本当は帰りたくなどないけれど、がんばって我慢をしようと口をへの字に曲げ、長いドアハンドルに手をかける。

「不思議なことを言うのね」

少女の手によって扉は開き、隙間から光が溢れる。

外って、こんなに眩しかったかしら。少女が振り向くと、彼は目を細めていた。

「また来ます。あなたに会いに」

開いた扉の外側に出た少女は、ガシャンと重い錠が落とされる音を聞いた。開けようと、急いで両手で押したり引っ張ったりを繰り返すが、扉はびくともしなかった。

――どんどん、どん。

――――どん、どん、どん。

いつもの耳鳴りがする。

気が付くと、彼は赤い伯爵服を着ていた。いつもは履いていない靴も履いている。伸びっ放しの髪が襟や釦に絡まって鬱陶しい。背にはらう。いつの間に、こんなに伸びたんだろう。

ああそうか、今日か。

彼は安らかな気分で空を見上げた。ガゼボの中から見える、金具や蔓に切り取られた青空に目を細めた。たとえそれが紛い物だとしても。その青を瞼の裏に焼き付けるように固く目を閉じる。

「…その服は？」

小さいのが聞く。いつからか、隣に座っていたらしい。不安そうな顔をして見上げていた。何も言わずに首を振り、頭を撫でてやる。くしゃくしゃになった前髪の下で、大きな瞳が泣きそうに潤み、丈の長い袖で一度顔を拭った。ぐっと唇を噛みしめ、何も言わない。これは、そういう子どもだ。

「これを、あげます」
子どもが、自分の首にかけていたペンダントを外し、両手に乗せて目の前に突き出した。
「ご加護がありますように」
小さな手のひらから摘み上げ、その意匠を指でなぞる。
そうか、どこに置いてきたのかと思ったら、こんなところにあったのか。
それを首から下げて立ち上がる。歩き出すと、子どもは少し後ろをとぼとぼと付いてきた。
耳鳴りが大きくなる。どん。どん。どん。歩みを進めると、木々の間から大きな茶色い扉が現れた。扉が振動で小刻みに撓む。ずっと聞こえていたどんどんという音は、その扉からしていたと気付く。
扉の前に立ち、ハンドルに触れると重厚な扉は羽のように軽く開いた。眩しい光が差し込む。光の中から、見覚えのある青年が飛び出してきた。
「――――迎えに来た」
差し出された手を見ると、彼の手は爪も剥がれてぼろぼろで、真っ赤な血で染まっていた。手首を握られ、ねとりとした感触に胸がざわつく。手を引かれ走り出しながら振り返ると、外側の

扉は赤黒い色をしていた。
いったい、いつからあの扉を叩いていたのだろう。
白い大理石の階段を駆け上がる。広い場所だ。周囲は真っ白で、景色は何も見えない。靴底で硬い音を打つ階段を、連れ立って走った。すぐそこが天辺だ。十三段しかないのだから。
見なくても分かる。聞かなくても知っている。この先にあるのは…。
手を振り解こうとして喚く。掴まれた手に一層力が籠る。
「嫌だ。君は生きるんだ」
切羽詰まったような声で彼は言った。十三段目に彼の足が乗る。

――――パン。

軽い、乾いた音がした。
何の音だろう。そう思う間に彼が膝から崩れ落ちる。濃紺の背中に赤黒い染みが広がった。
「界塚…！」

スローモーションのように傾く。彼の体を支えようとして、足が縺れて転んだ。なぜか激しく咳き込んで、自分の口元に手をやる。掌に、べっとりと赤い血が付いていた。伊奈帆は床に伏せたまま微動だにしない。二人分の血で染まった、赤一面の床の上に倒れ込む。鉄の匂いに噎せ返り、口からごぽごぽと血が零れる。口の中は鉄の味がした。

赤く霞んで揺れる視界の先、断頭台が見える。黒く光る足が現れた。白い手に腕を抱えられ、一歩一歩を踏み出す。もう痛くもないし、それほど苦しくない。それに、何も聞こえない。

界塚は、どうなったのだろうか。そんなことを考え、仰向けにされ、断頭台に首が据えられる。ギロチンの刃が光を照り返し暴力的に輝いた。目を閉じると、自分の心臓が飛び出すように大きく脈打ち、今更ながら生きていることを懐かしむ。

界塚。あいつには、悪いことをした。迎えになんて来るからだ。胸を撃たれた。あの出血では、助からないだろう。

撃たれた？

…誰に？

――ヒュッ。

「ここは…」

噎せ返るような薔薇の香りがする。体を起こすと、赤、白、黄の薔薇が鮮やかに目に飛び込んできた。立ち上がり、ぐるりと周囲を見渡す。

丈の低い緑の木々と、鮮やかな花々。薔薇だけではない。百合、マリーゴールド、デイジー、牡丹、菫にラベンダー、桔梗、杜若、ポインセチア…。

そよ風がさわさわと葉を揺らす。近くに小川か噴水があるのだろうか、涼やかな水音がする。

あと――――。

……何の音だろう。

何か、木を叩くような鈍い音がする。耳を澄ませると、トントン、ドンドン、不規則に聞こえてきた。どこから聞こえているのかは、分からない。しかし耳障りな音でもないので、別のことに気を取られれば気にならないし聞こえない。綺麗な花とか。流れる水とか、頬を撫でる風や青い空とか。

整然と整備された庭園だ。人が歩く所は、白い石畳が丁寧に敷き詰めてある。立ち上がり、白

い小道を歩き出す。道の両側には、豪華絢爛な花園が広がっていた。春、夏、秋、冬。季節に関係なく咲き誇る花々に見蕩れ、立ち止まる。

綺麗な場所だ。初めてのはずなのに、どこか懐かしい。

ふと、自分の恰好を見下ろす。大きな服を着ている。ぶかぶかで、長い裾を折る。靴は履いていない。首のあたりが窮屈で触ると、細い金属の感触があった。大きく開いた襟ぐりから手を入れ探ると、首飾りが下がっていた。ペンダントトップに触ると、小さな傷が引っかかり、それが手に馴染む。手から離し難くて、胸の上で握ったまま歩いて行く。

白い蛇のような道を歩き続ける。石畳はすべすべして、素足にはひんやり冷たくて気持ちがいい。若木の青い匂いと涼やかな葉音に心が踊り、大きく息を吸い込む。澄んだ空気が胸を洗う。

…しかし、だれもいないのだろうか。

進むにつれて、道が細くなっている気がする。先に目を凝らすと、小さく鳥籠のような建物が現れた。建物というよりは、柱に屋根が乗っかっているだけの陽射し除けのような場所だ。地面に平行な輪が柱の内側をぐるりと一周して、その上に座れるように作ってある。

「人がいる」

柱に背を預け、腰掛ける人がいた。やっと人を見つけた嬉しさに、弾むように駆ける。数段の階段を登り、その人の全身が視界に入った。思わずそこに立ち竦む。

細身の身体に、金の長い髪。俯いているので顔はよく分からないけれど、柔らかな光と朧げな色彩に彩られた様子は神聖な絵画のようで、ぼうっと見入ってしまった。

綺麗だけれど、なんだか人間ではないみたいだ。

「あの…」

おそるおそる近づき、声を掛ける。本を読んでいた顔が持ち上がり、ゆっくりと視線が交わった。

極地で見るオーロラのような、不思議な色の目をしている。

目つきが鋭くて、思ったよりも近寄りがたい雰囲気だった。逸らすこともできず見つめていると、その人は苦いものを飲み込んだように顔を歪ませた。そのまま、口だけが三日月のように丸くなる。

「もう、そんなになるか」

予想外に優しい声に、勇気を出して話し掛ける。

「あの、ここはどこですか」
その人は本を閉じて、両手を膝の上で重ねた。鋭い視線が一度、ペンダントを握りしめたままの僕の左手に注がれた。
「どこだと思う」
そう言われて、周囲を見渡す。澄んだ青い空。草花に溢れ、花の馨しい香りに満たされている。そよ風が時折頬を撫で、せせらぎが耳に優しい。暑くも寒くもない。
ここはとても綺麗な場所だ。綺麗な花。綺麗な木々。綺麗な道。綺麗な水。綺麗な鳥籠に、近寄り難いけれど、綺麗な人。綺麗でないものは、一つもない。
「ここは、天国のような所ですね」
そう言うと、ははは、と笑い声がした。見ると目の前の人が口元に手を添え笑っている。立ち上がり、近づいてきた。体を固くして目を閉じると、大きな手でぽんぽんと頭を撫でられた。
「そうだね」
その人は目を閉じた。声は優しいのに、頬は乾いているのに、唇は微笑んでいるのに、なぜだか泣いているような気がして、僕は下を向いた。

ここは、不思議な場所だ。時が止まっているような気もするし、知らないうちにどんどん進んでいるような気もする。自分がいつ眠っているのかさえ、よく分からない。気が付くとあちらこちらのベンチに座り、寝転んでいる。一人でいる事もあれば、大きい人が傍にいる事もある。

大きい人に名前を聞いたが、分からないと言っていた。お前は、と聞かれて、そう言えば自分はどういう名前だったのだろう、と考えるが、思い出せない。…まあ、ここには二人しかいないから、名前がなくても別に困ることはない。

朝も夜もなく、食べ物もない。けれどお腹は空かないし、疲れたりしない。そういう、あまりにも不思議な事が多いので、どうやらこれは現実ではないらしいぞ、と考える。考えたところで、どうすることもできないけれど。

夢ならそのうち醒めるだろう。醒めない夢などないのだから。

大きいのは、僕が話しかけてもあまり喋らない。いつも本を読んでいる。分厚い硬そうな本を読んでいたり、小さなパラパラした本を読んでいたり。読んでいる時は、話し掛けても返事はない。それでも傍にいると、根負けしたように本を置いて話し相手になってくれた。

時々は二人で庭を歩いた。大きい人は、植物に詳しい。聞くと、何でも答えてくれた。

この花園を歩くのも何回目だろうか。もう花の名前も全て覚えてしまった。咲くことも枯れることのない花々を見て、やはりこれは夢のようだ、と思う。しかしたとえ夢であっても、ここに咲いている花は本当に綺麗だ。

「綺麗だなあ」

見事な薔薇に、思わず手を伸ばす。摘もうとしたわけでもないが、茎に触れる前、指先にちくりと痛みが奔った。

「痛っ」

引っ込めた指先から、血が丸く溢れる。慌てて吸うと、鉄の味がした。

「貴方を愛しています」

鉄の味に顔を顰めていると、大きい人の声が聞こえた。どきりとして、ばっと見上げる。彼は赤い花弁に指を伸ばし、触れないままその輪郭をなぞった。

「赤い薔薇の、花言葉」
その人があんまり悲しそうに笑うので、泣くのではないかと思った。大きい人の笑顔はいつも、泣き顔のように見える。薄く微笑んだ口元と、遠くを見る眼差し。見る度、どこかで辛い別れをしてきたのだろうか、と思ってしまう。
「誰か、もう、会えない人がいるんですか？」
「そう」
そういえば、自分だって一人ぼっちだ。この大きい人の他には誰もいない。
「でも、そんな人がいていいな。…僕は、誰のことも知らないから」
有り得ないとは思うけれど、僕の記憶には誰もいない。多分、これは夢だからだろうけど。
僕には、会いたい人も、会えない人もいないんだ。
とても寂しい気持ちになった。涙が出そうになって、腕に余る袖で顔を擦ると、肩にふわりと温かな感触。大きい人の手だ。
「そのうち、思い出すよ。いいことも。悪いことも」
大きいのは歩き出した。その背中を追いかける。指先の痛みは、いつの間にか消えていた。

――また眠っていたようだ。

気がつくと、鳥籠のような場所。「ガゼポというんだ」と大きいのが教えてくれた――に寝ていた。目を擦り腕を伸ばすと、何かに当たる。顔を巡らせた。隣に、大きい人が座っている。

驚いて飛び起きた。その人が、いつもとは違う赤い立派な服を着ていたからだ。黒いぴかぴかの靴も履いている。長い髪を邪魔そうに後ろにはらって、金色の肩章が見えた。物語の中で姫を救う王子様のようだ。

不思議なことばかり起こる場所だけれど、こんなに不思議な感じは初めてだ。胸がざわついて、寒くもないのに鳥肌が立つ。

「その恰好…。どうしたんですか」

大きい人は微笑んだ。いつもとは全然違う、初めて見る笑い方だった。

「そのうち、分かる」

立ち上がり、背を向け歩き出す大きい人の服の裾を引っ張り止める。

多分どこかに行ってしまって、もう二度と帰って来ないのだ。言うことを聞かない指先で首のペンダントを外し、その人に腕を伸ばす。

「これを…」
座りこんでしまった僕に、大きい人が膝をついて目線を合わせてくれた。口に力を入れていないと、涙が出そうだった。
「あげます。祝福がありますように」
大きい人が僕の手からペンダントを持ち上げ、自分の首に掛けた。すっくと立ち上がり、扉へ向かって歩いていく。
こんな場所に、扉なんてあったっけ。我に返り追うけれど、石畳の切れ目に足を取られ転んだ。身を起こすとその人はもう扉の前に立っていて、振り返って笑った。
「さようなら」
扉が開く。眩しくて額に手を翳す。赤い背中が光の中に消えていくのを、何もできずに見ていた。
光が収まり、扉が閉まる。立ち上がり、急いで駆け寄り触れてみたが、びくともしない。どんどん叩くが、扉はしんとしていた。
……行ってしまった。

――一人ぼっちになった。

一人でいると、時間がどのくらい経ったのか忘れてしまう。赤い人がいなくなってから、眠っている時間が増えたような気がする。

ここは、寂しい場所だ。だって、とても静かだ。

そういえば、彼がいた時は、いつも音がしていた。とんとん、どんどん、何かを叩くような音。ここに来てからずっと聞こえていたあの音は、あの人がいなくなった途端、聞こえなくなった。

叩く音がしなくなった代わりに、キイキイ、と鳥の鳴き声がするようになった。声を追うと、百日紅の枝に一羽の瑠璃鵯がいた。こちらを見て、しきりに首を振っている。愛くるしい仕草だが、どこか不気味だ。

いつの間にか、ぶかぶかだった服の裾から手や足がはみ出すようになり、髪が見えるところまで伸びてきた。自分を映すものがないので知らなかったが、伸びた髪はあの人と同じ金色をしていた。服の色も同じだと気付く。視界に入る本を持つ手や丈の短い裾から伸びる踝に、時折ドキリとする。

いつも傍で見ていたあの人の手足に、似ている気がする。

手入れしなくても美しい庭を歩く。花を嗅ぎ、水に触れ、小さな生き物と徒に戯れる。あちら

こちらに開きっぱなしの本が置いてあるので、手に取り読み耽る。いつ目覚め、いつ眠ったのかも分からないまま、漫然と時は過ぎていく。

気まぐれに現れては消える本を何度も読み終えて、庭園の花の数さえ分かるほどの時が流れる頃、扉から少女が現れた。

十歳くらいだろうか。長い金の髪と透き通るような碧の瞳をした、愛らしい、お人形のような少女。

彼女をこの目に映した瞬間、洪水のようにいろいろなことが思い出され、全てを理解した。

『そのうち、思い出すよ。いいことも。悪いことも』

ああ、そうか。この人が鳥籠の持ち主だったのだ。

――そして、僕の会いたかった人。

あどけなく笑い、目を輝かせる少女と一緒に庭園を散策した。夢の中とはいえ、こんな残酷なことはない、と思った。美しく、優しく、寒い朝に張った氷のように壊れやすい、奇跡のような時間だった。

少女が出て、扉に錠が落とされた。その音がやけに大きく、何かの宣告のように耳に響いた。

――どんどん、どん。

いつの頃からか、またあの耳鳴りが聞こえ出した。叩くような音。扉から聞こえるらしい。強く、速く、弱く、遅く。ずっとずっと、まるで、誰かを呼んでいるようだ。

それから、子どもが現れた。少女と同じ年頃。ぶかぶかの、薄い青色をした服を着ていた。

その姿を認めて怖気立つ。

金の髪と、不思議な色の瞳。襟ぐりから見える細い金属の鎖。そして、その声。全てが一本の糸のように繋がる。この子どもが来たということは、きっともうすぐ、その時は来る。

「ここは、天国のような所ですね」

無邪気な顔でそう告げる。何も知らない小さな頭を撫でる。
…こんな風に、誰かに触られたことはあったのだったか。覚えていない。小さな僕は、頭を撫でられて嬉しそうに頬を緩ませた。

――――どんどん、どん。

気が付くと赤い服を着ていた。この服も、知っている。服の釦や金具に髪が絡まりぷつぷつ千切れた。そういえば、随分髪が伸びた。
小さい僕が、別れの餞別にペンダントをくれた。首を飾ると、しっくりと馴染む。まるで、パズルの最後の一欠けのように。何も知らない子どもを置き去りにして、扉の前に立つ。我慢強い子どもだが、別れが寂しいのか追い掛けてきた。ズシャ、と音がしたので振り向くと、小さいのが転んで顔を上げている。その顔は痛みではなく、孤独に怯え強張っていた。別れの言葉を告げる。子どもは必死に手をつき起き上がろうとした。構わず扉に触れると、極の等しい磁石のように自然に開いた。今まで、押しても引いてもびくともしなかったのに。

どうやら、このペンダントが扉を開く鍵だったようだ。
扉が開き、現れた人物に戦慄する。知っている。僕は知っている。
この男を、どうして忘れていられたのか。
「迎えに来た」
彼は僕を見て、とても嬉しそうに、そして悔しそうに笑った。生気に溢れ、理性に輝く隻眼で。
「スレイン」
ああ、そうだ。それが僕の名前だ。
ねっとりと血に濡れた手が差し伸べられる。その手を掴む。手を引かれ、走り出す。

階段を駆け上がる。知っている、これは十三段しかない。今何段目だ。
「この先は処刑台だ」
「知っている」
「手を離せ、逃げろ、でないと…」
でないと、とても悪いことが起こる。

何だったか、とにかく取り返しがつかないことが。
「嫌だ。君は生きるんだ。僕と一緒に行こう」
「駄目だ、離せ、撃たれ――――」

――――パン。

「界塚…」
撃たれた。ああ、そうだ。いつもそうだ。
「……誰が…？」
血に染まる体を白い手に抱えられ、断頭台が近づく。こいつらじゃない。こんな顔のない連中じゃない。あいつを撃ったのは。
ぎらつく刃を見上げる。映り込んだ僕は顔も、服も、何もかも赤い。
縄の張る音。揺れる視界。
また終わる。

こんな時に、鳥籠に残してきた小さいのを思い出す。
あいつ、殺してあげればよかったな。天国だと言っていたし。
…今度覚えていたら、殺してやろう。

――ヒュッ。

――キイ、キイ、キイ。

青い鳥が鳴く。

――……ここは？

「ここは…」

噎せ返るような薔薇の香りがする。体を起こすと、赤、白、黄の薔薇が鮮やかに目に飛び込んできた。立ち上がり、ぐるりと周囲を見渡す。

丈の低い緑の木々と、鮮やかな花々。薔薇だけではない。百合、マリーゴールド、デイジー、牡丹、菫にラベンダー、桔梗、杜若、ポインセチア…。

『わたし、知っているわ。この場所の形。絵本で見たのと、そっくり』

『チルチルはミチルと、青い鳥を探しにいくの』

『また来るわ。あなたに会いに』

――――ガシャン。

彼女は黄金の長い睫毛に縁どられた瞼を開く。大きく息を吐き、小さいがスプリングの効いた優雅な長椅子で上半身を起こした。小さな頭に似合わない無骨なヘッドマウントディスプレイを外し、立ち上がる。ピンヒールの硬質な音。青白い光に満ちた円柱を見上げる。

「また、帰ってきてしまったわ」

『あなたを愛しています』

『赤い薔薇の、花言葉』

「…もう会えないなんて、寂しいことを言うのですね」
暗い部屋で、彼女は呟く。それはぷかぷかと、重さがないように青い水に浮いていた。
タンクの中で漂う、節くれだった手を外側から撫でる。手元のモニタには、眩しすぎる映像がチカチカと映し出されていた。音声はヘッドセット越しにしか聞こえないが、彼女には彼が何を言っているのか、全て分かる。なぜなら。
繰り返される同じ言葉を、もう飽きるほど聞いたから。
「早く、もう一度会いたい」

――――ピッ。

無神経な電子音で、扉が開く。彼女の背後から通路の光源が差し込み、薄らと部屋中に沈殿していた影が輪郭を濃くした。戸口が作り出す影法師が部屋の主に来客を知らせる。
「青い鳥を、捕まえたつもりですか」
冷たく、抑揚のない声が鼓膜を震わせた。彼女は懐かしさでほろりと笑う。

「…ええ」
目の前のモニターに映し出された色鮮やかな映像に意識を戻す。鳥籠に、青い鳥が一羽。そして、人の姿の籠の鳥。
コポコポと、水を循環させる音。
絶え間なく続く、電子機器のノイズ。
招かれざる客が、一歩、二歩と彼女に近づいた。
「知っていますか？　青い鳥は、籠に入れるとだめになってしまうんですよ」
その言葉に、彼女は振り返る。軽やかな笑い声が、暗い部屋に鈴のように転がった。昔と変わらない、あどけない所作。花のような笑顔。
「あら、それはお話の中のことでしょう」
黄金の豊かな髪を高く結いあげて、昔より大人びた色の濃いドレスを着ている。装いに不釣り合いの少女めいた表情と仕草に、来訪者の胸が鈍く痛んだ。
「貴方が、それを言うとはね。アセイラム女王」
「お久しぶりです。界塚伊奈帆さん」

少女のように若々しく輝く美貌と、穢れない神々しい微笑み。冷たい光が支配する無機質な室内で、彼女の姿がホログラムのように浮かび上がる。伊奈帆は、彼女の後ろに設置されたアイソレーションタンクを見上げた。

閉じられた世界で、終わらぬ夢を見る人。

「最後にお会いした時には、ゆっくりお話しすることもできませんでしたね」
月面基地での邂逅を言っているのだろう。伊奈帆は小さく頷く。あの時はアナリティカルエンジンが勝手にぺらぺらと喋り出して、後で頭を抱えたものだが。
それも、もう昔のことだ。
「もう十五年になります。お元気でしたか」
そう、時が流れた。かつて少女であった女性は、過ぎ去った年月に何を思うのだろう。
「最近は、地球へ行くことも少なくなりました。デューカリオンの皆さんも、お変わりはありませんか」

火星地球間の外交は、今や夫であるクランカインが取り仕切っている。女王陛下夫妻の間には、四人の子どもが産まれている。先日の地球訪問へは、クランカインに十二歳になる姉娘が同行し、大きなニュースとなった。火星の第一皇女は母親によく似た顔立ちで、瞳の色だけが父親と同じだった。

「地球で一緒に、鳥を見たのを覚えていますか」

伊奈帆は頷いた。アセイラムは懐かしむように目を閉じ、唇が美しい微笑みの形を作る。伊奈帆は彼女まであと五歩という所で立ち止まり、右手の中指と人差し指だけを伸ばした二指の敬礼をした。

「アセイラム女王」

「まあ、余所余所しい。あの頃のように、セラム、と呼んでくださらないのですか？」

母親とは思えないほど若々しく美しい目の前の女性は、記憶の中の少女のように頬を膨らませた。

「アセイラム女王陛下。……迎えに来ました」

伊奈帆とアセイラムは、しばらく無言のまま見つめ合った。ブウン、と普段は意識されないハ

ムノイズがやけに大きく聞こえる。アセイラムは首を振った。
「…折角ですから、もう少し、お話ししましょう」
彼女は両手を広げて、ようこそ、という風に膝を折った。優雅な仕草で首を傾げる。完璧な動作だが、表情はどこか歪を生じさせていた。感情と行動のアンバランスさを、伊奈帆は手の込んだマリオネットのようだと感じた。
「ここは、秘密の場所なんです。お客様なんて初めてよ」
彼女は自身の背後を示す。タンクの下部に設置された台座に、青白く輝く球体が据えられていた。台座はタンクと繋がれており、光がタンクの中の液体に光を通す。優しく、慈しみを存分に込めた手つきで彼女は球体を撫でた。
「このアルドノアドライブは、私が起動しました。私が死ねば、停止します」
青い光は、アルドノアの輝きか。伊奈帆は合点して、タンクの中に浮かぶ人間を見上げる。
道理で、あれから年を取っていないわけだ。
「そのアルドノアの能力は？」
アセイラムは、分かっているくせに、と眼差しに浮かべて伊奈帆を見上げた。くすくす笑い出

し、アルドノアドライブを撫でた手が空で翻る。バレリーナのように軽やかにステップを踏み、夜色のスカートの裾が広がった。暗闇と踊るように、艶やかなスカートが黒に溶ける。

「夢を見せるのです。その夢が美しいほど、安らかなほど、意識は現実から乖離していきます。ご覧になりますか？」

彼女の軽やかな手が一つのモニタを伊奈帆に示した。伊奈帆は立った場所から目を凝らす。小さな画面には、花で溢れる豊かな庭が映し出されていた。

「花が咲き乱れ、緑豊かな美しい庭園。青い空には青い鳥が飛んでいます。天国のような美しい場所」

歌うように彼女は語り、舞うように手を開く。伊奈帆は、この冷たい部屋で、青い光を浴び孤独に佇む彼女の姿を想像した。

「伊奈帆さん」

ぴたり、と動きが止まり固い声が狭い部屋に響く。ここはとても狭い。アイソレーションタンクからごちゃごちゃ繋がる機械と嵩張る調度品に反響し、彼女の声は硬度と重みを増したようだ。

「迎えに来た、と仰いましたね」
伊奈帆を映す瞳の色は、翳って見えた。アセイラムは口を大きく動かし、絞り出すように一語一語をゆっくりと発声する。
「答えは、ノーです。スレインは、渡しません」
彼女はタンク脇のソファの上から、黒く無骨な機械を両手で持ち上げた。長いコードが数本、タンクに接続されている。
「これが何か、分かりますか？」
何も言わない伊奈帆にぎこちなく笑い、アセイラムは続ける。美しい声が流れる水のように淀みなく紡ぐ。まるで、恋の詩のように。懐かしい歌のように。告解室で繰り返された懺悔のように。
「私は夢の中で、こっそりスレインを訪ねるのです。扉は、勝手に開きます。夢の中の私に今の記憶はなく、幼い少女の姿をしています。スレインと出会った頃の私。その私は、花園で出会うスレインが誰なのか分からないのです。スレインはもう大きな、青年の姿をしていますから。スレインは、私に会うと現実を思い出すのでしょう。スレインは私を悲しそうに見つめます。彼に

別れの言葉を告げられ、扉を出ると鍵が掛かってしまって、押しても引いても、絶対に開きません。そこで私の夢は終わり、現実へ戻って来てしまうのです」

彼女は溜め息を吐き出した。

「しまった、といつも思います。どうして扉から出ちゃうのかしら」

アセイラムは手に持った機器を置いて、モニタを再度掌で示した。

「夢の中の様子は、こちらに映し出されます」

白い指が画面の中の青い服の青年を指さす。彼は何かを見ている。画像がズームバックして、彼の視線の先にあるものが分かった。大きな扉だ。

「扉の外にいるのは貴方です。伊奈帆さん」

ヘッドセットのスピーカーから、扉を叩く音が聞こえるのです。大きな音で鳴りやまないので、もう、これを着けるのをやめてしまいました。そう言って彼女はスカートの裾を持ち上げ、ソファに座った。伊奈帆の正面には、小さなモニタと、アルドノアドライブと、アイソレーションタンクが並んでいる。

遮るものは何もない。

「貴方は扉を開けようとする。でも、決して開きません。扉は、スレインにしか開けることはできないのです」

伊奈帆はモニタの映像を見た。スレインのいる場所が変わっている。扉は見えなくなり、白い長椅子に座り本を読んでいた。青い小鳥が一羽、ベンチの上で羽を広げ、ちょこちょこと足を動かしている。スレインは本を閉じて立ち上がった。歩き出すスレインを追いかけて、青い小鳥が慌てたようにベンチから飛び立つ。

あることに気付き、伊奈帆は目を瞠る。やはり、ない。おかしい。あれは、どこにあるのだろう。

「その夢でも、もうすぐ赤い伯爵服を着たスレインが扉を開けるでしょう。伊奈帆さんはスレインの手を引き走りますが、道は処刑台につながる階段しかありません。あっという間に登りきります。貴方は銃弾に倒れ、貴方を失ったスレインは断頭台で首を落とされるのです」

私が夢から覚めた後の事は、何度見ても嫌な気分です。スレインの首が胴から離れて、血だまりの中をごろごろと転がっていくのです、と。彼女はソファに肘をつき思い切り顔を顰める。

「スレインは生きている」

アセイラムは顰めていた顔を綻ばせて、嬉しそうに伊奈帆を見た。笑う彼女の顔は昔と変わらず美しい。表情だけが、微かな憂いを帯び年月を感じさせた。
「そうなのです。また、あの庭園にスレインが現れます。幼い姿をしています。その子は成長して、私と出会い、貴方に手を引かれ、またこの庭に戻る」
「もう、何回目ですか」
伊奈帆が冷たく聞くと、彼女は困ったように眉を寄せた。
「さあ。もう、数えることをやめましたから」

惑星間戦争から数年を経た頃、スレインの処遇について大きな変化があった。
極秘施設を解体し、秘密裏に軍で有効利用しようというのだ。軍人として抜群に腕が立ち、頭脳明晰で度胸もある。その後の取り調べや調査で戦争時の内情が明らかになるにつれ、彼の義理堅く、損得を越えた行動力もただ処刑するには惜しく思われた。その頃には、スレインは従順で礼儀正しい模範囚と認識されていたし、監視役の伊奈帆との関係はかなり親しい友人程度、と軍内で評価されていた。
そういう状況を鑑みた上層部から、ひとまず伊奈帆が彼の身柄を預かり、任務のサポートに同行するよう達しがあったのだ。アナリティカルエンジンを外し視界が利かない伊奈帆の頭脳を前線で活用するためでもあった。サポート役の適任者が見つからず、数年が経過していた。
要するにスレインは、二十四時間体制のボディーガードとして、伊奈帆と同居生活をすることになった。
その生活は、それなりに良好だったと伊奈帆は思う。口論や喧嘩じみたやり取りはあったものの、彼との暮らしは穏やかだったし、楽しくもあった。自分たちには、共有した過去と語るべき未来があったから。

数か月間の共同生活にピリオドを打ったのは、一発の銃弾だった。

「最後の地球訪問で、極秘で要人警護の任務に就いていた僕を撃ったのは？」

アセイラム女王陛下夫妻は、子どもと地球を訪問した。身辺警護のため火星・地球双方の厳戒な警護体制が布かれた。伊奈帆たちは六歳になる第一皇女の近接保護部隊に配置され、記念式典の会場を見下ろす高層ビルの屋上にいた。

「その銃弾は、僕を庇ったスレインの胸に命中した。意識不明の重体」

スレインは伊奈帆の目の前であっけなく倒れた。伊奈帆はこれまで積み上げてきた何かが、誰かの都合で理不尽に崩れ去るのを見た。

これからって時に。やっと、生き始めたのに。

「すぐ軍の病院へ搬送された。数時間後、任務を終えて僕が駆けつけた時にはもういなかった」

アセイラムはソファに体を預けたまま、伊奈帆の言葉を待っている。タンクの中、逆さに降る雪のように舞い上がる気泡を、伊奈帆は両眼で追う。細い帯のように細かな気泡が、ちらちらと彼の髪を掠めて揺らした。

それから六年。少尉だった伊奈帆の階級が中尉になり、大尉を経て、少佐になるまでの時間。ずっと探していた。そして。

「やっと見つけた。生きていて良かった」

伊奈帆は水の中の青白い顔を見上げる。瞼が固く閉じられて、目が見えない。地球を象徴するような瞳の色。見つめられると吸い込まれそうな。一緒にいた頃は見蕩れたことに照れて、大げさに目を逸らしたものだった。

「よく、ここに来ることができましたね。伊奈帆さん」

アセイラムは億劫そうに言った。伊奈帆がここにいるということは、彼女のした事、考えた事を全て了解していることを意味し、それは彼女にとって心の内側を検められることに等しかった。

「もっと早く来るべきだった。全て仕組まれていたとは、信じられなかった。……信じたくなかっただけかもしれませんが」

アセイラムが草臥れた顔で、力なく首を振った。

「この行動は、未来を棒に振るとは思いませんか」

この女性も、そんな俗っぽいことを言うようになったのだ。アセイラムがソファから身を起こし、伊奈帆の隣へ静々と歩み寄った。

二人で肩を並べ、青い円柱を見上げる。まだ少年と少女だった頃、二人で肩を並べた遠い記憶が脳裏に甦る。

年を取った。世界を知った。人間を、知った。あの頃の二人の間に流れる清冽な空気は過ぎ去り、もう戻らない。鮮やかに輝く思い出と、暗く冷たい現実が同時に見えて吐き気がした。

現実と夢を分かつ、ガラスの丸みに触れる。冷たいがどこか生々しい、お湯の冷めたバスタブのような感触だ。

「夢の中で」

アセイラムが囁いた。伊奈帆の手の横、彼女の手もガラスに触れた。

「いつも貴方を撃つのは、誰だと思います？　伊奈帆さん」

伊奈帆は横目で視線を送るが、目が合うことは無かった。彼女はスレインを見たまま言った。

「私です。貴方の胸に、銃弾を撃ち込むのです」

白い手が滑り落ち、モニタの前のパネルの上で止まる。指先が、一つのキーをくるくる撫でた。

華やかに色づいた唇が震え、このスイッチで、と自嘲するように口角を引き結ぶ。そんな笑い方は、この人には似合わない。そう思い、伊奈帆は憂う横顔を眺めた。
「嫉妬かしら。取られるが嫌なのですね」
「スレインを愛していますか」
こんなことを、照れずに聞くことができる年になった。伊奈帆の言葉に、彼女は静かに頷いた。
「ええ。とても。誰かに取られたくありません。私の、大切なひと。大切な、思い出」
伊奈帆は瞳を閉じる。瞼の裏に浮かぶのは、色褪せぬ記憶。

どこまでも青い空と波立つ海。
――こんなに空が青いなんて。こんなに海が輝くなんて。
飛び交う白い鳥の群れ。
――鳥なんて初めて見たわけじゃないのに。ずっと見ていたいと思った。
強く吹き付ける潮風。

――辛くて粘つく潮風は、嫌いだったはずなのに。
翻る、白いスカート。
――その下から覗く足首は、もっと白かった。
汚いものや醜いものなんて、映したことがないに違いない美しい瞳。
――いつもまっすぐに合わされる眼差しは逸らすこともできなくて。
彼女は言う。白い頬を赤く染めて。美しい瞳に空と海の青を映しこんで。夢見るような声で。
『スレインの言った通り』
その手の中には、清らかに光る銀色のお守り。

それも、もう思い出だ。その美しさも、輝かしさも、胸を焦がす感情も。
伊奈帆は両目を開いて、現実に対峙する。タンクに触れたままの右手を握りしめる。自分の爪が掌に食い込む。手の甲の血管が浮き上がる。汗がこめかみを伝った。
「過去は変えられない。貴方は、選択したはずだ。それを無かったことにはできない」

何かを選ぶということは、何かを捨てるということ。あの戦争の最中、誰もが手を伸ばした。守りたいもの、焦がれたもの、失いたくないものに。その手に、何も掴めなかった人もいた。掴んだけれど、放してしまった人も。掴んだものが、違うものだと気付いた人もいたろう。中には、もともと持っていたものを手放した人もいただろう。しかし、その手に、何かを掴み取った人もいたはずだ。

伊奈帆は、スレインの手を掴んだ。それを後悔したことはない。

彼女は、違うのだろうか。今になって、伸ばした手が過ちだと気付いたのだろうか。手の中にあるものが、分からなくなったのだろうか。

「現実で会うことが許されないなら、せめて夢の中で会いたい。子どもの頃のように、笑い合いたいだけ。それはそんなに悪いことなのですか」

過ぎ去った思い出の中で、もう一度。何も知らなかった二人に戻りたい。アセイラムの頬を涙が幾筋も伝った。

彼女の泣き顔を見るのは三回目だ。伊奈帆は、今までで一番人間らしい泣き顔だと思った。

「スレインを救ってくれ。貴方はかつてそう願った。それは、今の僕の願いだ」

「夢は美しく優しい世界です。それは救いではありませんか」
「馬鹿なことを」
舌打ちをして、そう吐き捨てる。
伊奈帆は出会った時の、まだ一人の少女であったアセイラムを想った。子どもだった。純粋だった。そして残酷だった。その優しさは独り善がりで支配的で、溢れんばかりの愛情は誰か一人に注ぐものではなく、万人に振りまくもの。彼女の瞳は、いつも遠い未来と輝く希望に満ちていた。歪で孤独で、強く輝かしい少女。少年だった自分は、そんな少女が好きだった。その光に恋をした。
容赦のない現実と迷いと後悔渦巻く胸中が彼女を弱く、狡くした。しかし、今になって人間らしい愛情を知ったのかもしれない。嫉妬するのは、愛しているからだ。でも伊奈帆は、彼女のお願いを今度ばかりは聞くことはできない。
「僕には、悪夢にしか思えない。アセイラム。夢の中で、スレインを何回殺せば気が済む？　何度だって言ってやる。スレインは生きてるんだ」
アセイラムはスカートから銃を取り出し、流れるような滑らかさで伊奈帆の左胸に銃口を押

し付けた。
「私を、どうしますか。撃ちますか」
にっこり笑い、首を傾げた可愛らしい仕草。
「撃つならどうぞ。私のほうが早く引き金を引くでしょうけれど」
ころころと笑う口元を見る。薄紅に色づく、左右対称に弧を描く美しい唇。
「私が死んだら、スレインも死にます」
狂っているのだろうか、とも思った。しかし、その瞳が透明に澄みきっているのを知り、伊奈帆は失われたセラムの欠片を瞳の中に探した。
「そんなことはしない」
アセイラムの瞳から涙がこぼれ落ちた。頬を伝う涙は、光に照らされ青く輝いた。悲壮な、美しい顔で彼女は指先に力を込める。
「それでは、私が貴方を撃ちましょう。夢の中のように」

「迎えに来た」

開いた扉から、男が手を伸ばした。その顔と名前に、忘れていた膨大な記憶が呼び起される。名を呼ばれ、反射のようにその手を握る。

あれ。

おかしい、と思った。だって、触れた手があたたかい。そして更におかしな事に、握る手に血は一滴も付いていなかった。それに――――。

考える間もなく、強く手を引かれ駆け出す。つんのめりそうになりながら、濃紺の裾がはためく背中を追う。

ああ、また。

デジャヴにほっとする。そうだ、これは何度も見ている夢なのだ。見覚えのある大理石の白い階段。踏み出す一歩一歩を、走っているはずなのにゆっくりと感じた。全部覚えているはずなのに、その時が来ないと思い出せない。焦りで余計に混乱する。今、何段目だ？　この階段は、ええと、どこに続いているのだったか。なんだか良くない所だった気がする。

脳裏に閃く、強すぎる光。

「この先は駄目だ…」

痛む頭を振り呻くように言うと、立ち止まり、力強く手を握られた。

やっぱりおかしい。なんだか、いつもと違う手じゃないか。いつもはもっと小さくて、こんな熱くなんて無かったような———。

「大丈夫。上手くいく」

にい、と笑う顔を見て、ああ、と違和感の正体に気付く。そうだ。こいつ、違う違うと思っていたら、今日は左目があるじゃないか。口を開くが何か言う間もなく、手を引かれまた走り出す。

汗が噴き出る。心臓がばくばくと命を食らうように蠢く。瞬きすると、ぎらり、とまた何かの光が閃いた。とても嫌な感じだ。

「駄目だ、お前は引き返せ。そうでないと———」

言っても立ち止まらないし振り向かない。握られた手に力が伝ったのが分かった。

「大丈夫だ。一緒に行こう」

振り解こうとするが、とても強く手を握られていて逃れられない。立ち止まろうとしてもすご

い力で引っ張られる。
いけない、駄目だ。この先は良くない場所だ。十三段目に足が乗る。

「お待ちなさい」

声が聞こえた。伊奈帆が立ち止まり、スレインは伊奈帆の背にぶつかった。金縛りのように足が動かせない。
ああ、そうだったのか。十三段目でいつも僕らを撃つのは。
「姫様…!」
白く可憐なドレスを着たアセイラムは、少女の顔で伊奈帆を睨んだ。両手は、膨らんだドレスのスカートの上で軽く握られている。何も、持っていない。
「伊奈帆さん、どういうことですか」
伊奈帆は、その視線を見据え不敵に笑った。スレインはアセイラムの引き結んだ口元を無言で見つめる。

「銃がないでしょう。僕を止めることはできませんよ」
そしてスレインの手を引き走り出す。立ち尽くすアセイラムの横を通り過ぎる刹那、彼女が顔を上げて叫んだ。
「スレイン！」
思わず振り向くスレインに、伊奈帆は鋭く言う。
「そのペンダントを」
「え？」
伊奈帆がスレインの首で揺れる銀の鎖を握りしめた。
「ペンダントを、くれる？」
伊奈帆の熱い手の温度を感じながら、スレインは鳥籠の中に残してきた小さい自分を思い出した。これは、きっと。
でも――――。
「やる」
強く頷くスレインに、伊奈帆はありがとう、と言い鎖を引き千切った。ペンダントを持った手

を振りかぶる。
「彼女に、あげるよ」
「ああ」
伊奈帆がペンダントを投げた。カンカン、カン、とアセイラムの足元に転がり、彼女は膝をつき茫然とそれを拾い上げる。両手の中でそれは青い鳥に変わり、小鳥は数度震えて動かなくなった。彼女は死んでしまった鳥を胸に抱く。
「スレイン…」
嗚咽交じりの痛ましい声が聞こえる。伊奈帆がスレインの手を強く引いた。
「行くよ」
スレインは蹲るアセイラムと伊奈帆を交互に見た。困り果てた声が出る。
「姫様が、呼んでる」
何度もスレイン、と呼ぶアセイラムの姿に動き出せずにいるスレインの肩を、伊奈帆の両手ががっしり掴んだ。痛いくらいに握られて、スレインが小さく呻く。伊奈帆はスレインの顔を覗き込んだ。

「彼女が呼んでいるのは、君じゃない」
そして踵を返し、駆け出す。その手に行く先を委ねる。
そうか、僕じゃないのか。
彼女の胸に抱かれた青い小鳥。
…小さいのがいなくなってしまったな。あの庭園は、もう空っぽだ。
スレインは足を動かし、我に返って周囲を見渡す。少し高い位置に伊奈帆の背中。また階段だ。
おかしいな、階段は終わったはずなのに。
いつの間にか、白い大理石の階段は、金属音を鳴らす非常階段に変わっていた。カンカン、カン、と踏むたびアルミの揺れる階段の踊り場を何度も折り返す。風が吹いている。
「界塚…。これは、いったい」
「悪い夢だ。はやく醒めよう」
階段を上り続ける。強い横風に吹き飛ばされそうだ。眩しくて目が開けられない。長い。終わりがないようにさえ感じる。風鳴りがする。今、とても高いところにいるらしい。
「天辺だ」

伊奈帆が言って、強く手を引っ張った。スレインはふらつきながら最後の一段を踏み出す。
風が通り抜ける。眩しい光に包まれ、反射的に目を瞑る。
光。こんなにも眩しいものだったのか。
日の温度を瞼に感じ、目を開ける。

――青。

――があ、があ、があ。
――潮の香り。
――頬に辛い風。
――きらきらと輝く波間。
――晴れ渡り、どこまでも続く空。
――そして、隣には。

ビ――――――。

耳に痛いほどの電子音が室内に反響した。アセイラムは伊奈帆の胸に銃口を向けたまま、きょろきょろと周囲に目を走らせる。タンクの中、ごぽりと大きな気泡が発生し彼女はそれを見た。伊奈帆は彼女の視線を追う。どうやら、上手くいったようだ。

青白い光の中で、スレインの瞳が開く。ゆっくり三度瞬きをした。指先が微かに動き、それを見たアセイラムは銃を取り落としモニタに顔を近づける。慌ててパネルを操作するが、手応えがなくバン、と両手をキーに振り下ろす。衝撃に痛むだろう指を握った。肩がわなわなと震えている。

「伊奈帆さん、一体何を…」

伊奈帆は床に落ちた拳銃を拾い上げた。ヴァースの刻印がある白い銃。

「ここに来る前、回路に潜入してプログラムを書き換えた。…夢から醒めたみたいだ」

伊奈帆は銃を構えた。アセイラムが体を強張らせ目を瞑る。

トリガーを引く。

白い銃口から弾丸が飛び出し、衝撃波が室内に響き渡る。

一回。
二回。
三回。
四回。
五回。
六回。
伊奈帆は、銃弾を全て吐き出した銃を水浸しの床に放り投げた。耳障りな音を立てて回転しながら、それは部屋の隅へぶつかり止まった。
「あ、アルドノアドライブが…」
アセイラムが膝から崩れ落ち、床に座り込む。滑らかなドレスが水を吸い、重そうに床にへばり付いた。粉々になったアルドノアドライブの破片が発光し、部屋中が青く染まる。伊奈帆は服が濡れ汚れるのも厭わず、粉々のタンクの中に両腕を伸ばす。
「スレインは目覚めた。アルドノアドライブが停止しても問題ない」
ガラスの破片で細かい傷を無数に作りながら、伊奈帆はスレインをタンクから引き摺り出し

た。メディカルスーツが水を含み、意識を失い弛緩したスレインは重くて手古摺るが、伊奈帆は器用に担ぎ上げアセイラムに向き直る。
「悪いけど、スレインは連れて行く」
さっと踵を返し扉を出て行こうとする伊奈帆に、アセイラムが手を伸ばした。
「待って！お願い、行かないで…」
伊奈帆は振り返らず、足を止めた。
「人は思い出の中では生きられない」
激しくしゃくり上げる声。彼女は、これまでの人生でこんなに泣いたことはあったのだろうか。
「だって、もう、会えないなんて…」
誰もが一人で死んでいかなくてはいけないなんて。
なんて寂しいんだろう。なんて悲しいんだろう。どうして、人は過去に戻ることはできないんだろう。失われたものを、取り戻すことができないのだろう。
「約束だから」
優しい声にアセイラムは息を止め、見つめる。青白い光の中、黒いドレスの彼女の顔と手だけ

が幽霊のようにぽっかり浮かび上がった。振り向いた伊奈帆は、暗い室内に向け眩しそうに微笑む。

「セラムさんとの約束だ。もう、いないけれど」

蒼白になるアセイラムから視線を外し、伊奈帆は境界線を跨ぐ。

「伊奈帆さん、スレイン！待って！」

伸ばす手は届かない。手放したもの。掴めなかったもの。

こんなに遠くに行ってしまうなんて。

「さようなら。アセイラム女王。お健やかに」

ピ、と電子音がして扉が閉まる。

「…界塚」
「気が付いた？　まだ寝ていた方がいいな。かなり揺れるから」
シャトルの座席にベルトで固定していると、スレインが目を覚ました。座席を調整しつつ、伊奈帆はスレインに微笑みかける。スレインは伊奈帆をぼんやり眺めた。暗い部屋では分からなかったが、顔色が酷い。やつれた頬を触ると、冷たかった。
「…ここは？」
スレインの声はガサガサに掠れていた。ようやく聞き取れるくらいの声で言い、大きく見える目がぐるりと周囲を確認した。シャトルの計器類が小煩い音を立てている。
「ここは揚陸城だ。これから地球へ帰る」
伊奈帆が言うと、スレインはそうか、と言って目を閉じた。ここは刺激が多すぎる。ずっと現実から隔離されていた彼の肉体と精神が、発射と大気圏突入に耐えられればいいが。
仕方がない。リスクは自由の代償だ。
数分後、伊奈帆がシャトルを発射させた。スロットルレバーを操作しつつ、遠ざかる揚陸城に意識を向ける。

そういえば、アセイラムはなぜ設備の整った火星や月ではなく、揚陸城にスレインを幽閉したのだろう。伊奈帆は考えても仕方がないと思いつつも、取り留めなく思考を走らせる。
一人になりたかったのだろうか。二人きりになりたかったのだろうか。
その両者に、どれほどの違いがあるのだろう。
横目でスレインを見ると、ぐったりと目を閉じていた。意識があるのかはわからない。

「……別に、あのままでも良かったんだ。姫様のお心を慰めることができるのなら」
数時間後、月の破片漂う星の海を飛行していると、スレインが口を開いた。
彼なら、そうすることに何の後悔も躊躇いもないだろう。大きな岩石を鮮やかに避けつつ、伊奈帆は頷いた。
「そうかもしれないね」
操縦桿を操作する傍ら、スレインの青く痩せた横顔を見る。昔のままの、命の薄い、傷つきやすい儚い姿だ。その姿に胸を痛める自分は、彼よりずっと早く年を取ってしまったように思う。
「…姫様を悲しませてしまった」

目に見えない悲しみが、雪のようにスレインの周囲に降り積もる。俯く彼の首がひどく頼りなげで寒そうに見えた。

「…そうだね」

スレインは唐突に伊奈帆に体を向け、その勢いでベルトが骨に食い込み小さく呻いた。戸惑いを顔中に浮かべ、言葉を探している。

「……どうして」

どうして、か。伊奈帆は考える。そして思う。言葉にするのは簡単じゃない。だって、スレインがいなくなってからここに至るまで、伊奈帆は自分の行動を自分にすら説明することができないのだ。

約束だから？　友だちだから？　命を救われたから？　そんな言葉をいくら並べても、心のどこかがそれは違う、と文句を言う。そんな自問自答の最後に、いつも思い出す。海と空の青と白いドレスを。暗く寒い場所でこぼれ落ちた透明な涙を。

「…君が、いなくなるのは嫌なんだ」

銃弾が貫いて、崩れ落ちる体を支えられなかった。大量の血が流れて、連れて行かれた。そう

して、スレインはどこにもいなくなった。

伊奈帆は、あの日のことを思い出す。ほうぼう探した後、家に帰った。暗くて冷たい部屋だった。照明のスイッチを入れ、重い足取りでそれぞれの部屋を見て回る。何か月も一緒に暮らしていたのに、まるで最初から存在しなかったかのように、スレインの私物は存在感がなかった。服も食器も、石鹸やシャンプーも、そこにあったものを適当に使っていたのだ。洗面所に入る。脱衣籠に放り込んだままの、丸まった寝間着と洗面台の歯ブラシを見る。居たんだよな、と誰もいない部屋で呟いた。

茶碗とか、お箸とか、パジャマとか。彼だけの特別なものを買えば良かった。どうして、そんな簡単なことをしなかったのだろう。毎日一緒に暮らしていたのに。

最低の気分でベッドに座り込んだ。そういえば、専用のベッドも布団も買ってなかったな。何となく、いつも一緒に寝ていたから。

肩を落としてベッドサイドを見ると、月明かりに照らされそれはきらりと光った。

慌てて手を伸ばす。それを触り、裏返し、翳して見る。間違いない。スレインのペンダントだ

った。
こんな大切なものを置いていくなんて。
その思い出を抱いて泣いた。伊奈帆は決めた。
きっと、僕は君に辿り着こう。だから、どこかできっと生きていて。
「伊奈帆」
はっとして、顔を向ける。スレインがシートに体を預けて、モニタの中の小さな地球を見ていた。
「…お前が撃たれる夢を見ていた。どうやら、何度も何度も同じ夢を見ていたようだった」
スレインは思い出すように時折目を閉じて、小さな声で言葉を紡いだ。伊奈帆はじっと耳を傾ける。
「お前が僕を迎えに来て、一緒に階段を上るんだ。階段の先には断頭台がある。最後の一段を上りきる。そこで、お前は胸を撃たれる」

僕は首を落とされて、終わり。それを何回も何回も繰り返した。でも、さっき見た夢は違った。

そう言ってスレインは伊奈帆を見た。その眼差しは澄んでいた。あの日の面会室で見た瞳のように。頬を濡らした涙のように。

「長い階段を上りきると、青い空が広がっていた。ウミネコの群れが飛んでいて、海がきらきらと輝いていて…。匂いもする。海の匂い、肌に痛い風。地球の景色だ。……姫様が隣にいた。そこで目が覚めた」

滔々と語る声は優しく、語られる言葉は美しくて、伊奈帆は長い瞬きをした。瞼の裏に、その光景が見える。

あれは、確かにあったこと。

「あれは、お前の記憶か」

「まあね」

今は遠い記憶だ。まだ知らなかった。世界を。自分を。人間を。大人になるということを。人を愛するということを。

子どもの見た世界。それは歪で美しかった。

「……美しい記憶だ」
スレインが精一杯に微笑んだ。悔しそうで、悲しそうで、それでいて誰よりも幸福そうで、あまりに下手くそに笑うものだから、見ていて伊奈帆は涙が出そうになった。
美しい記憶。美しい思い出。でもその意味を、思いを、きっと僕たちは共有できない。
でも、それでもいい。君が生きているんだから。
「思い出は、いつも綺麗だ」
思い出が綺麗なのは、そこに痛みがあるからだと思う。痛みが、思い出を美しく彩るのだ。
あ、と思い出して、伊奈帆は自分の首の後ろに手を回す。
「…これ。忘れもの」
失くさないように、見つけたあの日からずっと首にかけていた。外して、手を伸ばしスレインに差し出す。彼は受け取り、首を振った。
「ああ。お前にやるつもりで、置いていったんだ」
「え、どうして？」
スレインはペンダントを手の中でころころと転がし、口を重そうに開いた。

「……なんだか、もうあの部屋に帰れないような気がしたから」
伊奈帆は何もない、寒々しい部屋を思い出した。たった一つ残された彼の私物だったもの。もしかして、形見のつもりで置いていったのだろうか。
「ねえ、今度海を見に行こうか。二人で」
突然の伊奈帆の提案に、今度はスレインが首を捻る。
「どうして？」
伊奈帆は思案する。
どうして。どうしてか。君の笑顔が見たいから、君の思い出がほしいから…なんて気障すぎる。言葉にするのは難しい。そんなことを考えながら、次々進行方向に現れるデブリを避け、操縦桿をリズミカルに叩く。
「さあ。でも、いいだろう？　理由がなくても」
その言葉に、スレインは声を上げて笑った。ようやく明るい笑顔が見られて、伊奈帆もほっとする。スレインは笑いすぎて目の縁に滲んだ涙を拭った。
「ああ。理由なんて、ない方が素敵だ」

いよいよ大気圏に突入する。

二人で大気圏を越えるのは二回目だ。そういえば、あの時も一緒に地球に落ちるのに理由なんてなかったな、と伊奈帆は思った。

Blue Rain

～祝福～

【2017-07-01】

降りしきる雨の中、一機のヘリコプターがその島に降り立つ。

海岸に不時着した機体は、横倒しで砂浜を大きく抉った。上面になった操縦席が、がんがん、がんと音を鳴らし、荒々しく扉が開く。

中から、二人の人間が現れた。雨水を吸って重い砂浜に足を下ろす。一人は怪我をしているのか、病気か、自力で歩くことが難しい。もう一人が彼を担ぎ上げ、そして歩き出す。その足跡は、強い雨で次々と均され消えた。

彼らが歩みを進める前方には、白い外壁と青い屋根。少し草臥れすぎた外観は、使われなくなって長い年月が経っていることを窺わせる。石造りの階段を歩く途中、強い風が鐘塔に吹き込んだ。がらん、がらんと鳴る鈍い音に来訪者は顔を顰め、木製の扉の門に手を掛けた。

雨の海は灰色だ。

まるで獣のように波が暴れ、小型のモーターボートは、もう何度も飲み込まれそうになっていた。ハンドルを取られないよう注意しつつ、彼は目的地をレーダーで確認する。

ここに来るまで、長かった。悪天候だが、日を変えることはできない。そもそも、宇宙空間でのカタフラクトの操縦に比べれば、なんてことない。

小さな島が視認できた。スピードを緩め、停泊できそうなところを探す。どこにも桟橋はない。仕方なく、海岸に横づけする。レインコートを着て、雨でじくりとやわらかい砂浜を踏みしめる。

いくらも歩かぬうちに、それはあった。

白い外壁に、青い屋根。

砂浜から続く斜面に整備された石造りの階段が、大きく重そうな扉へ続いている。

木製の扉は黒ずみ、金属が雨に濡れ、光を鈍く反射していた。白い外壁は色あせ、汚れて斑だ。丸窓にはめ込まれたガラスは風雨に晒され汚れている。屋上から続く尖塔には鐘つき堂が設置されていたが、ロープは見えない。

海辺の古びた教会だ。
教会の反対方向、砂浜を眺める。この雨の中、傘も差さずに立ち呆けている男がいた。
見つけた。
ゆっくり、少しずつ近づく。あと五メートル、と近づいた時、男が喋り出した。
「お客さんなんて、珍しいな」
天を仰ぐように立つ男は、来客に半身を向けた。髪も服も泳いできたかのようにびしょ濡れだ。濡れていないところなどない。この距離でこの雨音の中、朴訥としているが遠くまで通る、いい声だ。
「遭難したわけではないね。用向きは？　…といっても、大体の想像はつくけれど」
柔らかく穏やかで、理性的な声だ。顔がよく見えるところまで近づくと、日焼けした精悍な顔の中、橙の目が真っ直ぐこちらを見つめている。敵意も緊張もない、穏やかな光だった。
「貴方が、オレンジ色」
オレンジ色と呼ばれた男は、ははは、と声を出して笑った。
「その呼び方は、随分と久しぶりだ」

オレンジ色と呼ばれた男が客人に近づく。大股ですたすたと、警戒は感じられない。
「界塚伊奈帆です」
握手を求めて差し出された手を握り返す。小柄な外見とは裏腹に、厚くてごつごつした掌だった。
「ハークライトです」
名乗ると、そうだろうねと界塚伊奈帆は頷いた。
「もう、知っていると思うけれど」
手をだらりと体の横に下ろして、伊奈帆は顔を横に向けた。ハークライトからは、彼の一つ残った瞳が海に向けられ細められるのが見えた。ぽつりと、雨粒にかき消されそうな声で伊奈帆が言った。
「スレインは、死んだよ」

雨の中、立ち話もなんだから。伊奈帆はハークライトを教会へ招いた。扉の中は礼拝堂だ。薄暗く古いが、埃などなく、よく手入れされて清潔そうだ。ずっと奥に、大きな十字架と像がある。よく見ようと目を凝らすが、伊奈帆にこっち、と指示され脇の通路へ足を向けた。通路が狭まり、小さなステンドグラスが等間隔で並ぶ廊下を歩く。

「貴方は、連合軍の捕虜だったと記憶しています。解放されたのですか？」

伊奈帆が口を開いた。ハークライトは、伊奈帆の濡れた後頭部を見ながら答える。

「ええ」

「今は何を？」

「姫様のお傍におります」

そこで伊奈帆は少し黙った。雨粒が壁やガラスと叩く音が響く。静けさが、狭い通路に沈殿していく。

「ああ、妹君の？」

得心がいった、という風に伊奈帆が言う。この男は敵ではないようだ、とハークライトは考え頷いた。

「ええ。レムリナ様です」
通路を曲がると、右手の壁面にドアが現れた。奥の方に三つほど、赤茶けたペンキの、色あせた簡素なドアが並んでいる。
「彼女、どうしてる？　僕は、会ったことはないけれど」
伊奈帆は一番奥の扉を開けた。どうぞ、と先に入る伊奈帆の後ろにハークライトは続いた。
「お健やかであられます。スレイン様を、ずっと探していらっしゃいました」
狭い室内だ。四つの本棚が、壁に張り付くように並んでいる。箪笥、机と椅子があった。質素だが、かつては、神父の私室だったのだろうか、と想像する。伊奈帆は箪笥の引き出しからタオルを出して、一枚をハークライトに渡した。手に持ったレインコートを畳み、椅子に掛ける。濡れた顔や手足の水滴を拭く。
「着替える？　服はあるけど」
「お構いなく。私はそれほど濡れていませんから」
「そう。悪いけど、僕は着替えるよ」
何が悪いのか、と思うと箪笥から服を取り出し、濡れそぼった服に両手を掛けた。ここで着替

えることに対する気配りらしい。全く警戒されていない様子は、まるで友人の家を訪ねたようだ、と不思議な心地がする。席を勧められたので、タオルを置いて腰を下ろした。
「どうして、今日彼女は来なかったのかな」
乾いた服に袖を通し、伊奈帆は聞いた。痩せ気味だが、筋肉のついた背中は軍人らしい。
「外出は、体力を削りますから。お止めしました」
絶対に行く、と仰っていましたが。付け加えると、そう、と短い返事があった。
「さて、何から聞きたい？」
着替えた伊奈帆はわしわしとタオルで頭を拭き椅子に座った。テーブルを挟み向かい合う。ハークライトは、正面の橙色の瞳を睨みつけた。
「スレイン様のことを教えてください。連合軍に捕らえられて、お亡くなりになるまでの間のことを。貴方は、ずっと一緒にいたはずです」
伊奈帆はその視線を受け止め、うん、と一度小さく頷いた。テーブルを指先でトン、トン、トン、と何度か叩く。俯き、目を閉じた。
「長い話になるよ」

「構いません」
突然伊奈帆が立ち上がり、ハークライトはさっと身構えた。伊奈帆はテーブルに手を接したまま、ハークライトに尋ねる。
「紅茶を淹れるよ。それとも、コーヒーがいいかな」
その佇まいにはっとして、ハークライトは刮目した。詰めていた息を吐く。
「…紅茶にしましょう」
「少し待ってて」
そう言って扉の外に消えていく伊奈帆の背中が、見覚えのあるもののように感じた。

――――かつて、月にいた頃。
まだザーツバルム卿も存命の頃。連絡や要件で部屋を訪ねるとスレインは、使用人に過ぎない自分にいつも聞いたものだった。
「お茶を淹れますね。それとも、コーヒーがいいですか？」
忘れていた。そんな穏やかな時間も確かにあったのだ。

「お待たせ」
湯気の立つカップを持って伊奈帆が現れた。一つをハークライトの前に置き、自分は立ったまま一口飲んで椅子に座る。テーブルに置いたマグカップからゆっくり手を離すと、伊奈帆は両手を組んで視線を落とした。
「僕がスレインを連れ出したのは、表向き処刑されてから三年後のことだ。もちろん無断だ。それで僕はスレインと二人、軍に追われることになった」
伊奈帆の眉が寄せられ、数秒の沈黙が降りた。
「理由は、彼が病気だったからだ。そのまま獄中死するのを、黙って見ていることはできなかった」
ハークライトは息を呑む。想像していたが、現実を突きつけられて悔恨の念が沸き起こる。もっと早く。これまで何万回そう願ったことか。
「面会の度、みるみる痩せていく。もともと細い人だったけど、こんなに人間は痩せるのか、と思ったよ」
肉がないから、関節が床ずれをして、肘や足首を赤くしているんだ。僕はよく、そこに絆創膏

を貼ってやった、と伊奈帆は語った。
「そのうち、独房のベッドで会うようになった」
当時のことを思い出しているのか、伊奈帆の表情は寂しげに映る。ハークライトは、感情の起伏が表情に出ないらしい眼前の男を見て、自分でなければただの無表情に見えるのかもしれない、と思った。伊奈帆が悲しそうに見えるのは、自分がとても悲しく、目の前の男も悲しく感じているらしいと信じたからだった。
「衰弱して、支えがなければ立つことも出来なくなっていたから」
伊奈帆はふと顔を上げ、どうぞ、と紅茶を勧めた。ハークライトは、生温くなったそれをごくりと飲み込む。柑橘系の良い香りがした。
伊奈帆が室内をぐるりと見渡す。
「この場所はスレインがそうなる前、もっと元気な時に偶然見つけた。誰もいないし、見つかることはまずない。そんな場所だよ。その時には、彼にはこんな場所が似合うだろうな、くらいの気持ちだったけれど」
確かに、晴れていれば絵になるだろう。青い海と青い空。小さな教会とウミネコの鳴き声。そ

こに佇む、美しい人の姿を想う。しかしそれは、どこまでも一人で孤独で、悲しい風景だと感じた。

「もっと早く決断すれば良かったと、今となっては思うよ」

「決断とは？」

話が飛ぶのは、頭の回転が速いからか、聞き手の存在を考慮していないかだろう。スレインにも、そういうことがあったとハークライトは思い返す。

伊奈帆は、ハークライトの疑問に真っ直ぐ答えた。

「他のものに別れを告げて、二人で生きていく決断だ」

この島で、二人きりで寄り添う青年たちの姿を思い描く。それは先ほどの想像よりも一層淋しく、悲しい光景だった。

「少し、歩こう」

伊奈帆が立ち上がり、扉を開いた。ハークライトその背中に付いていく。

来た道路を戻る。晴れ間が覗き、狭い通路は柔らかい光が差し込んでいた。先ほどとは、まる

で違う場所に迷い込んだようだ。廊下の中ほどで伊奈帆が口を開いた。
「ここに来てからは、のんびり過ごしたよ。彼は相変わらず死にかけていたけれど、前より笑顔を見せるようになった」
どうも彼は歩いているときの方が話しやすいようだ、とハークライトは察した。
通路の先、両開きの扉を開けると、広い空間に出た。最初に入った礼拝堂だ。今はステンドグラスが光を通し、幻想的な空間だ。もしここに天使がいても驚かない。死んだはずの人間がいても、きっと驚かないだろう。
「ああ、スレインの調子がいい時は、あそこのオルガンを弾いていた」
先を歩く伊奈帆が示す場所に、小さなオルガンがあった。足で踏むタイプの、簡素で古ぼけたオルガンだ。ハークライトは、スレインがこのオルガンに向かう姿を想像する。楽器を弾くところなど見たことは無いけれど、似合いすぎで笑みが漏れた。
「…といっても、三回くらいだけれど。アセイラム姫に教えてもらったと言っていた」
僕が言うのもなんだけど、と伊奈帆は少し笑った。
「下手だったな。でも、もっと聞いていたかったよ」

――――回想。

オルガンの音が聖堂に響く。長らく放置されて、音程が所々狂っていた。弾き手も達者とは言えない腕前なので、鍵盤遊びをしているような覚束なさだ。心地いいとは程遠い演奏だが、それでもその光景は伊奈帆の心を慰めた。

「楽器を弾けるなんて、知らなかったな」

演奏が止まったところで、伊奈帆は傍に近づいて声をかけた。スレインはゆるく首を振った。苦笑いしているようだ。

「弾けるなんて大層なものじゃない。音が鳴る仕組みを知っているだけだ」

伊奈帆は、オルガンに立てかけてある楽譜を覗き込む。茶色く変色して、虫食いがあった。音楽に縁の遠い自分にはよく分からないが、音符が細かく並んでいて難しそうに見える。

「昔、アセイラム姫にピアノの弾き方を教えてもらった。楽譜の読み方も」

「そう」

お前、音楽は？　そう聞かれて、ピアノは弾けない。学校で鍵盤ハーモニカとリコーダーなら

したことあるけど、と曖昧に返事をする。へえ、とスレインが面白がって笑った。
「お前にも、不得意なことがあるんだな」
スレインの指が、鍵盤の上を滑る。伊奈帆はその白い指の動きを目で追った。
「この、白い鍵盤がド。黒い鍵盤は半音上がる。ほら」
スレインがその鍵盤を交互に押す。確かに、半端な音が出た。
「何か、知っている曲を弾いてよ」
伊奈帆の言葉に、スレインは少し考えて右手を鍵盤に乗せた。重さのないような手のひらだ。
「じゃあ、そうだな」
――ド　ド　ソ　ソ　ラ　ラ　ソ　　ファ　ファ　ミ　ミ　レ　レ　ド
「きらきら星だ」
「知っていて良かった」
笑う彼の顔と調子はずれのオルガンの音が忘れられない。

「ここでよく、祈っていた」
礼拝堂の、最前列の長椅子。中央の通路に面したそこに座ると、十字架と像がよく見えるのだ。ステンドグラスの光に包まれた、美しいピエタの像があった。
「ここで、スレイン様は何を思っていたのでしょう」
伊奈帆は首を振る。
「さあ。願い事は、人に話すと叶わないと言うから」

伊奈帆は長椅子を見る。
あの日———。
俯き祈るスレインに近づく。少しでも目を離すと、スレインは礼拝堂に行く。病の重さを感じさせない穏やかな様子で、伊奈帆はほっとする反面、ステンドグラスの淡い光に包まれて、そのまま召されてしまうのではないか。いつも、そんな不安を感じて隣に座る。
「ああ、いたのか」
伊奈帆に気付き、スレインが顔を上げて微笑んだ。よく笑うようになった、と思う。しかし日

増しに透明になっていく微笑みは、彼の命がそう長くはないことを物語っていた。
「冷えるよ」
持ってきた毛布を掛けようとすると、手首をぎゅっと握られた。どこにこんな力が、と目を丸くする伊奈帆をスレインはさらに引っ張る。バランスを崩して伊奈帆が長椅子の背もたれを両手で掴むと、スレインは伊奈帆の頬を両手で包み唇を重ねた。
「ちょ、ん、…」
少し苦い。舌が絡み合って腔内を深くまで追われる。刺激に頭がくらくらとする。
背中に腕を回され、引き倒された。長椅子の上で、仰向けのスレインの上に覆いかぶさった格好になる。彼の顔の横についた自身の右手が、小さく震えているのが分かった。
「…どうしたの」
伊奈帆が聞くと、スレインは眉尻を下げ目を細めて笑った。
「……今日は、気分がいい。きっと最後だ。こんなに体が軽いのは…」
明日からは、きっと動くこともできない、と彼は呟いた。
「だから…」

固く閉じた瞼に、今度は伊奈帆から口づけた。睫毛に滲んだ水滴を舐め取る。甘い味がした。顔を近づけて、視界の中はお互いの瞳だけ。碧の瞳が、左右に泳いだ。伊奈帆は目を閉じ額をくっつける。スレインの額は熱かった。

「好きだよ。君が生きていてくれて僕は幸せだ」

服の下から手を入れた。ぼこぼこした肋を辿って、固く浮き出た胸骨を撫でる。指先にペンダントの金具が当たった。じっとりと汗に濡れた胸から少し速い鼓動が伝わる。

「ありがとう」

スレインの頬が濡れた。伊奈帆の目から、水滴が雨のように彼の顔に落ちた。白い頬。白い額。白い唇。白い瞼。…碧の瞳。白い枝のような腕が持ち上がり、伊奈帆の頭をぎこちなく掻き抱いた。

長椅子に座り込んだ伊奈帆は、開いた膝の上に肘を乗せ、両手を組んだ。肘置きから間を開けている。きっとそこに、スレインが座っていたのだろう。ハークライトは、かつて並び座った光

景が見えるような気がした。
「スレインは、この場所で死んだ。その時、僕は隣に座っていたよ。もう毎日、そうしていた。いつ死ぬか分からないから、できるだけくっついていた。食事も水も、もう無理だった。入れても吐いてしまうから」
伊奈帆の声は淡々としているが、視線はじっと自身の掌に落としている。見えない涙を受け止めているようだった。
「その日も、夜明け前からここで祈っていた。寒いから、毛布を何枚か持ってきてスレインを包んだよ」
白み始めた空が赤みを帯び、橙に変わって美しく青く染まる過程。時よ止まれ、と何度も願った。
「そのまま死んだ。何も言わず。目を閉じたまま」
抱き寄せた熱い体から体温が消え、硬く冷たくなっていく感触。気付いた時には、もう夕暮れだった。はっとして、その名を呼んで顔を寄せた。何度も名前を呼んだ。何度も、何度も、何度も。死んだなんて、とても信じられなかった。あまりに安らかな表情だったから。

「それは、いつの話ですか」
ハークライトが聞いた。伊奈帆は立ち上がり、光を見上げた。
「三十年も前になる。彼は、まだ二十三歳だった。」

――――その日も、スレインは礼拝堂の椅子にいた。手を固く組み合わせ、微動だにせず、彫像のようにそこに佇んでいた。

ステンドグラスから差し込む光が彼の頭上から降り注ぎ、まるで聖像のように厳かだった。青白く隈濃い顔色も、痩せた頬も、節くれだった手足も、淡い光に包まれ絵画のように美しく静止していた。

きっとこのまま、神様に連れて行かれてしまう。

伊奈帆は、足早に歩み寄った。

「…ああ、おはよう」

祈りを邪魔されたことに怒るでもなく、スレインは穏やかに微笑んだ。その笑顔があまりに儚くて、胸が痛む。どうして笑うのか。笑えるのか。もう、今日、明日、死ぬかもしれないのに。

「何を考えていたの」

少し上ずった伊奈帆の声に、スレインは何も言わずに微笑んだ。あたたかな眼差しで伊奈帆を見て、次にマリア像を見上げる。伊奈帆は前を回り込み、スレインの隣に腰を下ろした。彼の視線を追う。

ピエタ像。
十字架から下ろされたキリストを抱くマリア。
母親とは思えないほど若々しく、美しいマリア。
マリアの膝に横たわるイエスの、あまりに生き生きとした死相に伊奈帆は目を瞠る。マリアの左手は途方に暮れたように空で静止している。
――ああ、哀しい。どうして。愛しているわ。…そんな声が聞こえてくるようだ。
この彫像はあまりに目の前の青年に似合いすぎていて、伊奈帆はぞっとした。
ピエタ。悲しみと慈悲。死してなお、その腕に抱かれるのならば。愛されるのならば。
妹のような、母のような、娘のような。恋人のような。美しいマリアの腕に抱かれるならば。
この隣人は、きっと躊躇いなく命を投げ出すことだろう。
「伊奈帆」
我に返り、伊奈帆はスレインを見た。彼はマリアを見ていた。…いや、違う。注意深く視線を追うと、イエスが下ろされた後の十字架を見ていた。
「ありがとう。感謝している」

思いがけない言葉に、伊奈帆はぽかんと口を開けた。
「何、急に」
伊奈帆の反応が意外だったのか、スレインはくく、と笑った。その途端、恐ろしいほど大きく咳き込み、伊奈帆はスレインが死んでしまうのではないかと思った。冷汗を流しながら、すぐそこの彼の背中をさすってやる。背骨の感触も、跳ねる体の軋む音も、感傷を抱くには慣れすぎてしまった。はあはあと息をして、スレインはありがとう、と伊奈帆の手をそっと押した。スレインは寝そべるように背もたれに体を預け、目を閉じる。
「今まで生きてきて、こんなに穏やかな気持ちは初めてだ」
小さな声だった。今まで、というには短すぎる青年の道程を思い描く。生きてきた、というには苦痛が多すぎる人生を想起する。
「これまで、君は忙しすぎたんだよ」
お前だって、と彼は小さく笑った。注意深くゆっくりと息を吐いて、凭れる背がずり落ちた。目をゆっくりと閉じて、開き、もう一度閉じた。開いたときに一瞬見えた瞳の色に、どうしようもなく不安になる。

「…もしかしたら。僕は今、幸せなのかもしれない」
その瞬間、伊奈帆はスレインを見失ったような感覚がした。右目をぐっと閉じてすぐ開けると、スレインは相変わらずの青白い顔で目を閉じ隣にいた。不安を感じて薄い肩に触れる。呼吸するたび上下する肩に、生きていた、と安心する。
「海の音が聞こえる。…地球の音だ。空は青い。ウミネコが飛んで、時々浜辺に降りてくる。マリアは美しい。光が差し込む。少し古びた誰もいない教会に、僕とお前の二人だけ」
スレインが目を開き、目線だけで伊奈帆を見た。もう、首を動かすこともできないのだ。
「そして、僕とお前は生きている」
瞳は、生気を宿し美しかった。
「前は死にたいと思っていたけれど、死ななくてよかった」
死にそうになってから、そんなことを言う。
「まだ僕には、願いがあった。いや、違うな。願いができた。それを祈ることができた。幸せだ」
スレインの手が懸命に持ち上がり、肩に触れる伊奈帆の手を包んだ。冷たく乾いていたが、優しい感触だった。

「お前を、一人残していくのは辛いな」
スレインの声は、迷子になった子どものようだった。独り言のようにも聞こえた。
「空もいいけれど、海がいい。波に揺蕩い、溶け、海にまざる。海水は蒸発し雲になり、雨になる。大地に滲み込んだ水は、また海へと戻る。…その方がいい」
「…さっきから、何を言ってるの」
伊奈帆の言葉に、スレインはそっと微笑んだ。閉じた目を開けた時、美しく透き通る瞳が伊奈帆を映し細められた。それでも彼は、何も言わなかった。

本当はわかっていた。
あれは遺言だった。

その二日後、スレインは死んだ。

裏口から外に出ると、雨上がりの生温い風に包まれた。ハークライトは、外壁に沿って歩く伊奈帆を追う。目の前に、ぽつぽつと苔むした十字架が現れた。

墓地だ。

雨上がりの空にウミネコが飛び立つ。ばさばさいう羽音が聞こえなくなるまで見送り、ハークライトは聞いた。

「スレイン様の亡骸はどこに？」

この墓地に埋葬したのだろうか。しかし、どれもこれもやけに古い。朽ちているものもある。

墓石を眺めるハークライトに首を振り、伊奈帆は言った。

「そんな所にはいない」

「…どういうことです」

眉を顰めたハークライトに、伊奈帆は微笑んだ。墓地の先を示し、歩き出す。

「こっちへ」

墓地の先は、土を均したなだらかな斜面だった。その下は砂浜だ。振り向くと、緑の目立つ墓

地と鐘つき堂がすぐそこに見える。振り返らない伊奈帆の後ろを歩いて行く。ぐるりと教会の外壁を半周した。目の前に、鉄錆だらけの茶色いヘリコプター。その更に向こうは、ハークライトが乗ってきたモーターボート。

最初の場所に戻ってきた。

伊奈帆は雨の中で見た時と同じように、海に顔を向けた。ハークライトはその視線を追う。青い空と青い海で、一面真っ青な景色の中、数羽のウミネコが飛行する。

「海に沈めた」

独白のように、伊奈帆が言った。

「どうして」

伊奈帆は海を見たまま微笑んだ。困ったような横顔は、どことなくスレインに似ていた。

「雨になるんだってさ」

海がいい、と語った彼を思い出す。生気のない顔の中、瞳だけが命の火を灯し輝いていた。

「遺言だよ。ロマンチストすぎるね」

「…」

ハークライトは海を見る。青い海。白い波。砂浜の小さな砂。生き物のように唸る波音。
ここに、いるのか。
火星で生まれた自分には、地球の生命観というのは時折理解を越えて映る。しかし、スレインの願いは彼らしく、そして美しいと感じた。
「だから貴方は、傘も差さずに雨に濡れていたのですか」
海辺で雨に濡れていた目の前の男。きっと、雨の日の決め事なのだろう。
「貴方も大概、ロマンチストですね」
ハークライトは振り返る。濡れた砂浜には、二人分の足跡が残っていた。

命日は星月夜だった。
「スレイン」
心は分かっていたらしい。涙が抵抗なく流れ、あれは遺言だったのだ、と頭がようやく言葉として理解した。頭で理解するのに、時間がかかることがある。心で理解するのに、時間がかかる

こともある。どうして、自分の体なのにこんなタイムラグがあるのだろう。頭と心が同時に理解できれば、自分の感情にもっと素直に行動できるのに。

「君の話は抽象的で分かりにくい」

ずっと前、薄暗い面会室で向かい合った。雨と、チェスと、生きていた君。

「それは前にも、言ったけれど…」

スレインの体は海へ送った。

冷たくなった硬い体を抱き上げて運んだ。質量的にはとても軽いのに、踏み出す一歩一歩がやけに重かった。

「どうして、君がいなくなってから涙が出るのかな」

抱き上げたスレインの衣服に水滴が模様を作り、雨か、と空を見上げた。夕暮れの後の群青の世界で、空には降るような星と白い月が出ていた。あれ、おかしいな、と何度か瞬きをして、その水滴が自分の目から出ているのに気付いた。

「僕はさ、君が思っていたよりずっと喜怒哀楽が激しいんだよ」

沖まで、どんどん歩いて行く。浮力でスレインの体が手から逃れる。ああ、こうして君がいな

くなるんだ、と思うと涙が止まらなかった。

「…もっと、君といたかった」

肩まで浸かり、海水が君の体を覆った。離れがたくゆっくりと手を放す。君はあっさり僕の腕をすり抜け沈み出した。沈んでいく君の姿は、幻影のようだった。ずっと見ていた。君が波に攫われ、どこにも見えなくなって、真っ暗な空に白々しい日が上がるまで。

気が付くと、足の裏がずきずきと痛んだ。涙を拭うと潮水が目に染みて、余計に涙が出た。空を仰ぐと明け方の空に溶ける月の形が目に映った。行かないで、と引き留めるように纏わりつく海の中を歩く。陸に上がると、足に激痛が走り転んだ。触ると生温かく、塩と鉄の臭いがした。足の裏を酷く切ったらしい。教会まで長い時間をかけて歩いた。

毎日、海を眺める。海に入る。海の中で目を開ける。

「君は、今どこにいるのかな」

海の中で漂っているのか。もう、溶けだして海に滲み込んだろうか。それとも、鮫か何かの血

肉になり、海の中を自由に泳ぎ回っているのだろうか。
「雨になるだって？　全く、いい加減にしてよ」
その雨は、いつかこの身に落ちるだろうか。
雨の日は、君に会える。そう思うと、元々嫌いだった傘は無用の長物になった。レインコートも、もういらない。
「また、雨に濡れてしまうよ」
雨の日は、君を抱く。君に濡れて、君を嗅ごう。君を飲んで、君の中で下手な歌でも歌おうか。
「雨、雨、降れ、降れ」
今日は、雲一つない快晴だ。ウミネコが空を横切り、太陽の方角へ向かった。
「愛してる、って。言えたら良かった。生きている君に」
雨の日には、恥ずかしいくらいの告白をしよう。空を真っ赤にしても知るものか。
踵を返し、今日も生きるために伊奈帆は海から遠ざかる。

「きっとスレイン様は、貴方のことを祈っていたのだと思いますよ」
ボートに向かう道すがら、ハークライトは言った。
「いい加減なことを言わないでほしい」
伊奈帆の鋭い声が後ろから聞こえる。今日聞いた中で、一番感情的な声音だった。
「私はスレイン様の部下です。あの方の背中をずっと見てきましたから」
思い出されるのは、無造作に翻る赤い伯爵服。真っ直ぐに伸びた背中と、消えない傷跡。その眼差しの先にあるもの。
「後ろに立っていると、何を見ているのか、誰を見ているのかよく分かるものです」
その瞳が、何を映していたかまでは分からない。しかし、スレインが視線を送る先にいたのは、いつも彼が触れられないほどに深く心を残したものだった。
「スレイン様は、貴方を見ていた」
界塚伊奈帆は、途方に暮れた幼子のような目をしていた。
帰ります、とボートに足を乗せるハークライトに伊奈帆は駆け寄った。首の後ろに手を回し

て、何かを外す。
「ああそうだ、これを」
手渡されたものを見る。丸い銀のペンダント。所々、スレインの瞳の色によく似た装飾が施されている。
「これは、スレイン様の…」
モニタ越しだが、一度だけ彼が身に着けているのを見た覚えがある。
「私が聞くのもおこがましいですが。大切なものなのではありませんか」
「いいんだ」
深く頷き、伊奈帆は言った。
「きっと、スレインが生きていたら、貴方に渡したと思うから」
手の中のペンダントを、そっと撫でる。小さな傷がある。それが優しく感じられた。
「地球のお守りだってさ。僕には、必要ないから」

そう言って伊奈帆は笑った。笑っているのに寂し気な表情は、やはりスレインによく似ている

と、ハークライトは思った。

Blue Sky

～旅の空～

【2018-02-07】

白、白、白。

真っ白い室内の壁が、ブラインドから差し込む陽光に照らされ目に痛いほど眩しい。ドアを開けたはいいがなかなか次の一歩が踏み出せないのは、眩しさと裏腹の冷たく重い空気のせいだ、と伊奈帆は思った。

ベッドの傍には数種類の機械類、器具が設置されていて、狭い病室は人が三人も入れるのがやっとだ。心臓モニタは電子音を規則正しく刻む。点滴、ケーブル、太さの違う何本もの管の先。細く長い針。伸ばされた白い腕に針山のように繋がれていた。

白い壁の中、仰々しい装置に囲まれた白いベッドの上に横たわる人物を見下ろす。

「寝てるのか…」

意識が戻ったと聞いて来てみれば、部屋の主は穏やかな寝息を立てていた。急にどっと疲れて、伊奈帆はベッドの横に丸椅子を引き寄せ座った。

出張先から軍の病院へ航空機で文字通り飛んできた伊奈帆は、あと三十八分後にはこの部屋を出なくてはならない。それまでに、彼は目を覚ますだろうか。

「早く起きてよね。スレイン」

伊奈帆は緩やかな呼吸を繰り返す胸部を見てから、掛け布から出ている部分、スレインの腕と体と顔を見た。初めてこの病室に訪れた時に比べて、包帯やガーゼの覆う面積は減り、素肌が見える。皮膚の痣がところどころ茶色に変色していて、腕の中ほど、針の密集する箇所が内出血で青黒い。生来の肌が白いので、色が変わっている場所がとても目立つのだ。包帯がぐるぐると頭部に巻きつき、スレインの顔の半分ほどを覆っていた。包帯の隙間からこぼれる髪が、枕に広がり乱れている。

ふと、髪を整えてやろう思った。手を伸ばす。

「…ぅ」

伊奈帆の指が髪に触れる前に、スレインの口から声が漏れた。さっと手を引っ込め、腰を浮かせて顔を覗き込む。口は小さく開いていて、前歯が見えた。

「やあ、起きた？調子はどう？」

「…あ、ここは？」

声はがさがさしていた。唇は荒れて薄皮が剥けている。ケホ、と一度小さく咳をして、スレインは大きく息を吸った。薄い胸が大きく上下した。伊奈帆は浮かせた腰を下ろす。椅子の足が耳

障りな音を立てた。
「病院だよ」
「…ああ、そうか。…そうだった。お前は界塚か？」
伊奈帆は眉を顰めた。仕方のない質問とはいえ、腹の奥でじりじりと憤りが沸き起こった。丸椅子に座ったまま、一度目を閉じる。瞼の裏の赤い血管が見えた。
この部屋は明るすぎる。
どれだけゆっくり目を開けても、目に見える現実は変わらなかった。
「…そうだよ。今は、僕しかいない」
「そうか」
静かな場所だ。音がする。機械の音。階の違う廊下の足音。滑車の音。窓の外の微かな風の音。耳が、微細な物音を次々拾い出す。スレインの薄く開いた口から、それらの音に混じって息を吐く音と吸う音がはっきり聞こえた。彼は生きて、呼吸をしている。
「そうか、生きていたのか」
呟いたスレインの声には、自分が生きていたことに対する安堵と落胆が滲んでいた。伊奈帆は

吐きそうになった溜息を飲み込み、努めて冷静に口を開く。
「君はどうして抵抗しないの」
伊奈帆の言葉に、スレインはシニカルな笑みを返した。癇に障る笑い方で、その口を睨みつける。…見てはいないだろうが。
「できるものか。僕は死んだ人間だ」
伊奈帆は、スレインの首に痛々しく残る痣に拳を握った。薄くなっているが、折れそうなほど強く握られ絞められた首は、黄色い痣が溢したインクのように斑に残っている。
この首が折れていたら。彼はもうここにも、どこにもいなかった。華奢な、筋や血管が浮き出た青白く黄斑な首を凝視する。首筋の血管が血液を運ぶ動きが目に見える。少し汗ばんで、髪がいくらか張り付いていた。
「捕虜虐待は軍規違反だ。暴行した人間は移送されたよ」
こいつのせいで！口汚く持論をまくしたてた暴行犯は、それでも職を失うことはなかった。このような事態は想定して然るべきだった。しかし、想定しても予防は難しい。伊奈帆にできることもそうないのだ。

スレインの処遇に関して、軍は存命に積極的ではない。スレインの命というのは、連合軍では大いなる厄介事、そして取るに足らないロマンティシズムの具現なのだ。

処刑はしないが、不測の事態は仕方がない。そういうことだ。

「死人に関わったばかりに、気の毒なことだ」

伊奈帆は、スレインのこういう物言いに神経を逆撫でされる。他人事のように自分を扱い、自分の傷や苦痛にも無頓着だ。今に始まったことではないが、伊奈帆はいい加減にしてほしい、と思った。口には出さないが、言葉の端々で彼の考えていることは手に取るように分かる。

死んだ方がいい。死にたい。死なせてくれ。

一体、いつまで。

「そんな言い方はやめろ」

思わず大きな声が出た。スレインが、管が絡みついた腕の人差し指をぴくりと動かした。

「どうして君が怒る。界塚」

落ち着いた、低い声だった。声音には、諦観があった。伊奈帆の心を、分かってないのか気付いてないのか、気付かないふりをしているのか。

「…君が死んだら、困る」
もっと言い方があるだろうに、それしか言えなかった。理屈を並べれば嘘っぽく聞こえそうだし、理屈以外に言葉は思いつかなかったからだ。スレインは伊奈帆の返答の後、息を長く吐いた。
「…ふうん。姫様との約束だから？」
こんな問答はもう、うんざりだった。
「それだけじゃない。それにもう、姫じゃない」
「…よく分からないが、この通り僕は生きている。傷はそのうち治る。問題はない。またあの場所へ帰るのか？」
帰る先があの地下の独房を示すことに、無性に腹が立った。しかし、それで彼を責めるのは八つ当たりに近い。
「そうだね。…医者が判断すれば」
ブウン、という機械のノイズが意識された。伊奈帆は目を向ける。スレインは目を覚ました。意識もはっきりとしている。もう、必要のない装置だ。
スレインの頭に巻かれた包帯を見る。顔の上から半分以上を覆うそれの下の眼窩。

「傷は治ると言っても、目は治らないよ」
伊奈帆は言った後で、皮肉と受け取られたら困ると思ったが、スレインは素直に返事をした。
「知ってる。しかし、別に何も困らないだろう。独房で、食べて寝るだけの毎日だ」
話をする気力を失って、伊奈帆は立ち上がった。もう時間もない。
「…もう行くよ。お大事に」
「……何を大事にするんだか」
何か言い返したいのに、言葉が浮かばない。体が重い。伊奈帆は常より重い足取りで踵を返し、白いドアを開けた。

スレイン・ザーツバルム・トロイヤードが独房で暴行を受け、地下の極秘施設から軍の病院へ救急搬送された。界塚伊奈帆がその知らせを聞いたのは二週間前の深夜だった。病院に駆けつけた伊奈帆は、ICUの前で事情を聞いた。
加害者は連合軍特務機関の人間だったそうだ。正規の手続きで面会許可を取り、独房を訪問し、尋問をした。看守と監視官が立ち会った。

独房に入るなり、特務官は囚人に飛び掛かった。慌てて取り押さえようとした看守と監視官は突き飛ばされ、壁で頭を打ち意識を失った。その後、監視カメラで異常に気づいた他の職員がやってくるまで、囚人への暴行は続いた。負傷した職員たちは囚人と共に病院へ移送され、今は意識が戻り当時の状況について報告を終えている。

訪問者は独房の扉が開くなり、囚人の首を絞めた。看守と監視官が止めに入って死ぬ前にそれは中断したが、その後倒れ込んだ囚人の顔、体を殴り、蹴り、床に打ち付けた。駆け付けた職員数人が男を取り押さえたことには、囚人は血を吐いて体の数か所から血を流していた。顔は血まみれで、眼窩から血が流れ出ていた。床は血が一面に広がっていた。囚人の意識はないが、まだ息があった。

左眼球は破裂して、もう戻らない。右の眼球は網膜が半分以上剥離して、視力は著しく低下した。明るさや、近くの物はぼんやりと認識できるかもしれないが。集中治療室の前の長椅子で、緑色の手術着を着た医者は伊奈帆にそう言った。

看守に開錠された頑強な扉を押す。中は薄暗い。寒そうな場所だ。伊奈帆は足を踏み入れた。

伊奈帆がスレインの独房を訪れるのは初めてだ。病院から独房へ移された彼は、まだ絶対安静だ。ベッドに仰向けで寝かされている。

体に繋がる管は随分減ったが、針から伸びる管の先には、等張液のパックと抗生剤のボトルがあった。ベッド脇のスタンドに、重々しく吊り下げられている。

「スレイン」

「ああ、お前か」

身動きしないので寝ているかと思ったが、呼び掛けるとすぐ応答があった。口元が微かに動き静止した。微笑もうとしたのかもしれない。包帯よりも白さの際立つ顔を見下ろす。

「調子は？」

「まあ、悪くない」

「そうかな」

顔の包帯は少なくなったが、両眼の周りはまだ取れない。ガーゼに覆われた眼球の一つは失われ、もう一つは機能をほとんど失った。知らず伊奈帆は自身の眼帯に手を伸ばしていた。

ここにも、もう何もない。
「別に、いらないものだった」
投げやりな声と言葉で頭にかっと血が上った。しかし、伊奈帆は何も言わなかった。ベッドを見下ろし拳を握りしめる。スレインが、言った後で口を引き結んだ。
黙りこくる二人の間に、恐ろしいほど重く長い数秒間が横たわった。石のように重い口を、先に開いたのはスレインだった。
「…すまない。君の前で、失言だった。……僕は、別に平気だ。痛いのには慣れている。今は身動きできないが、そのうち治る」
ぽと。ぽと。
伊奈帆は、チャンパーに薬剤が落ちる様子を眺める。その雫の音が聞こえるように神経が尖っていた。落ち着け、と自分に言い聞かせ、細く長い息を吐き出す。
伊奈帆は室内を見渡した。冷たそうな壁はコンクリの打ちっ放しで、冷え冷えとした色合いをしている。あとは剥き出しの小さなトイレと、生白い洗面台。清潔だろうが、どこか場違いだ。明り取りの窓は高く小さく、その外には何も見えない。あの窓では、空が青いのかさえ分からな

い。薄暗く肌寒い室内では、何もかもを鈍く、重く感じるようだった。
資料で見た。想像はしていた。しかし、この場所がスレインの唯一の居場所になってしまったことを、このとき伊奈帆は現実のものとして明確に理解した。
白い掛け布の上、スレインの胸と腹の間に手を乗せる。体が強張ったが、すぐに脱力して息を吐いた。伊奈帆は薄い体をぽんぽん、と軽く叩く。
馬鹿なやつ。慣れていても、痛いものは痛い。怖いものは怖い。そんな、何でもないようなふりをしなくてもいいのに。
「また、来るよ」
独房を出ようと背を向けると、ああ、という声が聞こえた。彼の反応を意外に思いながら、扉の外に出て天井を見上げる。蛍光灯の素っ気ない光が目に刺さった。
もう来るな、と言われると思った。
…あいつ、弱っているし、寂しいんだ。
伊奈帆は一度だけ厳重な鍵と格子で仰々しい扉を振り返り、大股で歩きだした。

「調子は？」
「…お前も、飽きないな」
二週間後、いつもの面会室で差し向かう。スレインの体からは、点滴も、包帯も、ガーゼも取り去られていた。体の痣も薄く目立たない。伊奈帆はテーブル越しに真向かいの、以前よりも更に青白く痩せ細った顔を見つめた。左目は閉じられ窪んでいる。右目はどこか遠くを見るように細められ、眉間に皺を寄せていた。視力がほぼ失われた右目でそれでも、伊奈帆の顔を認識しようと目を凝らしているらしい。目つきが悪くて、すごい悪人面だ。
「不便はないかい」
「別に。僕には、することは何もないから」
強いて言えば、息をすることくらいか。そう言って乾いた笑いが二度三度ひび割れた唇から漏れた。ジョークが壊滅的に下手なことは知っているが、今回は特に酷い、と伊奈帆は眉根を寄せる。まあ、ジョークのセンスがないのはお互い様だが。
「チェスでもしようか」

「ああ、そうだな」
テーブルの上には、何もない。二人は、それぞれの頭の中にチェス盤を広げた。しばらく、面会室にはアルファベットと数字、チェスメンを示す声だけが響く。
「チェスにおける可能な手は、地球中の砂の粒より多いんだ」
駒を取り合い対戦が佳境に入った頃、伊奈帆が言った。スレインは伊奈帆に顔を向ける。目が合えばいいのにな、と伊奈帆の隻眼はスレインの右目に焦点を合わすが、視線が交わされることはなかった。
「一手目には四百の選択肢、二手目には七二，〇八四、三手目には九百万以上。四十手目には、選択肢が宇宙二十個分の原子の数を超える」
スレインは椅子に凭れ、眉間を指でほぐし瞬きを数度繰り返した後、面倒くさそうに髪を掻き上げた。
「何が言いたいのか、分からないな」
伊奈帆は右手で、空中のチェスを抓む動作をし、首を傾けた。
「チェスは、飽きないってことさ」

チェックメイト。伊奈帆がそう言うと、スレインは口をへの字に曲げて悔しそうに腕を組んだ。

「彼の様子はどうですか」

面会の後、応接室のソファで伊奈帆は監視官に聞いた。伊奈帆より二回り以上年上の彼は、ソファの向かいで背筋を伸ばし頷いた。

「変わりありません。大人しいですし、受け答えはしっかりしています」

監視官は、その、と言葉を詰まらせた。膝の上で組まれた指が、言葉を探して数度手の甲を叩いた。

「以前よりも、穏やかな様子です」

伊奈帆は監視官の戸惑ったような声音に、微かな胸騒ぎを感じた。

「調子は？」

今日も今日とて、面会室で向かい合う。スレインは、小さく顎を引き頷いた。

「悪くない」
伊奈帆は、スレインの顔を観察する。左目に、表層義眼が装着されていた。眼窩・眼瞼の形状を正常な状態に保つ目的で宛がわれたそれの虹彩はブラウンだった。伊奈帆は大いに違和感を感じたが、本人は気にした風もない。
「ねえ、どんな気分？」
スレインは無表情に伊奈帆のいる方向を眺めてから、左右非対称に口の端を上げた。伊奈帆は、スレインのこの笑い方はあまり好きではない。しかし、笑顔が見られるようになったのは悪くない、と心の中で頷いた。
「今更だな」
それもそうか、と思ったので、うん、と返答した。スレインは椅子に背を預け瞼を閉じた。
「……見えない、というのは安心する。世界を、見なくて済むのは」
スレインは重そうな瞼を持ち上げ、焦点の合わない碧玉を伊奈帆に向けた。不思議な目だ。どこか遠くを見ているようで、ずっと見ていると彼の存在が伊奈帆から遠のくようだ。ここにいるのに、触れられるほど近くにいるのに、彼の見ているものはここにない。

心は、ないようにさえ思える。

でも、それは違う、と伊奈帆は自身の想像に反論した。スレインはここにいて、伊奈帆の声を聞いている。この狭い部屋の中で、心臓は動き血液は体内を巡り、同じ空気を吸って、吐いている。現実の中で生きている。

「でも、君は世界の中で生きている。現実は何も変わっていない」

「そうかもしれないな。でも、不思議と安らかだ」

微笑みを浮かべた顔は、美しかった。儚くて、繊細で、触れたらきっと冷たくて。病的で、自然ではない。作り物のような美しさだ。籠に入れられた鳥のような。窓枠に切り取られた空のような。花瓶に活けられた切り花のような。

なんという、不自由な美しさだ。

そんな顔が見たいわけじゃない。そんな言葉を言わせたいわけじゃない。

そんな風に、生きてほしいわけじゃない。

「閉じ込められていれば、目を失えば、羽を切り落とされれば、安心か？　何もしなくていいのか？」

いつもより感情的な伊奈帆の声音に、スレインは戸惑った表情を浮かべた。張り詰めた空気が室内に増殖する。スレインは伊奈帆の声に向けて目を細め、口を開いた。

「…何が言いたい？」

「君は一生ここに閉じ籠っているつもりか」

思わず口をついて出た言葉に、面会室でこれは不味いな、と思うが伊奈帆は続ける。後の面倒は後で考えよう。だって、今言わないといつ言えるか分からない。真っ白な病室での、針の密集した青い腕を思い出していた。

この管が、機械が、薬液がなければ。

ぞっとした。

死んでいたかもしれないのだ。彼は。自分の知らない間に。

伊奈帆が立ち上がると、椅子の足が床を擦る音が尾を引いた。スレインの前に手を置き、前屈みになる。思いっきり首を伸ばして顔を近づけると、碧玉が見開かれた。

見えているか。見えていてほしい。瞳の奥に心があれば、と穴のあくほど伊奈帆は瞳孔を見据える。

「違うだろう」

その気になれば、こんなところ出て行けるんじゃないのか。

伊奈帆の言葉に、スレインはこれ以上ないほど両目を見開き、そして不機嫌そうに俯いた。何も言わなかった。

伊奈帆は、また来る、と背を向け面会室の冷たいドアノブを握った。

「調子は？」
もう何度目だろうか。
面会室で向かい合う。スレインは何度も瞬きをして、眉間に消えないのではないかと思うほど深い皺を刻み伊奈帆を睨んでいた。伊奈帆の姿を判別できているかは分からない。伊奈帆は、その顔を見つめに見つめた。
いつ来ても、生きている彼に会うのはこれが最後かもしれない、という思いがどこかにあって、だから何度も彼が生きていることを確認するようにここに来る。まだ生きている。彼も、自分も。
「…一つ、お願いがあるんだが」
珍しく、今日はスレインが自分から言葉を発した。内容も、とても珍しい。彼がお願い事をするのは、初めて面会をした時以来だ。
そのお願いは、到底聞き入れられるものではなかったが。
「何？」
緊張した声が出たかもしれない。フォルマウント分析をしたら、ばれただろう。しかしそんなことのできる義眼はもう伊奈帆の左眼窩にはない。もちろん、彼の眼窩にも。

「君に、その、……触ってもいいか？」
伊奈帆は呆気にとられ、無言で眉を上げた。若干の動揺は空気で伝わっただろう。スレインは目を伏せ、きまり悪そうに続けた。
「本当に、君がそこにいるのか確認したい。…嫌ならいい」
「いいよ」
しばらく、何も言わなかった。スレインがテーブルの上で組んでいた手を伸ばしたので、伊奈帆は身を乗り出してその手を握る。スレインの手が伊奈帆の手を撫でた。スレインの指先は冷たく固いが、掌は温かかった。細く華奢な指が、伊奈帆の手の形を、温度を、確かめるようにゆっくりと肌を滑った。
「…手が冷たいな」
「冷え性なんだ」
スレインの手が、伊奈帆の手から手首へ、肘へ上がる。おそるおそる、という感触がくすぐったい。伊奈帆の二の腕のあたりに、青白い血管の浮き出たスレインの手の甲が見える。ごわごわとした軍服に包まれた腕を、その手がゆるく握った。

「着こんでいるな」
「寒がりなんだ」
二の腕から肩を辿って、首のあたりにスレインの指が触れると、伊奈帆はびくりと体を震わせた。スレインの手が冷たくて、ぐっと奥歯に力を入れる。
「冷たいか」
「…すごく」
すまない、と彼は言ったが、声は少し笑っていた。ああ、その笑顔はいいな、と伊奈帆は思う。こんなに近くで彼の顔を見るのは初めてかもしれない。口の近くに一つ、小さな笑窪ができていた。瞼を閉じていて、瞳は見えなかった。手は首から耳を確かめて頬に至る。指先は冷たい。両手で頬を包み込むようにして、スレインは伊奈帆の顔を瞼の裏に描いたようだ。
「柔らかい肌だ」
「日本人だからね」
掌がそっと浮き、指先が触れるか触れないかのところをなぞっていく。肌の産毛がさわさわして、とてもくすぐったい。鼻や、頬骨や、額。そして、右の瞼。指が触れた。反射的に伊奈帆の

背が緊張し強張ったが、二人とも何も言わなかった。
「…眼帯を、取ってもいいか？」
「いいよ」
外気に晒された左瞼を、スレインの指の腹がなぞる。紙一枚を隔てたような感触だった。目尻でその指は、少し震えた。
「…額を、撃ち抜いたつもりだった」
スレインは、初めて聞く声でそう言った。色んな彼が同時に喋った。そんな感じの、茫然とした声だった。
ならば、額でなくて何よりだ。伊奈帆は、スレインもそう思ってくれていたらいいのにと思う。聞いていないし聞くことはないから、分からないが。
唐突にスレインが伊奈帆から手を離して、体を離して固い椅子へすとんと座った。背を深く預けている。顔は床を向いていて、表情は見えない。伊奈帆は尋ねる。
「感想は？」
スレインは息を潜めてじっと動かなかったが、しばらくしてぽつりと言った。

「…あたたかい。君は生きて、僕の前にいるんだな」
最後に触れた瞼がぴくりと震えた。
静かだ。
お互いの息遣いまで聞こえるような静寂だ。スレインとは、時々こういう時がある。不思議と嫌ではない。
この静けさは、カタフラクトで時折感じた種類の静けさだ。海の底のような。夜の果てのような。孤独で、誰にも何にも触れられない。それでも、どこか安らかな。この静けさを誰かと共有するのは初めてだ、と伊奈帆は気付く。
「僕も、君に触れていいかな」
スレインが顔を上げた。なんとも酷い表情だが、彼は頷いて背筋を伸ばした。
「…ああ」
伊奈帆は腰を上げて、机越しにスレインの頬に指を伸ばす。隈のある青白い肌に触れると、乾いて冷たい。さらさらとした感触が指に伝わる。スレインは死人のように静かに瞼を閉じていた。伊奈帆の固い指先は、彼の華奢な顎から頬骨までの骨格をなぞり、こめかみを通る。そして、目

と目の間を右手人差し指の腹で押さえた。スレインの体が強張る。左手を後頭部に回し、指を開き頭の形を確かめる。細い猫毛が指の間を通った。なだらかに丸く、小さな頭蓋だ。

「…ここを」

スレインは息を詰めてじっとしている。口元は弧を描いた。また、笑窪ができた。今度は左右両方とも。安らかな微笑だ。

「撃てば良かった？」

そう聞くと、スレインは小さな口の隙間から、本当に小さく、聞き取れないくらい小さな本音を吐き出した。

「そうだな」

二人で地球に落ちたあの時。

夜の海岸で、波に濡れて、ぼろぼろで。向かい合った。伊奈帆は、スレインに銃口を向けた。その時の彼の表情を、伊奈帆は決して忘れられないだろう。もともと、撃つ気はなかった。しかし、撃つ理由が失われたのはその顔を見たからだった。

今も、そんな顔をしていた。そっと指を眉間から離す。押していた場所は、少し赤くなってい

た。
「でも、僕は撃たなかった」
伊奈帆はスレインから離れ、椅子に深々と座った。スレインは、瞼を閉じたまま姿勢よく座っている。もう口元の笑みは消えていた。塑像めいた形の良い唇で、無表情に佇んでいた。
「たとえ時間が巻き戻ったとしても、撃たない」
――あの夜。あの海。銃口の先。
スレインは笑っていた。
お前なら、僕を殺してくれるだろう？
誰もかれも、傷つけはしても殺してはくれない。お前はどうだ？　敵である僕を、報復のために殺してくれるだろう？
もう、何もかもに疲れてしまった。僕にはもう何もない。もう、何も。
表情が、そう語っていた。
ふざけるな、と思った。
「君が…どれだけ願っても、僕は君を殺さない」

「そうか」
今では、お互いのことが少しずつ分かってきた。友人と呼べるくらいには。できれば、まだまだ時間が欲しい。会う時間。話す時間。
未来の時間。
「また会おう」
伊奈帆は立ち上がる。慣れ親しんだ面会室は足を運ぶ毎に、まるで彼の部屋であるかのように錯覚する。月に数度、自分と同じ回数、ここで過ごす彼はどう感じているのだろうか。
「そうか」
スレインは茫然とそう言った。最近は、こうして返事をしてくれる。伊奈帆は扉から出て、マジックミラー越しに彼の姿をもう一度見た。項垂れて座っている。
冷たい、寒々しい、切り離された場所だ。こんな所に、自分は安らぎを感じ始めているなんて。
もっと違うところで話がしたいと、伊奈帆は思った
そして。
界塚伊奈帆は、来なくなった。

「…界塚伊奈帆は、どうかしたのですか」
面会が途切れ半年ほど経った頃、堪りかねてスレインは食事を配給する看守に聞いた。
彼とは、挨拶以外にも時々言葉を交わすようになっていた。収容当初から、戦犯である自分を気に掛けてくれていたのを知っている。看守はスレインを一瞥して、気の毒そうな顔で首を振った。
「…答えられない」
「死んだのですか」
ガシャン。
食器が割れるかと思うほど音を立て食事を置いた看守は、大きな靴音を立てて立ち去ろうとした。普段は穏やかで冷静な人物だ。スレインは意外に思い、界塚伊奈帆は、ともう一度聞いた。看守は口を閉じろ、と怒気を含んだ声で命じた。この看守の、このような感情的な声音は初めてだった。
「何も聞くな。君にそんな権利はない。……罰則があるんだぞ」
「…はい」

ばつが悪そうに立ち去る看守にの方向に顔を向けて見送り、スレインは立ち上がった。足元がふらつく。

食事が喉を通るとも思えなかったが、独房の簡素な椅子に座り、手探りでパンを掴んだ。機械的に口に運んで咀嚼する。喉の奥がそれを拒んで痙攣したが、水と一緒に飲み込んだ。

そういえば、ここ最近、食事に等閑になっていた。食物を摂取するのに、こんなに苦労するのは久しぶりだった。

食べろ食べろと言うが、ちゃんと食事をするのは、結構大変なんだ。特に、お前が来なくなってからは。

時間が掛かるかもしれないが、幸か不幸か時間は持て余すほどある。

どうせ、失うものも、得るものもない。

心なんてものは、もう何処かにやってしまって、見つからない。

だから、これからのことは全て、他にすることもないからだし、面倒とか、辛いとか、そんなこともない。退屈で、お前が来なくなったから。仕方なく、だ。

お前が来ないのなら、こっちにも考えがある。まず、この食事を全て食べ終える。スレインは

嘔吐きつつ、界塚伊奈帆の小煩い顔を思い浮かべた。

伊奈帆が来なくなっても、スレインを取り巻く環境は、変わり映えしない。同じ場所。同じ時間。同じ人間たち。皆、繰り返される日常に慣れてしまった。

誰も、何も教えてくれない。当然だ。彼らには立場がある。自分は敵だ。なら、手段は一つ。

界塚伊奈帆のいなくなった場所で、スレインは辛抱強く自分を取り巻く人々が支配下に入るのを待ち構えることにした。

スレインは従順に、望まれるように、そして時折期待を持たせるように行動した。界塚伊奈帆の生死を確認するためだけに、心を売って（そんなものはとうに失われてはいたが）、体を投げ出し（それも、もはや別になんの痛みも伴わない作業の一つであった）、暗い地下でひっそりと生き延びた（別に、死んでも良かったのだけれど）。

職員たちは、いつの頃からか誰も訪れる者のないこの施設で、たった一人の囚人に飼い馴らされたようだった。

スレインにとっては苦痛しか伴わない生きる作業ではあったけれど、もう慣れた。ささやかな目的は、時折スレインの思考を窓の外へ向けさせた。

小さく四角い窓に顔を向ける。

界塚伊奈帆。

お前は生きているのか。それとも死んでいるのか。でも少なくとも、僕には死んだような気はしない。

それなら、もう少し生きてみよう。できれば、憎まれ口の一つくらい言ってやりたい。チェスだって、勝ち逃げされているんだ。

そして、界塚伊奈帆が消えたあの日から、一年と少しの月日が流れた。

その日も、スレインは看守の一人と寝ていた。彼らはあまりに無為にすごすこの場所で、自分たちの任務の意義を見失ったようだった。毎日数度のこの作業は、スレインの方から仕向けた事

態であり、思惑通りではあった。
数年の付き合いでこんな罪人にも情が湧いたのか、施設の職員たちはスレインに酷いことをしない。暴力は微塵もなく、行為の最中には愛の言葉を囁く者もいた。驚くのは、毎度きちんと湯とタオル、着替えが与えられることで、当初スレインは火星とのあまりの違いに皮肉を感じたものだった。
火星では、罪を犯したわけでもないのに、地球人と言うだけで手酷い仕打ちを受けていた。大罪人になった今では、安全な場所で、衣服も、食事も、寝床も用意されている。一日数度行われる行為にも、特に感傷も感想もない。
最中にふと、我に返る。あの日触れた柔い頬や、固い癖のある髪。着こんだ服の下の硬い肉の感触を手が思い出す。額が、戦で硬くなった指先の強い力を覚えている。
――――調子は？
いつだって同じことばかり聞いて。僕は、何て返していただろう。
どうしても知りたかった。界塚伊奈帆はどうして来なくなったのか。
嫌気がさした。気の迷いだった。それは当然だ。まともな人間なら、誰だって来なくなる。誰

だって見捨てる。しかし、スレインは界塚伊奈帆のことを、もう、よく知っている。
「また会おう」そう言って、ただで死ぬ男ではない。用意周到でしつこいあの男なら、たとえ死んでいたとしても、何らかのアプローチがあるはずだ。そういう男だ。

換気扇の風で、少し肌寒い。気怠い体を仰向けにして天井を見上げたスレインは、隣の裸の背中にぴたりと手を当て体を寄せた。この看守が、甘い男だと知っている。
「…界塚伊奈帆は」
スレインがその名を出すと、看守の背が震えた。彼にとっては英雄であった男の名をもう一度、唇に乗せる。
「界塚伊奈帆は、ずっと来ない。死にましたか」
そう囁いて、肩に手を乗せた。その手をゆっくり握られる。大きく、無骨な手だった。この看守は、よくこうして手を握る。他のどの部分よりも、手の形を覚えてしまった。
「…本当は、言ってはいけないんだが」
スレインと十も違わないだろう看守は背を丸めた。握られた手に力が入った。掌に、蛸がある。

がさがさとした、乾いた熱い手だ。
「死んだよ。葬式に出た」
まだ若いのに、可哀想になあ。
ぽつりと、看守が呟いた。スレインは、広い背中に顔を埋めた。

界塚伊奈帆の姉に、会うことはできませんか」
スレインは、特に入れ込んでいる職員の一人に聞いた。
腰を動かしていた壮年の男は動きを止め、彼の汗が腹の上に数滴落ちた。上がった息が平かになる頃、汗が胸にもう一滴落ちた。
「なぜ？」
「彼が死んだから」
体内で熱量が失われていくのが分かった。唐突に引き抜かれて、喉が引き攣る。解放された腰と体の重みでスプリングが軋んだ。

男は立ち上がり、そのまま何も言わずに服を着て扉から出て行った。スレインは扉が閉まると腹這いになり、固い枕に顔を埋める。汚れたままの肌が冷えて、肩が震えた。湿った臭いが室内に充満しているが、換気扇を回すために身を起こすのがこの上なく面倒だった。

界塚には、姉がいると聞いた。名前は、よく覚えていない。軍人だと言っていた。

会えば、何か分かるかもしれない。

しばらくして、扉の下部のハッチから湯とタオル、服が差し込まれた。のろのろと起き上がり、スレインは熱い湯で顔を洗った。

じゃら、と鎖が鳴った。

手錠を繋がれたまま、背に銃口の硬い感触を感じながら、スレインは歩く。久しぶりの通路だ。こんな薄っぺらな靴底でも、音が響き耳を打つ。

かつては、ひと月と空けず踏んだ床。面会室への道のり。記憶より長く感じる。もしかして、自分は緊張しているのかもしれない、とスレインは思った。

馬鹿なことだ。

道の先、扉が開かれる。無理を通せるくらいの月日が流れたのだ。

一年ぶりの面会室で目の前に座る女性に、スレインは目を凝らした。視力をほとんど失っているので、顔立ちが見えないのが残念だった。多分、髪は長い。多分黒髪。平均的な体型のようだ。界塚伊奈帆に似ているかどうかは分からない。目で得る情報より、他の器官の情報量がはるかに多い。日の匂いがするとか、吐く息吸う息が柔らかいとか。硬く跳ねる足音。椅子に座るスカートの衣擦れの音。その場に満ちる張り詰めた空気。スレインは、彼女が向かいに座った瞬間にああ、やはり身内なんだな、と不思議と納得した。

何というか。佇まいというか、在り方があの男と似ている。
「スレイン・トロイヤードです」
相手が息を呑んだのがわかった。
「界塚ユキ准尉。界塚伊奈帆の姉です」
緊張と怒気を帯びているが、柔らかく、綺麗な声だった。優い発声だ。
「界塚伊奈帆は、死にましたか」
空気がキン、と鳴るように凍った。呼吸の音が殊更意識されるが、スレインは待った。界塚伊奈帆の姉が、ぎり、と奥歯を噛み締める音が聞こえた。
「ああ、もう」
苛立ちを隠さない声で、彼女は机を両手で叩いて立ち上がった。スレインは界塚ユキの顔がある方を見上げる。睨みつけているであろうその目を見られないのが、また残念だった。
「貴方、自分が誰に何を聞いているか分かっているの」
「正気です」
「…教えてあげない」

「そうですか」
「…」
「…」
防音が施されたこの面会室では、お互いの存在以外の音はしない。
息を吐く音。息を吸う音。
椅子の動く音。椅子が床を擦る音。
衣擦れの音。
靴が床を叩く音。
テーブルの上の指先の音。
そしてため息。
「僕は、後悔しているんです」
スレインの言葉に、ユキが「何？」と聞き返した。
その言い方が、本当によく似ている。
「界塚伊奈帆には、借りがある。それを返していない」

「借りって…」

スレインは服の上からペンダントを握った。これがこの場所でずっとこの心臓の上にあるのは、きっとあの男のおかげだ。これが何なのか、言ったこともないのに。界塚伊奈帆は、アセイラムがこれを持っていたのを知っていた。もしかしたら、自分のことを彼女から聞いていたのかもしれない。

アセイラムは、地球で鳥を見たと言っていた。界塚伊奈帆と一緒にいた。不思議なことだ。

界塚伊奈帆は、僕を殺そうとは思わなかったのだろうか。僕を殺す機会を棒に振り、あまつさえ、何度も会いに来るなんて。

「僕を生かした。勝手に死ぬなんて許さない」

「貫方ねえ！」

光だけを捉える瞳で、スレインは界塚ユキに顔を向けた。そういえば、界塚伊奈帆が声を荒げたところを見たことがある。月だ。互いの銃の先。彼の目はあの時もノヴォスタリスクでも、左しか見られなかったけれど。

海で、銃を介した静かな瞳が、機械の眼を見た最初で最後。

あいつの目。もっとよく、見ておくんだった。
「ユキ、さん」
界塚伊奈帆の姉の名前を発声する。その時は、少しだけ鼓動が速くなった。ユキ、というのは日本語のsnowだ。
美しい名前だ。
「お願いがあります」

それから十五分後、スレインは界塚ユキの運転する乗用車の後部座席に座っていた。車のエンジン音が大きいが、さっき鳥の声が聞こえた気がする。潮の香りが鼻孔をついた。ほんの少し、海を視認できないことを残念に思う。
「どうするのよ」
界塚ユキが、ハンドルを荒々しく操作し不貞腐れたように言った。スレインは、窓の外に向けていた顔を運転席に向ける。お互い見えてはいないが、最低限の礼儀に思われた。
「どうしましょう」

貴方ねえ！そう言って、ユキはますますアクセルを踏み込んだ。Gがかかり、体がシートに縫い留められる。カタフラクトに乗っていた感触に似ている。星の海に懐かしさを感じる。もう乗ることはないだろうし、それは無理なことなのだけれど。

――ここから出る。助けてほしい。

スレインはそう言った。呆気に取られるユキの手を引き、面会室のガチャガチャと重い扉を開け、スレインは飛び出した。どこに向かって走ればいいのか分からないが、とにかく足を動かした。途中から、なぜかユキがスレインの手を引いた。ユキに導かれ、走る。二人分の靴の音が、静かな通路に反響した。途中途中、書記官、監視官、事務官、看守たちがいた気がするが、見えなかった。でも、誰も何も言わなかった。追い掛けられもしなかった。

息を切らして走っていくと、突然視野が明るくなった。

空気が変わった。

風が吹いた。とても冷たい。頬にぞわりと鳥肌が立った。でも、不快ではない。

外に出たのだ。

凸凹した砂利道を、二人で走った。立ち止まると、車のドアが開く音。身を滑り込ませる。大

きな音を立て二度ドアが閉まった。エンジン音。振動がシートから伝わる。急発進した車は、大きく車体を揺らしてスピードを上げた。

後部座席で、スレインはそっと息を吐く。どうしてこの人が助けてくれるのかをスレインは想像しない。想像しても意味はないし、それをすると息が止まりそうだったから。

会えば、殺されるかもしれないと思っていた。それが一番良いとも思っていた。しかし現実は、界塚ユキはスレインを車の後部座席に乗せ極秘施設から遠ざかっている。脱獄幇助だ。理屈に合わない。論理的ではない。しかし、想像していないが想定されたことだ。

スレインは、聞いた。

「ところで、本当に界塚伊奈帆は死んだんですか」

ユキはきっとバックミラー越しにスレインを睨み（もっとも、それはスレインには視認できなかったが）、飲み込むように言った。

「…そうよ」

「いつ？」

「一年前」
面会が途切れたのもそのくらいだ。葬式をしたと、看守の一人が言っていた。
本当だろうか。
「どこで？」
「それは言えないわ」
しばらく、沈黙が続いた。スピードが落ち、車体の揺れが少なくなった。潮の香りはずっとしている。懐かしい匂いだ。水と、生き物の生と死を凝縮したような生臭い匂い。地球の匂いだ。
前方から、ユキの声が聞こえた。
「お葬式をしたわ」
お墓もあるわ。声は、上擦っていた。スレインは、界塚伊奈帆の葬式と墓を想像しようとしたが、上手くいかない。しかし、ユキの声が示す感情の一端は理解できた。
父親の葬式を思い出す。遠い記憶だ。ふと、界塚伊奈帆には両親がいなかったことを思い出した。母親というのは、スレインにも物心ついたときにはいなかったからよく分からないが、この人は優しいし強い。あと、とても大人だ。きっと、界塚伊奈帆にとっては姉が母のようなものだ

ったのかもしれない。時折見せる声の調子や呼吸に、家族の匂いを感じ取った。
車がまた、がたごと揺れる。車道から逸れたようだ。
「僕には、そんな気はしないんです」
「何よ」
言葉を選ぶなんて、そんなことはしない。優しさなんて感情は、月に置いてきた。後悔なんて感情は、あの地下へ置いてきた。心なんてものは、どこかにやってしまった。スレインは、界塚伊奈帆の姉を脱獄の共犯者にしたことについて、思考と感情を遮断した。意識して、表情を消し去る。
「勘です」
「か、勘？」
高い声で問い返すユキに、スレインは続ける。多分、冷静で腹の立つ声に聞こえているだろう。
それでいい。
「僕を殺せるのはあいつだけ。そして、あいつを殺せるのは僕だけです。僕に黙って、勝手に死んでいるわけがない。絶対にそうはならない」

スレインは、見えない運転席に顔を向けた。ユキが、ミラー越しに視線を送っているのが空気で分かる。口角を上げる。少し引き攣ったが、上手くいった方だ。
「よく当たる。貴方は真実を隠しているのかもしれませんが、分かる。あいつは生きている。なら、僕は会いに行く」
「死んだわ」
即座にそう言ったユキの声は、どこか切羽詰まった響きを持っていた。
「それでも、行く」
黙り込んだユキが、しばらくして大きく息を吐いた。
「…なんだか。貴方、想像と違ったわ」
スレインは座席に背を預けた。手を組んで、握る。
「人は、いろんな側面を持っています。僕は人よりそれが多い」
「そうね。目つきが悪くて不愛想。見るからに冷酷な戦犯に見せかけている。話すと礼儀正しく大人しそうに見えて、無茶で無鉄砲。びっくりするくらい大胆だわ。頑固で、我儘で、もしかしたら、…優しいのかもね。不思議な子」

貴方を慕う人を、何人か知っている。ずっと不思議だったけれど、今日、少し分かったわ。
ユキの言葉を、スレインは二度と想起することはないものとしてただ聞いた。
「でもね、本当になお君はいないの。もう、どこにもいないのよ」
車は悪路を進む。揺れる体の奥で、違う、という声が聞こえた気がした。

肌寒さを感じる。肉体がこのように生々しく環境の変化を訴えるのは久々で、スレインは確かめるように鳥肌を擦った。
ユキに頼んで着いたのは、あの日の海だ。見えないが、音に体を包まれる。風は弱い。波はそれほど大きくはないはずだ。しかし寄せて返す波が紡ぐ音は、耳の奥まで揺らした。
海はもっと、静かなものだと思っていたが。
「ねえ、これからどうするの」
車から降りて、海に向かって立ったままのスレインの数歩後ろ、ユキが聞いた。
「僕は一人で探してみようと思います」
「そんなの無理よ。追われてるのに。それに貴方。…目が、見えないのよ」

あの夜の海は、暗かった。今は明るいらしい。波の音は大きいが穏やかだ。潮の匂いが懐かしさを呼び起こす。

あの時、もっとよく見ておけば良かった。暗い海の色を。星の降る空の色を。向けられた銃口の奥を。自分を映す橙の瞳を。界塚伊奈帆の顔を。

スレインは振り向く。世話になった相手に、せめて普通に笑ってみせようとするが、どうも顔の筋肉が思うように動かない。この笑顔は、全く上手くいかなかった。

「なんとなく、大丈夫な気がするんです。ここでお別れです」

海とは反対方向に歩き出すスレインの手首を、ユキが掴んだ。温かくて、蛸ができた硬い掌だった。軍人の手だ。

手は、あまり似ていない。日本人らしく肌理が細かく滑らかなのも、蛸ができているのも、指先が固いのも一緒だが。

界塚伊奈帆の手は、冷たかった。

「…放っておけないわよ」

遮断したはずの感情が逆流し始めるが、スレインは振り返ることなく立ち止まった。

「放してください」
「捕まったら、死ぬかもしれないわ」
「その方がいい」
「どこへ行くのよ。行き場所なんて、どこにもないじゃない」
確かに。行く当てはない。というか、まずここに来てみたかった。
全てが終わったと思った場所。でもそこは、終わりではなかった。それを確認しに来た。
「行く所も、戻る所も、貴方にはないのよ」
そんな所、これまで一度だってあったことはない。だから、今までと何一つ変わらない。
お人好しに過ぎる界塚伊奈帆の姉に、姿勢を正して向き合う。弟を撃った人間の心配までするなんて、どこまでも姉弟だ。
ここで引き留めても、スレインには戻るところはない。それを知っていて、それでも引き留める。その不合理は、彼女だって理解している。
「界塚伊奈帆がいなくなって、…何も言わずにいなくなって、死んだと。そう考えた。でも、どうしてもそんな気がしない」

頭では理解している。それでも、どうしても違う気がした。信じるとか信じないとか、そんな感情論ではなく、あいつはまだこの世界のどこかにいる。確信があった。理由なんて何もない。あえて理由を探すなら、スレインが生きていること。それが理由だ。

「あいつ、どこかにいるんだ。なら、会いに行く」

『また会おう』

界塚伊奈帆はそう言った。

スレインの手首を握るユキの手は、力を失っていた。振り解こうとすれば簡単だったが、スレインは、その手をもう一方の手でそっと外した。

「僕には、この体も心も、失うものは何もない。でも、あいつに言ってやりたい文句の一つくらいはある」

もう、彼女に言うことはない。歩き出したスレインの後ろ、車のドアが開く音と閉じる音がした。そのまま走り去ると思ったが、界塚ユキはスレインをまたしても引き留めた。

「ねえ！」
今度は、正面から回り込み片手を突き出していた。掌がスレインの鼻先に当たる。スレインは言葉を待つ。ユキは息を吸って、吐いて、もう一度吸って、そして言った。
「貴方、なお君…伊奈帆を恨んでいるの？」
「ええ」
簡単なことだ。恨んでいる。
何も言わずにいなくなったこと。
何度も会いに来たこと。
撃たなかったこと。
生きていたこと。
出会ったこと。
全て、棘のように刺さり抜けてくれない。あの橙の瞳。冷静な声。ふとした瞬間の、年相応の仕草。そんなものが自分の命をここまで繋いだ。界塚伊奈帆を探すために、彼の姉まで利用して。
……変われば、変わるものだ。こんなに生き汚くなったのは、あいつのせいだ。

「もしも。もしも生きていたら、どうするの」
何度も閉じる蓋をこじ開けようとする罪悪感を押し込めて、スレインは微笑みを浮かべた。全然可笑しくない。ちっとも嬉しくない。何一つ幸せじゃない。きっと、この笑顔は醜い。
せめて憎んでくれればいい。殺してくれればいい。そんな気持ちでスレインは笑った。
「死んでいるんじゃ、なかったんですか」
「もしもの話よ」
低い声だ。本当に、界塚伊奈帆の身内なんだ。家族なんだ。この人は。
「そうですね」
もしも会えたら。それはあまり考えていなかった。とにかく会いに行かなくては。それだけだった。でも、そうか。もしあいつが生きていたら、会えるかもしれない。
「今度こそ、拳銃で額を打ち抜いてもいいけれど」
目の前の彼女が、息を詰める気配が伝わる。スレインは首を振った。
「それはやめておきます」
会ってから、考える。そう言うと、ユキはどうしていいか戸惑った様子で立ち尽くした。大き

な溜息が聞こえ、スレインは胸元に何かを押し付けられた。
「せめて、これくらいは持っていきなさい」
ナイロンのがさがさした手触りだ。探るとファスナーがついている。デイバッグのようだ。
開けると、中には細々したものが入っていた。中には紐のついた靴と、折りたたまれた布が幾つか。服だ。小さなノートのようなものと、クリップで留められた細長い紙の束。あとはごちゃごちゃしていて分からない。
「着替えとパスポート。お金。小切手。あとは携帯食料と日用品が入っているわ。持っていきなさい」
そういえば、今の自分は囚人服を身に着けているのだった。何も考えていなかったことを改めて思い、界塚ユキのこの用意の良さに驚く。
「どうしてですか」
彼女に会ったのは、今日が初めてだ。どうして、こんなものを用意してあるのだろう。
界塚ユキは、全くもう、と言った。呆れたような、しかし優しい声音だ。
「…なお君にね、頼まれたのよ。貴方がどこかへ行きたいと自分から望んだら、私ができる範囲

で助けてほしいって」
この荷物、随分前になお君が残していったの。だから、私は貴方を連れて出たのよ。彼女はそう言って、最後に呟いた。
「全く、手のかかる弟だわ」
スレインは、手の中の荷物を握りしめる。あいつは、どういうつもりでこんなことをしたのだろうか。それ以前に、自分の姉になんてことを頼むんだ、と思い、自分が言えた義理ではない、とスレインは自嘲した。
波の音がわんわんと頭蓋で響く。全く、海とはこんなに煩い場所だったろうか。ああ、岩に波がぶつかる。引く潮が砂を攫う。引く波と押す波が共鳴する。
ざあ、ざあ、ざあ、ざあ。
波の音の間に、ユキが「スレインくん」と呼ぶのが聞こえた。がん、と頭を殴られたような衝撃に、足元が少し竦む。そんな風に名前を呼ばれるとは、思ってもみなかった。
「ここから先に、私は行けないわ。仕事もあるしね…。だから、貴方は自分で行くしかない。目は見えない。味方はいない。行く場所も、帰る場所もない。捕まったら、きっと殺される。それ

でも行くの？」
　優しい言葉だった。温かい声だった。少しだけ、ほんの少しだけ、界塚伊奈帆がスレインと話す時の声に似ていたかもしれない。
「ええ。でも、あの施設の人たちは、できるだけ僕のことを隠そうとするでしょう。軍は、僕を捕まえることはできない」
「どうして？」
　確かに、すんなり逃がしてくれたし、追ってはこないけれど。ユキに、スレインは自嘲気味に口を歪めた。
「あの人たちは、優しいから」
　人間のように抱かれた。手を握られ、頬を包まれ、愛の言葉を告げられた。そっと流された涙に知らぬふりをした。
　彼らも、人間だ。その優しさにつけ込んで、心を盗んだ。同情としか理解できぬその情を利用した。そのうち殺されるだろうと、そう思っていた。しかしだれ一人、自分を殺すことなく、追うことすらなく。

そしてきっとこの先、もう会うこともないだろう。
「…そう」
何かを察して、ユキは頷いた。この人も、とても優しい。優しい人間ばかりだ。こんなに汚れきって、生きる価値を失ったがらくたにさえ、これほどまでに優しい。
酷い世界だ。
「ありがとう。界塚伊奈帆のお姉さん」
界塚ユキは、スレインの肩に軽く触れた。ぽんぽん、と軽く叩かれ、驚きで背中が引き攣る。
一度、界塚伊奈帆もこんな風に僕に触れた。
「貴方のことを許しはしないけれど、…行ってらっしゃい」
そんな言葉を言われたのは初めてだ。
スレインは奥歯を噛みしめて、目を固く閉じてそして開く。合っているだろうか。この言葉は。
「行ってきます」
バッグを肩に背負い、歩き出す。足で踏む度、砂が沈んだ。

着替えをして、電車に乗った。
とりあえず、新葦原に向かうことにする。そんな所にいないだろうが、界塚伊奈帆の生まれ育った場所だったはずだ。歩いてみたかった。

新葦原は、人がいた。沢山。若者も多い。楽しそうな話し声や、音楽が聞こえる。店も多く、宣伝が聞こえてきた。匂いがする。食べ物、香水、体臭、植物の匂い。久しぶりに嗅ぐ様々な匂いに、頭がくらくらした。
歩いていると、ラジオかテレビのニュースが聞こえてきた。立ち止まり耳を凝らす。緊急速報や、非常事態宣言や、そんな物騒なニュースは一つもなかった。
僕は死んだはずの人間だ。探すとしてももっと専門性の高い機関が、水面下で動くことになるのだろう。早く捕まえてくれたらいい。行動と矛盾しているが、スレインは人の波を歩き出した。
道中、何人も声を掛けてくれる。どこに行くのか、場所は分かるか、一緒に行こうか、助けがいるか。正体には気付いていないらしく、残念に思う。一人くらい、気付いて殺してくれても良さそうなものだが。

三日ほど、何事もなく過ぎた。次の目的地に向かう。海外にいる可能性もあるだろう。パスポートが入っているとユキに聞いた。見えないから中の写真や名前が分からないが、なんとかなるだろう。空港へ向かうことにする。

旅路に不便は多いが、慣れてきた。それに、道行く人がいろいろと世話を焼いてくれる。火星にいた頃は、こんなこと一度もなかったのに。今になって受ける第三者の善意に気が狂いそうだ。

叫びだしたくなる。

ここにいるぞ。貴方たちの敵は、ここにいるぞ。

スレインは何も言わず歩き続ける。時々、通行人に肩がぶつかり「大丈夫？」と体を支えられた。ありがとう、と言えたが、声が震えた。

全然ありがたくなんてない。

電車やバスを乗り継ぐ。一日で行けるかと思ったが、乗り換えを間違えたり、少しトラブルがあって時間が掛かってしまった。適当に夜を明かして、出発する。日の高い頃、何とか空港の近くのバス停に降りた。

歩いていると、肩を叩かれ、おい、と声を掛けられた。立ち止まると、勢いよく腕を引かれる。力強い、大きな手の平だ。

「本物だ」

若者の声。抵抗する理由もないので、そのまま身を任せる。腕と肩と頭を羽交い絞めにされ、されるがままに足を前に出す。次第、周囲に車の音が多くなる。排気ガスの臭いに鼻が痛む。

キイイィ――――。

タイヤのゴムが路面を削る音がした。おそらくドアの開く音。突き飛ばされ、少し硬い布地で強かに肩を打った。バタンという音。肩の下からエンジンの振動。狭い。車の中だ。ドアが一度開けられ、閉める音と同時に空間が地面と平行移動した。

揺れは少ない。

車に押し込められ、攫われたらしい。戦犯であることがばれたか、単純に、誘拐か。どちらにしても、仕方がない。界塚の顔がちらつくが、すぐ消えた。

「本物なの？」

運転席の方から女性の声がした。こちらもかなり若そうだ。スレインは、口も手も、どこも拘

束されていないことに気が付いた。
後部座席は自分一人だけだ。さっきいくら無抵抗だとしても、無警戒に過ぎる。しかし抵抗する気も理由もないので、そのまま横になっていた。突然、疲労感と倦怠感が体中に広がる。深く息を吐く。この後は監禁か拷問か、もしかしたら殺してくれるかもしれない。頭の中の界塚が小言を言ったが、仕方がないだろう、とスレインは見えてもいない目を閉じた。前方の二人は、小さな声で事務的な会話をしている。聞き取れないし、そんな気力もなかった。
死ぬのか。
やっと楽になれる、と思う反面、またしても界塚の顔が浮かぶ。怒った顔で（本人は表情に出ていないと思っているのかもしれないが、バレバレだ）、ぐちぐちと理屈を並べて、生きろ、という意味の小言を数種類のバリエーションで繰り出してくるのだ。
分かった。分かった。でも、ほら、仕方がないだろう。僕は体力もないし、武器もないし、目は見えない。恨みを持った人間に誘拐されて殺されたとしても、それは仕方がないだろう。そんなことを脳内の界塚に話し掛ける。
「伊奈帆の言う通りになった」

耳に飛び込んできた助手席の男の声に、スレインはかっと目を見開いた。血が逆流したかのように頭が熱い。

伊奈帆。界塚伊奈帆。

「界塚伊奈帆はどこに…？」

スレインが身を起こす。しゃべった、と驚いた声を出して助手席の男が動いた。

振り向いたらしいが、顔は見えない。微かな視界で目を凝らす。思ったよりずっと若そうだし、所作は一般人らしい感じがした。スレインはゆっくりとシートに座り直す。両手を膝の上で組んだ。敵意はないことを示したいが、大きな期待はしていない。助手席の男は、顔を逸らさなかった。

「…界塚伊奈帆は、どこにいる？」

抑制した声で、冷たく聞こえるようにそう聞く。男は顔を向けたままシートに肘をついて体を捻った。運転席の女性がちょっと、と制止するが男は構わず名乗った。

「俺は、カーム・クラフトマンっていう」

肌に射抜くような視線を感じる。ぎりぎりと込められた何らかの感情を掴もうとするが、その

前にふっと視線が緩んだ。カームと名乗った青年は言う。
「伊奈帆の友だちだよ」
友だち。スレインはよく見ようと目を凝らした。ひどい顰め面に見えているだろうが、関係ない。
カームという男は、なるほど言われれば界塚伊奈帆と同年代に思える。髪や肌の色は薄く、日本人ではなさそうな感じだ。声は溌溂として、若々しい。
そうか、あいつ、友だちがいたんだ。スレインは茫然とした気持ちで目を瞬かせた。
「カーム」
運転席から、咎めるような声が聞こえた。彼女も、そうか。界塚伊奈帆の友だちなのかもしれない。
そうか。
界塚伊奈帆には、日常も居場所もあったんだ。帰る場所も、そこで待っている人も。そういう当たり前のことにようやく思い至った。
「悪ぃ、ライエ。ちょっと話させてくれ」

カームと名乗った男はそのままの姿勢で話し出した。車は速度を変えず、静かに走行を続けている。

「戦争で、俺らは同じ船に乗っていた。俺は整備士で、伊奈帆の機体をメンテしてた」

だとしたら、いい腕をしている。確かあのオレンジ色のカタフラクトは、練習機だとエデルリッゾが言っていた。地球軍のエースパイロットの搭乗するカタフラクトだ。こんな若者が整備しているとは思ってもいなかった。

「スレイン・トロイヤードさんよ」

名を呼ばれ、スレインは首の後ろがぞわりとした。

界塚伊奈帆以外の人間に名前を呼ばれるのは、背中を氷が滑り落ちるような感覚がする。こめかみを、細い汗が伝った。

「お前、伊奈帆のことをどう思ってるわけ？」

静かだった車の走行音が、耳を手で塞ぎたく大きく感じる。体が小刻みに揺らされ、現実感が希薄になる。

空は高く、風が吹く。いろいろな匂い。いろいろな音。人と人とが交わす声。数日間歩いた世

界。これが現実のはずだ。数日前までいた、あの暗い場所。名も知らない軍人たちに監視され、監理され、ただ生を消費する日々。

死人同然の囚人にたった一人会いに来る年若い隻眼の将校。

彼には、家族があった。友だちがいた。帰る家があった。そんなことに今更思い至るなんて、と歯を食いしばった。もう、何がなんだかわからなかった。

「俺にとっては同級生で大切な友だちだった。左目の後遺症で、…死んだ」

「後遺症？」

後遺症。左目の。眼帯の下。触れた瞼を思い出す。

『…額を、撃ち抜いたつもりだった』

閉じられた瞼は、触れると一度だけ強張った。彼の顔に触れた記憶が、つい先ほどのことのように指に宿った。

吐き気がした。

「ああ。お前が撃った」

カームは左目を閉じて、人差し指を目の端に当てた。もっとも、スレインには認識できなかっ

たが。

アナリティカルエンジン。スレインの脳裏に、もっとずっと以前、初めて面会した時の伊奈帆の黒い眼帯が浮かんだ。

『もういらないから』

外したと聞いた。

「あれってさ。脳にすごい負荷がかかるらしい。月まで見えた、って話だ」

いつだったか、随分前にマリルシャン卿との決闘のことを聞いてきたのを思い出した。あれは実際に見ていたことだったのか。

肝心なことは、何も言わないやつだ。スレインの握りしめた拳が、みしりと音を立てた。

「脳が損傷して、なんか体がおかしくなっちまったんだと」

一年前。最後に会った日のことを思い出す。そんなこと、何も感じなかった。何も知らなかった。僕は死人のくせに、次が、当たり前のようにあると思っていた。

……いや、今思えば、おかしなことはあった。
あの日はどうしてだか、あいつが本当にそこにいるか不安でしょうがなかった。だから、柄にもなく口をついて出た言葉に、自分でも驚いた。触らせてほしい、だなんて。人間みたいなことを言って。
触れた先の冷たい手。丸みのある柔らかい頬。眼帯の下の閉じられた瞼。側頭部の銃創。
界塚伊奈帆は、そこにいた。生きている人間として。

『僕も、君に触れていいかな』

あいつも、この顔を触った。冷たい指先と、かさついた厚い掌。頬を撫でる感触。額を押す指先。後頭部を包むように掴んだ手。その感触を覚えている。界塚伊奈帆という男は、まるで割れ物を触るように慎重に、手を這わせた。時々、指先を強張らせながら。
自分も、どうかしていた。あいつも、どうかしていた。でも、生きていた。二人とも。
その夜はどういうわけか、眠ることができた。目が覚めると朝になっていたのは、実に数年ぶ

りのことだった。戦争の間も、戦争の前も、満足に眠りについた記憶はあまりない。

『また会おう』そう言った。その言葉は、声は、いつもと同じだった。

でもあいつは、来なくなった。

「死んだ？」

「ああ」

カームはあっけなく言った。スレインは、頭と心がどうも上手く働いてくれなくなったことに気が付いた。何も考えられないし、何も感じられない。焦点の合わないぼんやりした視界はどこともしれない前方に向いて、見える世界は真っ暗になったようだった。呼吸がしにくい。自分の呼吸音が聞こえた。僕は生きている。界塚伊奈帆は、死んだらしい。背中が熱いような冷たいような、ぞわぞわと気色の悪い感触がした。歯の根が合わず、奥歯が小さな音を立てた。

『でも、君は世界の中で生きている。現実は何も変わっていない』

煩い。煩い。煩い。

カームが大きなため息をついた。スレインははっとして、意識を向ける。視界が少し明るくなった。

「俺はさあ、わっかんないんだよ。どうして、伊奈帆は今でもお前を気に掛けるのか。撃たれて、姫さん連れてって、戦争の首謀者、大罪人だ」

全くだ。自分にだって分からない。スレインは頭の隅っこで考えた。頭の中心は、意識を失わないように呼吸をするよう命じていた。

「俺は整備士だから、現場の空気みたいのは知らない。どうして伊奈帆がお前に入れ込むのか」

カームは苛立ちをぶつけるような声音で捲し立てる。ああ、くそ、という舌打ちが聞こえ、沈黙が降りた。

スレインは口を開いた。

「僕を殺してくれるのか？」

カームが腕を伸ばした。首を掴むだろうと思われた手は胸倉を掴んだ。引き寄せられ、スレインの腰が浮く。

「どうしてそうなる」

至近距離で、朧げに顔立ちが視認できた。金髪で、色白の肌にはそばかすがあった。青みがかった灰色の瞳は、怒りと憤りでぎらついていた。

「それ以外に、何がある？　どうして僕は、ここにいる？」

カームはしばらく静止して睨んでいたが、舌打ちをして放り出すように手を放した。シートの背もたれに背がぶつかる。

「頼まれたからさ。伊奈帆に」

カームの呆れた声が頭上から聞こえた。

頼まれた。どういうことだろうか。意味が分からない。界塚伊奈帆は死んだと言っていた。

「遺言だからさ。俺がどう思おうが、関係ない」

カームは体を前に戻しシートに座った。

「あんたを送り届けるのが、目的だ」

それだけ言って、カームは口を閉ざす。

エンジンの音、空調の音、路面をタイヤが削る音が耳の奥で混ざり合う。時間の感覚がないが、長いこと走っているように思う。

どこに向かっているのだろう、とスレインはようやく考える。視覚から得られる情報は何もない。車がときどきカーブに差し掛かり、体が遠心力で傾く。停車することはなかった。信号はないのか、全部青なのか。周囲を他の車が走っているのか分からない。少なくとも、クラクションの音は一度もしなかった。

「目印だって、言ってたんだ」

カームが言う。落ち着いた声だった。スレインは、声に出さずその言葉を口の中で転がした。

目印。

「オレンジ色なんて目立つからさ、塗り直すって言ったんだけどな。あいつ断ったよ。目印みたいなものだから、って言って」

あのカタフラクトのことを言っているのだ。地球でも、宇宙でも、オレンジ色の機体には界塚伊奈帆が乗っていた。タルシスで戦闘した地球の機体では、同じ色の物は無かった。

「最終決戦では、伊奈帆がカスタマイズしてくれって言う通りに整備したよ。接近戦用の武器とシールドを限界まで積んでな」

余計なペイロードだ。機体のバランスを調整するのが大変だった。並みのパイロットなら、宇

宙に出た瞬間狙い撃ちだろうな。元は練習機だったんだ。そんなのに乗ってるやつは、伊奈帆以外に知らないし、いない。カームは誇らしげにそう語った。

その後、少し逡巡したような間があり、カームは声を落として言葉を紡いだ。

「今となっては、全部お前を助けるためだったんだな、って思うよ」

スレインは、巻き付いたワイヤーと掴まれた左手を想起した。その意味を、今更のように理解した。カームが、それとな、と世間話をするような声音で続ける。気安い声だった。

いつの間に、この男はこんなに会話の距離を縮めてしまったのだろうか。運転席から、呆れたように鼻を鳴らす音が聞こえた。

「伊奈帆があんたに会うために、俺は何回も運転して連れてってやったんだぜ」

あいつ、左目が見えないから。運転できねえんだ。

それきり、誰も何も言わなかった。

車のドアが開くと、花の香りがした。
「ここだ。降りろよ」
スレインはアイドリングを続ける車から頭を出して地面に足を下ろす。後部座席のドアを閉めると、カームともう一人は車を発進させ走り去った。スレインは深く息を吐き、空気を吸い込んだ。花の香りはこの数日で何回も鼻孔を通り抜けたが、この香りはどこか懐かしい感じがした。
しばらくそうしていると、誰かが傍に現れ肩を支えられた。触れ方が優しい。
「こちらへどうぞ」
知らない声だ。促され、スレインは足を進める。少し行くと、花の香りが溢れる、風が踊る場所に足を踏み入れる。日の光が頬に温かい。足元には草が生えているのか、柔らかい踏み心地だった。
花の香りが馨しい場所を通り過ぎ、少し暗い、涼しい空間に移る。
室内のようだ。ジェントルな仕草で椅子を進められ、クッションの膨らんだ、座り心地の良い椅子に座らされる。拘束もなく、一人そこへ据え置かれた。訳も分からずじっとしていると、すぐ近くに食器の音。

「紅茶です」
先ほどと同じ声だ。…自分には、似つかわしくない言葉だ。足音が遠ざかる。そのままじっとしていると、扉の開く音の後、軽い足音が近づいてきた。
「スレイン様」
驚いた。そちらへ顔を向けるが、よく見えない。分かるのは黒っぽい影。影は跳ねるように近づき足音が靴裏から伝わった。
「その声は。…エデルリッゾさん？」
目の前に、ふわりと風が起こった。手を取られ、握られる。記憶にあるより長い指。ほっそりとした手が震えている。掌は柔らかく、ほのかに温かい。
「ああ、スレイン様！　生きておられたのですね」
彼女は跪いているようで、スレインは声を頼りに見下ろした。大人びた声になったが、変わらない素直な響きでスレインは微笑む。結構ちゃんと、笑えた気がする。
「お久しぶりです」
「はい。スレイン様、また、お会いすることができるなんて」

ひっく、としゃくり上げる声が聞こえた。涙を拭ってあげたいが、そんな資格はない。スレインは握られた手を握り返した。

「…どうして、地球に？」

スレインが聞くと、はい、と鼻声が聞こえた。

「私は、戦争が終わってから地球にいます。姫様との約束で」

「アセイラム姫との…？ああ。もう、姫ではありませんね」

「ああ、つい。スレイン様とお会いしたら、昔に戻ってしまったようで」

最後に会ってから、もう三年だ。月にいた頃のことを、違う世界のように思い返す。

エデルリッゾと共に過ごした時間。いつ目覚めるとも知れないアセイラムの生命維持装置の前で、二人で祈りを捧げた終わりのないような日々。その思い出は四肢を、意識を、正気を引き裂かれるように痛みを伴うが、あの時エデルリッゾの存在は自身の孤独を慰め、希望を繋いでくれていた。

今となっては、彼女が健やかに成長していることに、喜びを感じる。こんな感情を抱く資格など、ないのは分かっているのだが。

「エデルリッゾさん。お元気でしたか」
スレインは、微笑みを浮かべる努力をした。口の端がぴくぴくと痙攣して、今度は上手くいかなかった。エデルリッゾが握る手に力がこもる。短い爪が手の甲に少し食い込んだ。
「はい！スレイン様。またこうして名前を呼んでいただける日が来るとは思いませんでした」
涙声は明るく朗らかだ。スレインは、彼女の名前をもう一度呼んだ。もう、呼ぶことなどないと思っていた。
「僕もです。お顔がよく見えないのが、残念です。美しくなられたでしょうね」
確か、十六歳になっているはずだ。ふと、アセイラムと二人で見た地球の姿が瞼の裏を通り過ぎた。
あの時は、そう。姫様はまだ十五歳だった。それほどの月日が流れたのだ。まだ何も知らない、幸せな幼い二人をそっと胸の奥に仕舞う。次に取り出す当てなど、ないのだけれど。
もう、戻らないのだ。
エデルリッゾは、恥ずかしいです、ともごもごと続けた。
「私は、地球のことを、姫様に…アセイラム様にお伝えしています。その、もう侍女ではありま

せん。アセイラム様の友人として」
　アセイラムが今どうしているのか。スレインはこの数日、街中のニュースや人々の雑談からしか知らない。お健やからしい、ということを知り、ほっとしていた。
「…そうですか」
　エデルリッゾは、アセイラムの傍を離れた。クルーテオの居城で、いつも一緒にいた二人を思い出す。本当の姉妹のようにも見えた。そこでスレインは、月で別れたもう一人の姫は、今頃どうしているだろうか、と考える。考えること自体、罪だとは分かっているが。
　できれば、自分の事など忘れ、幸せに暮らしていてほしい。叶うなら、地球にいてくれたらいい。海や鳥や、雲や花。美しいものをあの空色の瞳に映し、優しい風に包まれ、桃色の髪を揺らし、日の光を浴びてあどけなく微笑む。夢のような想像をした。
「地球での暮らしは大変なこともありましたが、今ではすっかり慣れました。スレイン様に教えていただいたことを…いえ、あの」
　息を詰まらせて黙り込んだエデルリッゾは、手をもじもじさせた。くすぐったい。
「どうしました？」

「すみません。私、もう一つの約束を果たすため、スレイン様をお待ちしていたのです」
「約束？」
「界塚伊奈帆さんとの」
その名に、スレインは見えない目を見開いた。
そういえば、おかしなことが多すぎた。界塚ユキ、友人と名乗る二人組、そしてエデルリッゾ。
用意が良すぎる。
そうか。界塚め。
収容所を出たら、僕が迷わずここへ来られるよう準備をしていたのか。
『その気になれば、こんなところ出て行けるんじゃないのか』
悔しいが、全部あいつの思い通りになった。スレインはエデルリッゾに聞いた。
「界塚伊奈帆は、死んだのですか？」
室内から音が消えた。エデルリッゾが、手を離し立ち上がった。ソファがぽす、と跳ね、スレ

インの隣に彼女は座った。
「お会いしたのは一年くらい前です。その後、人づてに、お亡くなりになったと聞きました」
スレインは膝の上の手を組んで考える。死んだ、死んだと、みんなが言う。
でも、違う。もはや確信だった。しかし、界塚伊奈帆が何のために、こんな回りくどいことをしたのか理解できない。
それも、会えば分かる。
「約束って？」
「私のお預かりした約束は、これです」
何かが掌に乗った。両手で形状を確認する。
「…鍵？」
金属でできた薄い、小さな鍵だ。
「どこの鍵で、何の鍵かは知りません。ただ、スレイン様に会ったらこれを渡してくれと。あと、伝言を」
「伝言？」

エデルリッゾは、こほんと咳払いをして息を吸った。はっきりとした声が鼓膜に響く。
「『オレンジ色からコウモリへ』」
「…ああ」
「それだけです」
「…分かりました。ありがとう」
エデルリッゾが、ほっと息をついた。彼女は元気よく、跳ねるように立ち上がる。年頃のレディなのだから、もう少しお淑やかに、といらぬ心配をしてしまう。
「空港まで、お送りします。運転は任せてください」
エデルリッゾの元気な声に自然な笑みが浮かんで、スレインは首を振った。
「せっかくですが、飛行機には乗りません。できれば、駅にお願いします」

――一年前。

「久しぶりです。エデルリッゾさん」

「界塚伊奈帆さん。お久しぶりです」

こうして直接会うのは一年半ぶりだ。彼女は背が伸びて、立ち居振る舞いが大人っぽくなった。時は確実に流れている。

伊奈帆が訪れたのは、地球火星間の友好を目的として建造された迎賓館だ。火星出身者なら、条件を満たせば一時的に滞在することができる。

その庭を、伊奈帆とエデルリッゾは連れ立って歩いていた。豊かな木々と花々が溢れ、水が湧き、風が通る。

地球らしさを象徴するような庭だった。

「地球には、慣れましたか」

エデルリッゾに歩調を合わせて、伊奈帆は尋ねた。二人の背丈はそれほど変わらないが、歩幅は違う。落ち着いた、優雅な身のこなしだ。

「おかげさまで。いろんな所を転々としましたから、大変なこともありましたけど」
鳥の羽ばたきが聞こえ、エデルリッゾがそちらを見上げた。飛び去った後だが、彼女は足を止め、空の先をしばらく見つめていた。
彼女も、あいつから鳥の話を聞いたことがあるのかもしれない。
「地球に住むんですか」
「はい。もしかしたら、いつかは火星へ帰るかもしれませんが。地球は、もう一度来てみたかった。まだまだ、知りたいことが沢山あります」
エデルリッゾは伊奈帆の横に早足で並び、微笑んだ。道なりに庭園を進む。
「でも、そろそろ定住しようかと思っています。所在がはっきりしている方が、何かと便利なので。住むなら、新葦原がいいと、ずっと思っていました」
最初の場所ですから。
その言葉に、セラムに背負い投げをされたことを思い出す。今思えば、あの頃は誰もが子どもだった。
「そうですか」

「はい」
アセイラムの侍女だったエデルリッゾは、今でも深い親交があるのだろう。女王の口添えがあれば、この建物の職員として、ここに住むことはできるだろうな、と伊奈帆は判断した。
薔薇園に足を踏み入れた。
赤い薔薇が咲いていた。とても良い香りがする。赤と、黄色。そして白。
綺麗ですね、とエデルリッゾが言った。伊奈帆は綺麗だとは思ったが、返事をせずに立ち止まる。先を行ったエデルリッゾが振り向いた。
「スレイン・トロイヤードは生きている」
「…え?」
向かい合う二人の間を、そよ風が通り抜けた。薔薇の葉が、さわさわ揺れる。遠くで、呼び鈴の音。近くに噴水があるのか、風に乗って水音が流れてきた。鳥の羽ばたきが、また聞こえた気がした。この庭には、鳥が住んでいるのかもしれない。
優しい音に彩られた沈黙の中で、エデルリッゾは、菫色の瞳を丸く見開き伊奈帆の顔を凝視している。彼女の後ろ、揺れる若葉の合間から見える空がとても青い。ここはやはり、地球の庭だ。

「そんな」
エデルリッゾは、口元を両手で覆った。目はこれ以上ないほど見開かれたままだが、徐々に潤んで瞬きの合間に睫毛が濡れた。雫が頬を伝った。幾筋もの水滴が伝い落ち、薄く赤らんだ頬が濡れそぼっていく様子を、伊奈帆は何も言わずに見ていた。
「本当なのですか？」
ひっくり返った声で、エデルリッゾはようやくそう言った。伊奈帆の隻眼は、涙に濡れた菫色の瞳をじっと見据える。
「貴方が信じれば」
エデルリッゾは固く目を閉じ、両手を組んで神様、と小さく呟いた。伊奈帆は、神様なんていない、と思った。しかし彼女がそう言いたい気持ちは、よく分かる。
「びっくりしました。こんなことって…。ええ、でも、信じます」
エデルリッゾは頬を濡らす涙を両手で拭って、微笑んだ。伊奈帆は微笑み返す。
「あの方が、生きておられたなんて…」
涙を流して、彼の生存を喜ぶ人間がいる。それがこんなにも心を慰めるなんて、と自身の心の

動きに伊奈帆は驚いた。
いつの間に、こんなにあの男に入れ込んでいたのだろう。
「伊奈帆さん。ありがとうございます」
ぴょこん、と跳ねるようにお辞儀をして、エデルリッゾは言った。大人びた彼女の、久しぶりに見る幼い仕草に伊奈帆の口元は綻ぶ。彼女は両手を胸の前で組み、伊奈帆を正面からてらいなく見つめた。真っ直ぐな眼差しだった。それを逸らさず見ることができる自分を、伊奈帆は喜ばしく思った。
「スレイン様を救ってくださったのですね。あの時の姫様との約束を、果たしてくださったのですね」
エデルリッゾは、アセイラムと一緒にいた。そこで約束をしたのは、もう一人の伊奈帆だ。伊奈帆の自我はそれを後から知った。だから正確には、約束を交わしたわけではないのかもしれない。その記憶は、もう取り出した。形も何もない。記憶にもない。それでも、その願いを今の自分は知っている。
あの時、アセイラムの願いを受け取った。スレインにその願いを伝えた。いつしかその願いは、

自分の願いになった。今、自分の一部となった。
彼の未来を願うようになった。
「救った、ということについてはどうでしょうか」
伊奈帆の独白のような呟きに、エデルリッゾは不安げな顔で口を噤んだ。
エデルリッゾは、温かい人だ。そして、スレインのことを大切に思ってくれている。伊奈帆は、スレインの理解者に、ようやく自身の思いを語ることができる。
気が晴れる思いだった。
「スレインは、死ぬことを望んでいた。…いや、今でも。一発の銃弾で彼の願いは叶ったかもしれない」
エデルリッゾが両手で口元を覆い、痛ましい顔をした。彼女は、自分の知らない月での彼を知っている。彼の願いも、苦悩も、喜びも、アセイラムへの思いも、ずっと見ていた。もしかしたら、最もスレインに近しい人間かもしれない。彼が死にたがっていたのを、彼女は理解できる。
「でも、僕は死ぬことが救いと考えるほど、ロマンティストではありません。戦後彼は地下でずっと、強制された生を味わっている。死ぬことを選ばないが、生きることを放棄して。僕にでき

ることなんて、何もない。時々会いに行くことだけ。歯痒くて、悔しくて、イライラする。スレインは、その気になればどこへだって行けるはずだ。それをしないのは、セラムさんと、顔も知らない、死なせた、傷つけたと思い込んでいる沢山の人々と、多分、僕の為だ」

鳥の影が頭上を横切った。伊奈帆は言葉を失い立ちすくむエデルリッゾに一歩、二歩と近づく。

「いつか、未来を生きてほしいと思っている」

笑顔は昔から苦手だ。あいつと出会ってから、また下手になった。でも、昔よりずっと素直に笑えるようになったと思う。

「貴方に、お願いがあります」

「お願い？」

伊奈帆は右手を差し出した。エデルリッゾが、掬いあげるように両手を合わせ近づける。その両手に、ころんと伊奈帆は触れずに渡した。

「もしもスレインと会うことがあれば、これを渡してほしいんです。それと、伝言を」

それは鍵だ。味も素っ気もない、ありふれた真鍮のシリンダーキー。古びて、光沢を失っている。

「どうして…ご自分でお渡しにならないのですか？」
界塚伊奈帆は笑った。少年のような、老人のような。悔しそうな、諦めと希望を浮かべた顔だった。エデルリッゾは、こんな風に笑う人をもう一人知っている。
「僕が死ぬから」
ちょっと早すぎた。だから、力を貸してほしい。界塚伊奈帆は言った。

風が通る。

朝のひやりと清涼な空気を吸い込むと、胸の辺りがさわさわする。静かな、深海のような空気だ。閉じた瞼の中、細い糸のような血管の流れる色が見える。日の出だ。こうして世界は地上に浮かび上がる。

伊奈帆は、朝が好きだ。世界が起き出す瞬間を、独り占めしたような気分になる。

開け放たれた窓から入り込む空気が、薄汚れた黄色いカーテンを揺らした。海風が、ベッドの掛け布に影で遊ぶ。

あと何度、このように朝を迎えることができるだろうか。

何度も転んで、その度に方向を見失いそうになる。泥だらけの膝や尻をはたいて、スレインは歩みを進めた。顔や首に木の枝が擦れひりひりする。血が出たようだ。手の甲で拭い、歩き続ける。

空気が冷たくなってきた。暗いし、夜が近いのかもしれない。今日中に着くことは無理か、とスレインは野宿について頭を巡らした。

目的地は、一つしかない。スレインは、フェリーを降りて日が昇る前からその場所への道のりを歩き続けていた。大きな国号に沿って歩くが、所々崩れて戦争の爪痕を残している。山に飲み込まれたひび割れた道を、必死に進んでいた。

まだ目がよく見えた頃、空から見た地形を思い出す。小さな島に見えたが、それは高い場所にいたからだったな、と当たり前のことを実感していた。あの時の戦闘で、この島の地形も変わった。そしてもうずっと前、ヘヴンズフォールの時、この島の地形は大きく変わっていたのだ。空から、それも見えた。

こんな所で待っているなんて、悪趣味なやつだ。

もういない火星の父の顔が浮かぶが、すぐに消した。

生きるほど、心を殺すのが上手くなった。地球の父のことも、母のことも、その思い出も、機械的に閉じることができる。今では、アセイラムのことさえも。

しかしあいつだけは、どうもいけない。どんなに掻き消そうとしても、追いやることができない。図々しく脳裏に居座り、あれこれと指図する。食事はしたか、眠れたか。傷の具合はどうだ。今日は晴れた。全く、煩くて仕方がない。

オレンジ色め。この呼び方を思い出してから、早く来いと喧しい。

完全に光源がなくなり、夜の冷気が汗ばんだ肌を冷やしていく。すっかり日が落ちたことを体感し、それでもスレインは歩き続けた。どうせ見えないのだ。暗くても関係ない。今は時間が惜しい。味のしない携帯食を齧り、どこかの水道で汲んだ錆びた味のする水を口にしつつ、血豆だらけの足を踏み出す。

界塚伊奈帆のいる場所へ。

種子島の、地球連合軍基地の隠しドッグへ。

それからまた、随分歩いた。
足の裏が気持ち悪いが、どうでもいい。夜通し歩き、日が昇るころ、朽ち果てたドッグに辿り着いた。
人気のない施設の中を歩く。土の匂いと、オイルの匂い。鉄の臭いが埃が混ざり合っていて、少し噎せる。奥に進むため錆びた手すりを辿る。掌を擦り剥いて血が出た。
何度か階段を登っていくと、空気の不純物が少なくなってきた。床や壁が平らになり、スニーカーが硬質な足音を叩き出す。探りながら歩くと、等間隔でドアが並んでいるのが分かった。宿舎だろうか。端から虱潰しに、ドアを開いて呼び掛ける。中は埃っぽく、咳き込み止まらなくなった。鍵は掛かっておらず、簡単に開いた。
エデルリッゾから渡された鍵を使うことになるのだろうか。次々扉を開けるが、鍵の掛かった部屋は、まだない。
何度か通路を曲がり、階段を上り下りして、声を限りに名前を呼ぶ。区画が変わる。機械的にドアを開けていく。部屋の中の強い臭いに、鼻が痛む。消毒液の臭いがするようになった。

こんなところに、本当にいるのか。不安が胸を掠めるが、どうせ他にすることもない。徹底的に探してやろう、と次の扉に手を伸ばす。

ドアノブを回して押す。

開かない。

「…ここに、いるのか」

触った感じは、他の扉と変わらない。ドアノブの真ん中に、丸い出っ張りがあった。指で触ると、その中心に鍵穴がある。握りしめていた鍵を差し込む。予感がした。

『また会おう』

鍵と鍵穴がぴたりと合い、回すとカチャリと音がした。

開く。

風が通る。

薬品の臭いと人の匂いが、微かにした。

「…界塚、伊奈帆？」
「…やあ」
名前を呼ぶと、数メートル先から呑気な声が聞こえてきた。スレインは、声の在り処へ近づく。途中、何かにぶつかってガタガタと音がした。手で確かめると簡素な椅子のようだ。脇にどけて、ベッドらしい白い塊の傍へ寄る。
呼吸の音が聞こえる。見下ろす白の中にぽっかり黒いのは髪の色だろう。呼吸の合間に、そいつは嬉しそうに小さく息を漏らした。
界塚伊奈帆の声だ。
「ぼろぼろだね」
言われて、何度も転んだことを思い出した。服が、泥か血で湿っている。急にずきずきと、体中が痛み出した。
「ここに来たっていうことは、君にはもう全部分かっているんだろうな」
落ち着いた理性的な声だ。かつて聞いた声と変わらなく思う。スレインは、足を棒のように真っ直ぐ立って界塚の声の方に顔を向け頷いた。

「ああ」
空気が丸くなった。界塚が笑ったのかもしれない。
「全部、芝居だったんだろう」
「…ばれたか」
その声は、いたずらを見つかった小さい子どものように無邪気だった。
死んだふり。死んだふり。死んだふり。そう、死んだふり。誰のための？　何のための？
「自分の葬式までして、色んな人を巻き込んで。やることが派手だな」
変則的な生前葬をしたのだ。軍関係者に対しては死んだと周知し、親しい人たちには別れの挨拶をする。界塚ユキに会った時から、スレインはずっとその可能性を考えていた。
『でもね、本当になお君はいないの。もう、どこにもいないのよ』
『全く、手のかかる弟だわ』
「いいじゃないか。そのおかげで、君はこうして来てくれた。十分だ」

くすぐったそうに笑う界塚は楽しげだ。しかし呼吸の合間にヒュ、と苦しそうな響きが混ざっていることに、スレインは苦々しい表情を隠せなかった。
「カームという人に会った。もう一人いたが、名前は分からなかった」
「親友と戦友だ。元気そうだった？」
「ああ」
スレインは、界塚は喋るのも辛そうだとは思ったが、話を途切れさせるつもりはなかった。この男が存外話好きで、寂しがりだと知っている。
「エデルリッゾさんとは、どうして？」
「君と初めて面会してからすぐ、彼女に連絡を取って会った。それからも定期的にメールでやり取りを。その縁で親しい」
界塚が咳き込んだ。ふう、と大きな息を吐いた。
「当時は、君のことを知りたくて。色々聞いて回っていたんだ。月でのことを聞いた。彼女の主観だけれど。それを聞いていたから、僕は君を優しい人間だと思ったんだ」
初めて界塚が面会に訪れた日のことを思い出す。チェス盤を広げて、感情の読み取れない顔で

そこに座り、言葉を交わした。アセイラムをセラムと呼び、彼女の願いを語った。気が付くといなくなっていて、それから数か月後、雨の日に現れた界塚はやけに挑発的に絡んできたことを思い返す。

それから数え切れないほど繰り返された面会で、無表情で軍神の二つ名を持つこの男が、それだけの男ではないと知った。

チェスが強くて。

料理が好きで。

話が長くて。

お節介。

意地っ張りだが存外素直で。

いつだって、僕に伝えようと。一つの目でじっと見て。手を机の上で握り締めて。口を開き。

何度だって言うんだ。彼の思いを。彼の願いを。

未来への。

「このかくれんぼの目的は、僕を生かすためか？」

「それもある」
「お姉さんのため？」
「それもある」
窓がある。風が踊り、土や血で汚れた僕の髪がばさばさ揺れた。ガア、ガア、と鳥の声が聞こえ、遠ざかった。波の音がずっと聞こえている。潮の香り。光は柔らかい。スレインは、横たわる界塚の体を背にして、ベッドに腰かけた。
「分からないな」
「そうかな」
一番の理由はね、とほくそ笑み、界塚伊奈帆は深くベッドに沈み込んだ。スプリングが軋んで音を立てる。首を回し、界塚へ顔を向けた。少し顎を引く。よく見えないが、笑ったような気がした。
「君に、僕を探して欲しかった」
スレインは、施設を飛び出してここに至るまでの道程を辿る。界塚のことを探していたが、本当に見つかるかは分からなかった。誰もが言うように、もう死んでいるのかもしれないとも思っ

た。それでも、界塚を探した。彼の一片のようなもの。住んでいた町。そこでの日常。歩いたかもしれない道。行くかもしれない場所。そんなものを探した。

「僕は以前、ずっと君を探していたんだから」

そうか、とスレインは思った。

探していたのか。

僕のことを。

界塚伊奈帆は、本当に馬鹿だ。

「お姉さんが、泣いていた」

界塚ユキの声。綺麗な声だった。優しくて、温かい。怒っていたし、戸惑っていた。僕を憎んでいたはずだった。それなのに、行ってらっしゃい、と送り出してくれた。声は震えていて、その後嗚咽が続いたのを耳が拾った。

「…しょうがない」

寂しそうに界塚は呟く。きっとこの男は、姉に自分の死を見せたくなかったのだろう。また、それ以上に自分がやりきれなかったのだろうと考えた。

「お前、病気か」
「うん」
この部屋の扉を開けてから、病気の臭いがずっとしている。もう長くないことは直感的に分かった。
「死ぬのか」
「まあね」
いつも通りの声で界塚は答えた。スレインは自分の両手を組んで握る。呼吸が苦しい。腹がぞっと冷えて裏返る感覚があった。言葉が出てこない。
お前が生きろと言ったのに。
「…スレイン」
その声に顔を上げ体を向けると、手を握られた。界塚の手は、汗で濡れて冷えていた。冷たい。ああそうだ。これが界塚の手だ。手を上向きに開かれ、何か硬い物が置かれた。界塚は両手でスレインの掌ごとそれを握り込む。
「それ、あげるよ」

界塚の手が離れ、スレインは手をゆっくり開いた。両手で手の中の物を転がす。丸くて、つるりとしている。一か所、細いコードのようなものが密集していた。指で、形を慎重に何度もなぞる。

「これは？」

「形見かな」

界塚が言って、スレインはそれが何か理解した。

「趣味が悪い」

「ははは。君のせいで、それをつける羽目になった」

苦虫を百回噛み潰したより最低の気持ちになったスレインを見て、界塚は明るく笑った。笑顔があるだろう場所を睨みつけると、界塚はくくく、と更に笑いを漏らした。

「…病気は、僕が撃ったせいか」

「まあね」

その声に、何の憎しみも恨みも悲しみも含まれていないことを、全てを受け入れて正しく自我を認識していることを、スレインは恨みがましく思った。できることなら、詰って恨んで、百万

回だって殺してくれたなら。
言いたいことは、あったはずだ。恨み言はこっちだって山ほどあるはずだった。でも、こうして実際に界塚に会ったら、それらは霧のように消えてしまった。
忍び笑いが聞こえる。今日の界塚は、よく笑う。
「しかし、君がここまで来るとはなあ」
「馬鹿にするな」
「その目、どれくらい見えるの」
スレインは、界塚に顔を近づける。呼吸が触れ合うくらい近づきようやく、彼の橙の瞳を認識できた。
ああ、この目だ。遠い日、あのチャンパーで見た色。月で見た色。海で見た色。薄暗い地下で見た色。ぼやけているが、何とか見える。
この目を追いかけて、ここまできたのだ。
なぜだか、右目が熱くなって開けていられなくなる。界塚の指が頬に触れた。拭うような動きに、スレインは自分が泣いていると気が付いた。冷たい両手で顔を包み込まれ、額が触れた。

「もう最後だ。僕を撃ってみる？」
冗談めかして言うが、本気だ。そのためだ。界塚伊奈帆がスレインを呼んだことは。
「それとも、僕が君を撃とうか」
今なら、撃ってあげてもいい。優しく、穏やかな声だった。愛の秘密を交わすような。
触れ合った額が熱い。界塚の額から、汗が伝った。呼吸が浅く速い。スレインは頬を包んだ手を外し、顔を遠ざける。見下ろすように体を起こして、界塚の手を握った。がさがさして、弾力がなくて、汗で濡れていて。これがあの界塚の手かと思うと、見えない瞳から次々涙が溢れてくる。
「……それもいいと、思ったんだが」
自分の声はみっともなく裏返ったが、うん、と界塚は次の言葉を待っていた。スレインは、首を振る。
「随分前に、それはやめた」
「じゃあ、何しに来たの。こんな廃墟に、たった一人で」
それはもう。言いたいことが、あったはずだった。でも今では言葉にならなくて。自分の鼓動

に耳を澄ます。緩やかで大きな鼓動だ。深く息を吸う。どういうわけか、指が震え出した。界塚の手を手で確かめる。彼はくすぐったそうに身じろぐ。別れたあの日に触れたように、手から腕を辿る。薄い布越しの腕を、掴む。

これがお前か。お前の腕か。どういうわけだ。軍人が、こんなに痩せてしまって。

筋肉が落ちて骨と皮だけになった腕を辿り、骨の出っ張った肩から鎖骨を触る。汗で濡れていて、汗疹があった。首も筋張って、大きな血管がぷくりと浮かんでいる。そこを押すと、どっ、どっ、と速い血流が伝わった。

尖った顎に触れ、丸みを失った頬を包む。頬骨のあたりに、湿疹。顔は熱い。瞼に触れ、額に触れ、髪に触れる。ごわごわした髪を、何度か梳いた。そして側頭部に残る古い銃創を人差し指で撫でる。

僕の手を、界塚の手が覆った。

このままでいてほしい、そういう意思表示に思えた。

窓から差し込む光がカーテンで揺れる。

風が温められ、優しく通り過ぎて行った。海の音は小さく穏やかだ。

ずっと、そうしていた。海が凪ぎ、視界が狭まり、空気が少しずつ夕焼けの香りを運びはじめるまで。

もう、そこまできていた。

「…お前、死ぬのか」

「…そろそろ」

左手の指で界塚の唇に触ると、ひび割れて薄皮が剥けていた。少し濡れている。屈んで舐めると、血の味がした。触れ合った唇が、微笑みを形作るのが分かった。息を交換するように近い場所。スレインは途方に暮れて聞いた。

「僕は、これからどうしたらいい？」

界塚は鼻を鳴らした。もう一度、唇をくっつけてくる。微かに触れ合わせながら、界塚が言葉を紡いだ。

「知らないよ。好きにしたら。そのつもりで、いなくなったんだから」

彼を探すために、スレインはあの場所から出た。

いつ捕まってもいいと思っていた。いつ死んでもいいと思っていた。でも、そのいつかは来な

かった。泥だらけ、土だらけ、傷だらけになってやっと着いたこの場所は、目指していた場所だけれど最果てではないことを知った。
「…界塚」
「スレイン」
よく来たね。そう言って、界塚はスレインの両耳を引っ張った。合わさった唇の間で、窒息しそうになるくらい深く舌が交わされる。
まだ生きている。まだ生きている。まだ。もう少し。もう少しだけ、一緒にいてくれ。
そんな声が聞こえてくるようだった。橙の瞳が、その光が、命の灯が、はっきり見えた気がした。
「僕は、もう君を生かすことも殺すことも強要しない。自分のことは自分で決めてくれ」
「僕は…」
界塚はどさりとベッドに沈んだ。ぜえぜえと呼吸が乱れ、何度か咳き込んだ。背をさすることができず、胸をさすった。肋が浮いていて、汗で服が張り付いていた。呼吸が整い、ありがとう、と小さく礼が聞こえた。

「…最後に、一つだけお願いがあるんだけど」
「何だ」
「名前を、呼んでほしい」
「名前…？」
「伊奈帆って。聞こえなくなっても、ずっと呼んでほしい」
吹きこむ風が冷たくなってきた。布団を肩まで掛け直してやる。スレインは腰の位置をずらして、胸の近くへ屈み、彼の顔を覗き込んだ。髪を撫でる。目を閉じたようで、橙色が見えなくなった。
「…伊奈帆」
「うん」
吐息のような返答。途端、喉が痞える。ごくりと唾を飲みこんで、もう一度名前を呼ぶ。
「伊奈帆」
「うん」
「伊奈帆」

「…スレイン」
聞こえないほど微かな声だが、名前を呼ばれた。スレインは、伊奈帆の口元に耳を近づける。
「…何？」
「元気でね」
堪え切れなくて、背を丸め蹲る。いけない。名前を呼ばなくては。痙攣する喉をこじ開け発声する。変な声が出た。
「……伊奈帆」
「…」
伊奈帆は何も言わない。スレインは、もう一度髪を撫でた。耳に触れた。頬に触れた。温かい。
「伊奈帆」
聞こえているだろうか。口を大きく開けるが、なかなか上手く声を乗せられない。大きく息を吸った。
「伊奈帆」
肌寒い。風が強くなってきた。夜の匂いがする。波が何度も岩肌にぶつかるのが、遠く聞こえ

る。
「伊奈帆」
手が震える。喉も。寒気でぶるり、と背が震えた。
触れているところは、もう冷たい。
「伊奈帆」
冷たい頬に頬を寄せた。耳に口を近づける。
聞こえるか。聞こえるか。聞こえているか。
「…伊奈帆」
動かない頭を抱え込む。鉛のように重く感じる。腕に強く力を入れると、首が変に撓った。がくり、と落ちそうになる頭を胸に抱く。
「……伊奈帆」
ああ、最初から、こうしていれば良かった。今頃気付くなんて間抜けすぎて、どうしようもない。スレインは固く目を閉じた。
「……伊奈帆」

生きているうちに、抱きしめてやれれば良かった。体だけでもぴったりとくっついて、寂しくないようにしてあげれば良かった。
「……伊奈帆」
真っ暗だ。何も見えない。風の音がする。海の音がする。星の落ちる音がするようだ。
「……い、なほ」
界塚伊奈帆はいなくなってしまった。もう、ここにはいない。どこにもいない。
「……馬鹿な、やつ」
元気でね、なんて。どうしろっていうんだ。
お前はもういないのに。
夜の闇が圧し掛かり、風が突き抜け海がぶつかり星が飛ぶ。
遠い夜明けが訪れるまで、スレインはずっと名前を呼んだ。

スレインは、伊奈帆の亡骸を海で燃やした。煙に目や鼻が沁みて、涙や鼻水が止まらなくなった。眩暈がして、砂浜に尻もちを着く。ごほごほ噎せた。何度も煙を吸い込み、噎せた。時々吐いた。胃液以外は何も出なくて、その臭いにまた目が沁みた。

ずっと、そうしていた。

「…口煩いやつ」

煙が消え、匂いが変わるころ、スレインはぽつりと言った。

食事をしろ、寝ろ、本を読め。……元気でいろ。

「お前は、遺言ばかり残したな」

伊奈帆に手渡された形見を取り出す。丸くて、つるつるして、硬い。一か所から、糸のようなものが数本飛び出す彼のかつての左目。

これを着けたら、もう一度世界を見ることができるだろうか。当てもない想像をして、スレインは膝を支え立ち上がる。全身で風を受けた。潮風が、頬に痛い。きっと目前には、オレンジ色の空が広がっている。

『来るぞ、コウモリ』

あの日と同じ海。同じ空。
あの時は、こんな未来は想像できなかったな。
お前が先に死ぬなんて。それでも僕が、生きているなんて。
瞼の裏の夕焼け色に、もう少し生きてみようか、とスレインは答えた。

Heavenly Blue

～空の色～

【Newly written】

目が見えなくても、どこへなりとも行けるものだ。

それは、彼の用意周到さのおかげだけれど。パスポートまで入っていたのは自分が死んだ後のか。全く、お節介というか何というか。

結局、何から何まであいつの思い通りになったな。

スレインは見えない空を見上げる。ここの空気は、少し酸っぱい。

五年ぶりの日本。

伊奈帆と最期に会ってから、色々な場所に行った。まず、自分の生まれた場所。見えないし、匂いにも感触にも懐かしさは感じられなかった。その後は、行き先のない旅を続けた。

地球には、色んな場所があって、色んな匂いがして、色んな人がいた。そうして日々を過ごすうち、伊奈帆は旅したことは無かったのかもしれない、と考えるようになった。彼に訪れた死はあまりに早い。戦いと傷と病ばかりの生き様ではないか、と彼の生涯を想うようになり、やるせなさが募った。

だから、スレインは日本に戻ることにした。戻るという表現が正しいかは分からないが、やり

残したことがずっと心にこびり付いていたのだ。

界塚ユキ。

彼女に見送られたままだ。

新葦原に向かうことにする。空港からバスと電車を乗り継ぐが、彼女がどこにいるのか知らない。軍人だが、そうかといって、自分が軍に出向くわけにもいかないだろう。こんな厄介者、今更軍も持て余す。

まあいいか。巡り合わせがあれば、きっと会えるだろう。

適当に新葦原を歩き三日が経った。

この国は本当に不思議だ。見ず知らずの男に、悪意なく手を差し伸べる人間の多いこと。女性や子どもも無警戒に世話を焼いてくれる。界塚伊奈帆のことをお節介だと思っていたが、彼だけではないようだ。

混雑した道で、人にぶつかった。

若い女性だ。親切なその人は、謝罪の後に何かできることはないか、と心配そうに聞いてくれた。立ち去ろうとしたが、腕を掴まれ強引だ。友だちなのか、もう一人の女性がどこまで行くん

ですか、と質問を重ねる。
…逃げられそうもない。人を探している、でもどこにいるのかわからない。名前しか知らない、と答えた。
「その人の名前は？」
「界塚ユキ」
「ユキさん⁉」
驚くべきことに知り合いだったらしい。彼女らは伊奈帆の幼馴染と友人だそうだ。
彼女は、界塚ユキの連絡先と、伊奈帆の墓の所在地を教えてくれた。界塚ユキに引き合わせてくれるという申し出を断る。伊奈帆の姉には、僕が墓へ行くことを伝えて欲しいと頼む。
界塚ユキは、僕に会いたくないかもしれない。会う、会わないの選択肢は、彼女にあった方がいい。
親切な二人組は案内すると言って聞かなかったが、個人的なことだし、墓前には一人で参りたいと断った。

界塚伊奈帆の墓は、石でできていた。

ここに亡骸がないことは、僕が誰より知っている。空虚な墓の前で突っ立っていると、雨が降ってきた。挨拶代わりか、と笑みが浮かぶ。どうも界塚伊奈帆という男には、雨のイメージが強い。よくずぶ濡れで面会室に現れていた。あの濡れた頭を、よく拭いたものだ。

わざとか。と聞いたことがある。

やっと気づいた、と彼は言った。笑っていた。

雨は止まない。しとしとと降りしきる雨に、髪が水を吸って、体の上から順に雨の中へ沈んでいく。

こんなことを何度も。馬鹿なやつ。

あいつ、死んだんだ。

雨の中、どれくらい経っただろうか。人の気配がした。

スレインはそちらを向いた。足元の砂利が鳴る。

この気配は知っている。
「ただいま」
雨の音が変わった。ポツ、ポツ、ポツ、と弾く音。傘を差し掛けられたようだ。ふわりと柔らかい匂いがした。日の匂い。
「おかえりなさい」
界塚ユキの声が、傘の中で優しく響いた。
「なお君に、会えた？」
「はい」
「よかった」
雨粒が傘を叩く音がこだまする。彼女は、濡れていないだろうか。半歩だけ身を寄せる。髪の匂いがした。
会いに来てくれた。
「ここに来るのが、遅くなってしまいました」
優しい空気が傘の下に満ちた。今、笑ったみたいだ。

「そうね。でも、行ってきますって、貴方言ったじゃない。きっと帰ってくると思っていたわ」
行きましょう。ユキはスレインの手を握った。一つの傘の中、彼女の斜め後ろを歩く。
前もこうやって、手を引いてもらった。無茶をして、きっと沢山迷惑を掛けたろう。
合わせた掌の温度。
界塚伊奈帆も、小さい頃はこうやって手を引かれたのかもしれない。幼い界塚の手を、この優しい手が包んだ。きっと家に帰る所。界塚は、この人の背中や横顔を見上げる。
大切な姉。大切な家族。大切な人。
守りたかったはずだ。
「貴方に、会ってほしい人がいるのよ」
ユキの手は雨で濡れているが、温かい。少し、涙が出た。

「スレイン」
軽い衝撃が、胸に飛び込んだ。ずぶ濡れで、きっと汚れている胸元を握る手を知っている。小さくて、とても白くて、たおやかに柔いはずだ。大きく上下し震える肩に手を降ろした。小さく薄い肩。その人の髪が手の甲を滑る。前より、髪が長くなった。
「レムリナ様」
泣き声が大きくなった。流れているだろう涙を拭ってあげたいが、顔が胸に押し付けられていて叶わなかった。子どものような泣き声に、この人が泣いているところを初めて見た、と気付いた。
「御足は、良くなられたのですね。地球にいらっしゃれば良いと、そう願っていました」
「勝手な人ね」
わあわあと声を上げつつ彼女は言った。確かに。こんな勝手な男はいないだろう。
「生きていて、良かった」
レムリナの言葉に、スレインはどうしたものかと立ち尽くした。
もっと早く、ちゃんと探して会いに来るべきだった。

「長い間、辛い思いをさせてしまいました」
「…全くよ」
顔を上げたのか、体が離れた。柔らかい皮膚が頬に触れる。レムリナの手だ。小さく柔らかくで、自分と同じくらいの温度の手。
「おかえりなさい。貴方の故郷へ」

『楽しみにしているのですよ。新しい王国も。貴方の故郷に行けることも』

あの時口をついた、自分の地球へ抱く憧憬と憎悪を、彼女は覚えているのだろうか。…覚えて、何度も反芻したに違いない。そういう人だ。
「地球は、素敵だわ。空も、海も、花も木も風も。不思議な生き物たち。朝や夜は、空気が変わるのですね」
まだ騎士ですら無かった頃、彼女に語った地球。美しい言葉で飾った。たとえ故郷ではなくとも、嘘でも真実でも、彼女は聞いた地球を愛した。

僕は、地球に捨てられた。火星にも入れなかった。残ったのは月と戦場だった。
その月も遠い。今では、はっきりと思い出せないくらいだ。
「でも、貴方のいない地球は綺麗なだけ。珍しいだけ。とても寒いの。心が」
唐突にレムリナが押し黙った。スレインの胸にしがみついた手がぐっと握られる。
「貴方が好きよ」
スレインは何も言わず微笑んだ。レムリナは手を離した。一歩遠退く。
「そう、貴方はいつもそう。…でもいいの。言いたかっただけよ」
スレイン、と。あの頃と変わらない、ほんの少し拗ねた声音で名を呼ばれた。
「私は、もう一人で立てるわ。私は貴方のものではないし、貴方は私のものでもない。あなたが生きている。それだけで十分」
また会えて、嬉しいわ。レムリナがスレインの手を握った。かつて何度も引いた手を握り返す。
「はい」

スレインはレムリナに界塚伊奈帆のことを話した。彼女の主治医が、界塚伊奈帆と同じ船に乗っていた船医だと聞いたからだ。

レムリナは連絡を取り、その医者と引き合わせてくれた。

「耶賀頼蒼真です」

手を引かれ、椅子に座る。耶賀頼の手は温かく、大きい。

「僕は…」

肩にぽん、とその手が乗った。続く、穏やかな声。

「いいよ。知っている。君に直接会えるとは、思っていなかった。よく生きていてくれたね」

…そんなことを言われるなんて。

耶賀頼が、スレインの手の中の球体を持ち上げた。手から離れ、微かな喪失感が胸を翳める。

「さて、このアナリティカルエンジンだけれど。伊奈帆くんの左眼窩で、脳と神経接続されていた。これをどこで？」

思い出すのは、伊奈帆の汗ばんだ冷たい手。

「界塚伊奈帆から、手渡されました」

『形見かな』

――――僕の手に残るのは、形見ばかりだ。

「僕は、彼を看取りました」

あんなに長い夜は無かった。あんなに一人ぼっちの夜も。

「…そうか。ありがとう。礼を言うよ。…友人として」

耶賀頼の言葉が胸に刺さった。伊奈帆には、友人も家族もいたのに。

彼に後悔はなかったのだろうか。

「…君はこれを、どうしたいと考えているのかな？」

はっとする。いけない。伊奈帆のことを考えると、袋小路に陥ってしまう。死んだ人間は、もう語ることはできない。

でも。残ったものがある。彼の記憶の欠片。

「…それは、初期化されていますか？」

「どういうことだい？」

「この目に入れたい。できれば、あいつの記憶を一緒に」
耶賀頼が低い声で僕の名を呼んだ。くん、なんてつけなくてもいいのに。
「賛成しかねるね。命を縮めることだ」
知っている。あんな殺しても死にそうにないやつが死んだ。拳銃で左目を撃っても死ななかったやつが。
「他人の記憶を得る、というのは一つの身体に二人で住むようなものだよ。精神が耐えられると思えない」
そうかもしれない。でも。
「見てみたい。あいつが見たもの」
そう、見たい。
「見るはずだったもの」
だって、それは。
「僕が奪った」
これから、あいつの未来。全ての綻びは、あの時。ノヴォスタリスクから。

僕が伊奈帆を殺した。
「…しばらく、ここにいなさい」
彼女も喜ぶ。ずっと、探していたんだから。
「ありがとうございます」
まだ、語り合うことができる。生きてさえいれば。

春風の中を歩く。きっと、隣を歩く人の髪は舞う桜のように見えるだろう。彼女からは目を逸らしてばかりだったが、この期に及んで、その姿が見えないことが惜しまれた。桜色の髪を揺らし、地球の大地を両足で踏みしめ歩く彼女の姿は、きっと素敵だ。
「地球に来て、貴方のことを考えない日はなかったわ」
少し鼻にかかる、囁くような声。

「死んだわけがないと思ったの」
理知的な話し方。
「忘れられないうちは、生きていると思ったわ」
素直な言葉。
不幸な生まれを背負い、運命に翻弄された女性。月にいた頃から、彼女は変わらない。真っ直ぐで、しなやかだ。
よく、生きていてくれた。本当に。
「スレイン」
「はい」
「界塚ユキさんを、ご存知ですね」
「はい。ここに僕を連れて来てくれました。他にも色々と、お世話になって」
レムリナが笑った。空気で分かる。
「とても優しい方だわ。私のことも気に掛けて、よくしてくれる」
草の香りがする。あと、昆虫の羽音。レムリナが「あれは蝶ですね」と囁いた。

「あの方が、一度、貴方のことを話したの。弟の、界塚伊奈帆さんのことも」
飛べる生き物は鳥だけではないと知った時、彼女は何を思っただろう。
「それで私、かっとなってしまって。全部しゃべっちゃったわ」
その現場を想像する。界塚ユキもレムリナも、自分の感情に率直な人間だ。
「泣いちゃったの」
レムリナが、スレインの手に触れた。細い指先に引かれて立ち止まる。これまでこの手に、何度触れただろう。
今繋いでいる手は、これまで幾度、自ら涙を拭ってきたのだろう。
「貴方は知らないでしょうけれど、私は泣き虫なのよ。貴方が知らないところでは、泣いてばかりいたんだから」
「申し訳ありません」
「謝ってどうするの」
「いえ…どうしましょう」
「もう、馬鹿ね」

繋いだ手が放れて、ぱし、と肩に軽い衝撃。レムリナの軽やかな笑い声。
「これからは、貴方の前でどんどん泣いてやるわ」
肩の手が放れた。手探りで手を伸ばす。彼女の手。触れた。ああ、やっぱり。
涙で、手が濡れている。
「ごめんなさい」
「…うんと、困らせてやるんだから」
この鼻声は、涙のせいだ。濡れた手の甲を両手で包む。手の甲に、雨のような雫が落ちた。

スレインが耶賀頼の病院に身を寄せ数日後、エデルリッゾがやって来た。
界塚ユキが、連絡を取ってくれたらしい。彼女はスレインの無事を喜び、レムリナとの再会に涙を流した。

「これから、お二人はどうなさるのですか？」
一頻り再会を喜び、これまでの経緯を話し終わると、エデルリッゾが聞いた。
「私は、足がもっと良くなったら旅をしようと思います。地球の景色をこの目で見てみたいわ」
ロビーのソファ、隣に座ったレムリナがそう言った。
「スレイン様は？」
「僕は…」
未来。そんなものは、自分には必要ないと思っていた。
「何かを、探しているんです。でも、それが何なのかわからない」
心が死んで、惰性で生きていた僕のたった一つの生きる意味。それは、アセイラム姫の幸せ。願っても何もできない無力な自分。彼女の思いを置き去りに願いを実現しようとした自分。願う資格を失った自分。ずっと僕は、生きながら死んでいた。生きる意味が、分からなかった。
だけど。
「界塚伊奈帆の残したアナリティカルエンジンをつければ、前に進める気がするんです」
エデルリッゾが息を呑む音が聞こえた。彼女は界塚伊奈帆と知り合いで、鍵を託された友人だ

った。
「危険ではないのですか？」
「分かりません。でも、もう、死ぬ気はありません」
生きる意味は、今でも分からない。生きていいていいのかさえも。でも、このまま死ねば、界塚伊奈帆の死は。言葉は。無駄になってしまう気がした。
あいつが一人であんな寂しい場所にいたのは、僕のせいだから。
…あの場所から。あの窓から。何が見えたのだろう。
「また、色んなものを見たい。あいつが見られなかったものも」
「そう。スレインも、旅をするのね」
レムリナの、少し弾んだ声音。
「旅…」
そうか、旅か。
旅をするのか。僕は。
「地球のどこかで、ばったり会うかもしれないわね。その時は、一緒に食事をしましょう」

可愛らしい思い付きに、つい笑みが浮かぶ。地球のどこか。レムリナと会い、彼女の後ろの空を見上げる。割れた月が、そこにいた時と変わらず白く浮かんでいるだろう。月の思い出を、地球の美しい風景の中、内緒話のように語る。あるかもしれない現実を想う。

ああ。これが、未来か。そして、夢。

面会の時に伊奈帆は、いつだって夢の話をしていたんだ。

「はい。喜んで」

約束よ、と小指を交わす。エデルリッゾが二人の名を呼んだ。

「また、日本にもお立ち寄りくださいね」

私は、お花と一緒に待っていますから。

「手順は、説明した通り。始めていいかい？」
手術室の寝台で、スレインは耶賀頼の言葉に頷いた。
アナリティカルエンジンを、左目奥の神経と接続する。
見えない目を閉じる。瞼の裏で、オレンジ色が瞬いた。
星と、波と、ストロボライトの光。あの時そしてそれまでの左目が、一体何を見ていたのか。
伊奈帆。お前が知りたい。
呼吸器から麻酔が注入され、意識が遠ざかる。最後に浮かんだのは、面会室の手の感触だった。

――――ああ、あの時。

「…手が冷たいな」
「冷え性なんだ」
「着こんでいるな」
「寒がりなんだ」

「冷たいか」
「…すごく」
「柔らかい肌だ」
「日本人だからね」
「…眼帯を、取ってもいいか？」
「いいよ」
「…額を、撃ち抜いたつもりだった」
「感想は？」
「…あたたかい。君は生きて、僕の前にいるんだな」
「僕も、君に触れていいかな」
「…ああ」
「…ここを」
「撃てばよかった？」
「そうだな」

「でも、僕は撃たなかった」
「たとえ時間が巻き戻ったとしても、撃たない」
「君が…どれだけ願っても、僕は君を殺さない」
「そうか」
「また会おう」

ああ。
この、大馬鹿野郎。
もっと、何かあるだろう。何も言わず来なくなって。普通、死んだと思うだろう。お前は僕を何だと思ってるんだ。僕が脱獄して、こんなところまで来られるなんて、よく思えるな。目も見えないんだぞ。
僕が行かなかったら、お前は一人で死んでいたんじゃないか。

伊奈帆——。

「目を開けてみて」
「はい」
視界、いや、画面は真っ暗だ。耶賀頼がパソコンのキーを操作して、電源コードを入力した。
ブウン、と脳が揺れる感じがして、視界に赤い文字と図形が映し出される。
界塚伊奈帆から譲り受けたアナリティカルエンジンは、拒否反応もなく、生体に馴染んだ。
「電源が入った。次に、同期を始めるよ」
ピピ、と機動音が耳に聞こえ、視界と脳にアナリティカルエンジンが能動的な干渉を始める。
ユーザー名を問われる。

「Inaho Kaidukа」

音声と思考で返答したその途端、バックアップがインストールされ、過去の記憶が脳へ送られる。久しぶりの視覚情報に、錆びついた脳が悲鳴を上げる。
まず視界。

そして音。
生々しい五感の感触。
伊奈帆の記憶。
自分のことのように、肉体が認識する。

――――暗い。一度、二度、光が差す。瞬きのリズム。視界がクリアになる。
白い病室の壁。
界塚ユキの顔。
リハビリ用の手すり。
連合軍の青い制服。
顔の前の階級章のついた袖。
様々な機械類。
軍の施設のホール。

軍用車。
青空。
カタフラクトのコックピット。
友人たち。韻子、ライエ、カーム、ニーナ。
ペンダント。
夕焼けに染まる空と海。
鳥の群れ。
星の中。
月の破片。
宇宙の色。
アセイラム姫。
涙。
言葉。
アストロスーツ越しの手。

タルシス。
大気圏の炎。
海辺。
標準を合わせた額。
下ろす銃の黒鉄。
焦点が結ばれていく先にあるのは――――。

――――二つの碧。

「伊奈帆…」
何だっていうんだ。何だっていうんだ。どうして。どうして、お前は。
僕を、探して。生かして。

どうしろっていうんだ。
これじゃあ、僕は。

――――お前を。

「もう行くの？」
界塚ユキの声。振り向く。彼女は風に靡かせた黒髪を右手で押さえた。
勝気そうな目元と耳の形が、伊奈帆に似ている。
「お世話になりました」
ユキが微笑む。笑った顔も、伊奈帆によく似ている。優しい顔だ。左目が、相槌を打つようにキュイ、とピントを細かく調整した。
こいつ、照れてるな。
風が頬に心地いい。もう、夏の風だ。
「お世話だなんて…。ここは、貴方の場所よ」
居場所。そんなもの、ずっと諦めていた。帰る場所なんて、自分には失われたと思っていた。
レムリナ。エデルリッゾ。界塚ユキ。
再会を願う人の存在が、こんなにも心を満たすなんて。
「帰ってきてね」
「ええ」

見上げた空。見える。分かる。空の色が。
白い雲が風で流れ。
飛ぶ鳥の形が小さくなる。
どこまでも青く続く、地球の空。
薄暗い部屋。大きなモニタ。隣には韻子がいる。荒い映像。アセイラムのふりをしたレムリナの姿。
『光が屈折し、空と海が青く見えるほどの沢山の水と空気を持つ———』
『違う』
ノイズ交じりのレムリナの声を、伊奈帆が遮る。
『空が青いのは、レイリー散乱だ』
スレインは笑う。声を上げて笑うのなんて、いつぶりだろうか。
全く、記憶の中でも細かいことをいちいち。情緒がないやつ。いいんだよ、嘘でもごまかしで

も。彼女たちはその地球を愛したんだから。

でも。

お前と、遮るものの何もない中で。この空を一緒に見ることができれば良かった。鬱陶しい小言も、我慢してやるのに。

「後悔ばかりだ。お前が死んでから」

伊奈帆の目が映す鮮明な視界は、思い出の景色と少し違う。瞳に映る、僕の記憶と、お前の記憶。そして、生きる僕が想うこと。

二人で旅をして、話をしよう。昔の話も、今の話も。この目に映る、未来の景色も。

「まず、何処に行こうか」

ピピ、と電子音。なるほど、確かに。そこしかないな。

「泣くかな」

――――いや。きっと、笑うだろう。

頭の中で、伊奈帆の声が聞こえた気がした。

あとがき

この本を手に取っていただき、ありがとうございます。Pixiv 再録本第四弾です。重い話ばかりで恐縮ですが、アルドノア・ゼロを自分なりに消化し本編後の彼らをかなり真剣に考えた時期に書いた文章で、自分にとって最終話を見つめなおした節目の話でもあります。

「Blue Bird～青い鳥のすみか～」　アセイラムの解釈は未だに難しいです。もしかしたらいつか、手放した手を愛おしく思う日が来るのではないかと…。もしそうなら、彼女が恋しく思うのは現実に今目の前にいるスレインではなく、過去の美しい思い出を形作ったスレインなのではないかと。そう思います。

◇イメージソング「箱庭～ミニチュアガーデン～」天野月子さん

「Blue Rain～祝福～」　ずっとずっと同じ場所で同じ人を想い続ける。生きながら。それって、すごく難しくて理想で夢でしかないかもしれないけれど、界塚伊奈帆はそういうことをする人だと思います。伊奈帆とスレインは、ハークライトさんから見たら似ていると思います。

◇イメージソング「アメノヒニキク」RADWIMPSさん

「Blue Sky～旅の空～」　本編の中でスレインが度々「僕に夢はない」という意味のことを口にしていて、自分なりの解釈をこれでもかとぶつけています。スレインは、とても強くて優しい人だと思っていま

す。

◇イメージソング「美しい名前」THE BACK HONEさん

「Heavenly Blue〜空の色〜」　「旅の空」の続編です。スレインが生きるってどういうことだろう、を本気で考えた結果です。この先どこへ行くのか。何をするのか。これまでの過酷な人生と、眼前に広がる遠大な未来。一人歩む孤独も、伊奈帆の記憶と伊奈帆との思い出があればスレインは大丈夫だろうって思います。スレインには長生きして欲しいです。

◇イメージソング「heavenly blue」Kalafinaさん

四方山話にお付き合いいただき、ありがとうございました。次の本でも、お会いできますように。

Special Thanks!

再録集の発行にあたり、IIIさんに表紙カバーを書き下ろしていただきました。畏れ多くも勇気を出してお願いしましたら快く引き受けてくださり、何と編集までお世話になりました。絵はもちろん、お人柄も神様でした。大好きです。傘を差す伊奈帆の脳裏にはスレインの笑顔。雨でモノクロに染まった世界と傘の中の色鮮やかな思い出…。切なくも美しい情景に、見る度涙腺が緩んでしまいます。本当にありがとうございました！

鳴海

Blue Bird, Blue Rain, And Blue Sky.

発行　Scramble/鳴海

発行日　2019.2.10　/　ZEROの方舟10

印刷所　（株）しまや出版様

Mail　jjncg720@yahoo.co.jp

Twitter　@narumiblue

PixivID　narumi07

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはご遠慮ください。